

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第419集

いいおか さわだ
飯岡沢田遺跡第5次発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

盛 岡 市
(財)岩手県文化振興事業団
埋 藏 文 化 財 センタ ー

い　い　お　か　さ　わ　だ

飯岡沢田遺跡第5次発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

序

豊かな自然に恵まれた岩手県には、旧石器時代をはじめとする数多くの貴重な遺跡や重要な文化財が遺されております。先人たちが創造し、遺してきたこれら多くの文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私たち県民一人ひとりに課せられた大切な責務であります。

その一方で、社会資本の充実を目指した地域開発等も県民の切実な願いであり、埋蔵文化財の保護・保存と開発という相容れない要素を持つ事業の、調和のとれた施策が今日的課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本書は、盛岡市による盛岡南新都市計画整備事業に関連した、飯岡沢田遺跡第5次調査の発掘調査結果をまとめたものであります。遺跡は、栗石川南岸の河岸段丘面上に立地し、古墳時代末期から平安時代までの古代を中心とする集落跡と近世の建物跡等が確認されています。

この報告書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに、埋蔵文化財に対する関心と理解を、より一層深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成にご協力とご支援を賜りました、盛岡市都市整備部盛岡南整備課や教育委員会をはじめとする多くの関係諸機関、関係各位に深く感謝申し上げます。

平成15年1月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 合 田 武

例　　言

1. 本報告書は、岩手県盛岡市飯岡新田第1地割81-2ほかに所在する、飯岡沢田遺跡第5次発掘調査の結果を収録したものである。

2. 本遺跡の、岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号と調査略号は、以下の通りである。

遺跡番号 LE16-2169

遺跡略号 I S D-02-5

3. 本遺跡の調査は、盛岡南新都市計画整備事業に伴う緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の調整を経て、盛岡市からの委託を受けた財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

4. 調査期間・調査面積・調査担当者は以下の通りである。

調査期間 平成14年4月9日～6月5日

調査面積 1,773m²

調査担当者 半澤武彦・久慈泰彦

5. 室内整理期間と整理担当者は以下の通りである。

室内整理期間 平成15年1月6日～平成15年3月31日

整理担当者 半澤武彦・久慈泰彦

6. 本報告書の執筆・編集作業についての一切は、半澤武彦が担当した。

7. 出土した遺物の分析・鑑定および保存処理にあたっては、次の機関にご協力をいただいた。(敬称略)

石材鑑定 花崗岩研究会(会長: 矢内桂三 岩手大学工学部教授)

炭化物同定 社団法人 岩手県木炭協会(早坂松次郎)

8. 基準点の測量および航空写真撮影は、次の機関に委託した。

基準点の測量 駒岩手開発測量設計

航空写真撮影 ホンシン技術コンサル

9. 野外調査・室内整理においては、以下の方々のご協力を頂いた。(敬称略)

【野外調査】 柳平重三郎・柳平ウメ・矢羽々加奈子・立花恵美・吉田悦子・吉田邦大・荒木清・佐藤イソ
村上トシ・大森節子・田沼美智子・岩崎智佐子・高山义子・川村初代・佐藤ヨシ・大坊秀子
吉田千鶴子・浅沼秀子・田口弘子

【室内整理】 吉田美香・目時益美・稲垣美由紀・阿部加奈子・下田美代子・阿部奈綾美・藤原奈美・吉田三枝子
木根亜希・今宮さつき・村上宏子

10. 遺跡の調査成果は、平成14年度調査分の岩手県埋蔵文化財発掘調査報告にも収録されているが、本書の内容が優先するものである。

11. 本遺跡の調査に関わる記録、遺物等の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

＜本文目次＞

序

例　言

I　調査に至る経過	10
II　遺跡の位置と環境	10
1. 遺跡の位置	10
2. 遺跡周辺の地形と地質	10
3. 周辺の遺跡	14
4. 地層の基本層序	14
III　野外調査と室内整理の方法	18
1. 野外調査	18
2. 室内整理	20
IV　検出された遺構と出土遺物	22
1. 積穴住居跡 (R A)	22
2. 積穴状遺構 (R E)	34
3. 土坑 (R D)	38
4. 周溝 (R Z)	44
5. 溝跡 (R G)	46
6. 掘立柱建物跡 (R B)	50
7. 柱穴列 (R C)	52
V　まとめと考察	78
報告書抄録	

＜図版・表目次＞

第1図 遺跡の位置及び遺跡周辺の地形図	11	第33図 出土遺物 (RA 018)	61
第2図 開発前の土地利用状況 （1990年代初頭）	12	第34図 出土遺物 (RA 018)	62
第3図 遺跡周辺地形分類図	13	第35図 出土遺物 (RA 018)	63
第4図 基本層序	14	第36図 出土遺物 (RA 018～020)	64
第5図 周辺の遺跡分布図	17	第37図 出土遺物 （RA 020～RD 083）	65
第6図 グリッド及び遺構配置図	19	第38図 出土遺物 （RD 083～RG 011）	66
第7図 実測図凡例	21	第39図 出土遺物 （弥生土器・遺構内、外）	67
第8図 RA 014 積穴住居跡	23	第40図 出土遺物（石器・石製品）	68
第9図 RA 015 積穴住居跡	25	第41図 出土遺物（土製品・陶磁器）	69
第10図 RA 016 積穴住居跡	26	第42図 出土遺物（陶磁器・鉄製品）	70
第11図 RA 017 積穴住居跡	27	第43図 出土遺物（鉄製品）	71
第12図 RA 018 積穴住居跡①	29	第44図 出土遺物（鉄製品）	72
第13図 RA 018 積穴住居跡②	31		
第14図 RA 019 積穴住居跡	32		
第15図 RA 020 積穴住居跡	33		
第16図 RE 003・004 積穴状遺構	35		
第17図 RE 005 積穴状遺構 RD 074・075 土坑	37		
第18図 RD 076～079 上坑	39		
第19図 RD 080～083 土坑	41		
第20図 RD 084～087 土坑	43		
第21図 RD 088・089 土坑 RZ 047 周溝	45		
第22図 RG 008 溝跡	47		
第23図 RG 010 溝跡	48		
第24図 RG 011 溝跡	49		
第25図 RB 001 掘立柱建物跡	51		
第26図 RB 002 掘立柱建物跡	53		
第27図 RC 001～003 柱穴列	55		
第28図 出土遺物 (RA 014～016)	56		
第29図 出土遺物 (RA 017)	57		
第30図 出土遺物 (RA 017)	58		
第31図 出土遺物 (RA 018)	59		
第32図 出土遺物 (RA 018)	60		

＜表＞

表1 周辺の遺跡一覧表	15
表2 遺物観察表	73

<写真図版目次>

写真図版1 遺跡全景（カラー写真）	87	写真図版33 柱穴列 (R C 0 0 1～0 0 3) ①	119
写真図版2 調査前風景	88	写真図版34 柱穴列 (R C 0 0 1～0 0 3) ②	120
写真図版3 RA 0 1 4 穴穴住居跡①	89	写真図版35 柱穴列 (R C 0 0 1～0 0 3) ③	121
写真図版4 RA 0 1 4 穴穴住居跡②	90	写真図版36 柱穴列 (R C 0 0 1～0 0 3) ④	122
写真図版5 RA 0 1 5 穴穴住居跡①	91	写真図版37 柱穴列 (R C 0 0 1～0 0 3) ⑤	123
写真図版6 RA 0 1 5 穴穴住居跡②	92	写真図版38 現地説明会・空撮・完掘全景	
写真図版7 RA 0 1 6 穴穴住居跡①	93		124
写真図版8 RA 0 1 6 穴穴住居跡②	94	写真図版39 出土遺物 (RA 0 1 4～0 1 7)	125
写真図版9 RA 0 1 7 穴穴住居跡①	95	写真図版40 出土遺物 (RA 0 1 7)	126
写真図版10 RA 0 1 7 穴穴住居跡②	96	写真図版41 出土遺物 (RA 0 1 7)	127
写真図版11 RA 0 1 8 穴穴住居跡①	97	写真図版42 出土遺物 (RA 0 1 8)	128
写真図版12 RA 0 1 8 穴穴住居跡②	98	写真図版43 出土遺物 (RA 0 1 8)	129
写真図版13 RA 0 1 9 穴穴住居跡①	99	写真図版44 出土遺物 (RA 0 1 8)	130
写真図版14 RA 0 1 9 穴穴住居跡②	100	写真図版45 出土遺物 (RA 0 1 8)	131
写真図版15 RA 0 2 0 穴穴住居跡	101	写真図版46 出土遺物 (RA 0 1 8～0 2 0)	132
写真図版16 RE 0 0 3 穴状遺構	102	写真図版47 出土遺物 (RA 0 2 0～RG 0 1 1)	133
写真図版17 RE 0 0 4 穴状遺構	103	写真図版48 出土遺物 (弥生土器・遺構内、外)	134
写真図版18 RE 0 0 5 穴状遺構	104	写真図版49 出土遺物 (弥生土器・石器・石製品)	135
写真図版19 土坑 (RD 0 7 4～0 7 7)	105	写真図版50 出土遺物 (土製品・陶磁器・鉄製品)	136
写真図版20 土坑 (RD 0 7 8～0 8 0)	106	写真図版51 出土遺物 (RD 0 7 8 土坑・馬骨)	137
写真図版21 土坑 (RD 0 8 1～0 8 4)	107		
写真図版22 土坑 (RD 0 8 5～0 8 8)	108		
写真図版23 土坑 (RD 0 8 9) 周溝 (R Z 0 4 7)	109		
写真図版24 RG 0 0 8 溝跡	110		
写真図版25 RG 0 1 0 溝跡	111		
写真図版26 RG 0 1 1 溝跡	112		
写真図版27 RB 0 0 1 掘立柱建物跡①	113		
写真図版28 RB 0 0 1 掘立柱建物跡②	114		
写真図版29 RB 0 0 2 掘立柱建物跡①	115		
写真図版30 RB 0 0 2 掘立柱建物跡②	116		
写真図版31 RB 0 0 2 掘立柱建物跡③	117		
写真図版32 掘立柱建物跡の復元 (RB 0 0 1)	118		

I 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた、北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地のほかに南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された十地区画整理事業である。

この事業は、平成2年9月に岩手県・盛岡市・旧都南村の三者が、地域振興整備公團に対して事業申請を行い、これを受けて公團は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土府長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積313haを対象とした上地区画整理事業が実施されることとなった。

飯岡沢田遺跡については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成14年度の事業として確定した。これを受けて、平成14年4月1日に（財）岩手県文化振興事業団理事長と盛岡市長との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。飯岡沢田遺跡の第5次調査は平成14年4月9日に開始され、同年6月5日をもって終了した。

（盛岡市都市整備部盛岡南整備課）

II 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

飯岡沢田遺跡が位置する岩手県盛岡市は、県のほぼ中央部に位置しており、近世以降、旧南部藩の城下町として栄えてきたとともに、現在でも行政・経済・文化施設の中核機能が集積しており、北東北の拠点都市として発展し続けている。

当遺跡は、JR東北本線盛岡駅の南側約2kmの、零石川南側右岸に形成された河岸段丘面上に立地しており、標高は123m前後で、調査を行う以前の土地利用状況は畑地・休耕地となっていた。前年度に調査を実施した第3次調査区と隣接するが、標高は本次調査区の方がやや低くなっている。

2. 遺跡周辺の地形と地質

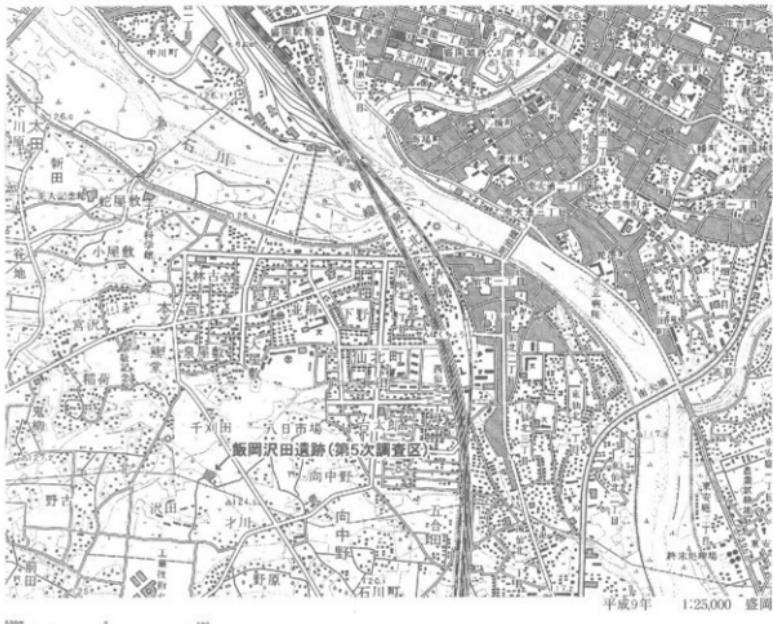
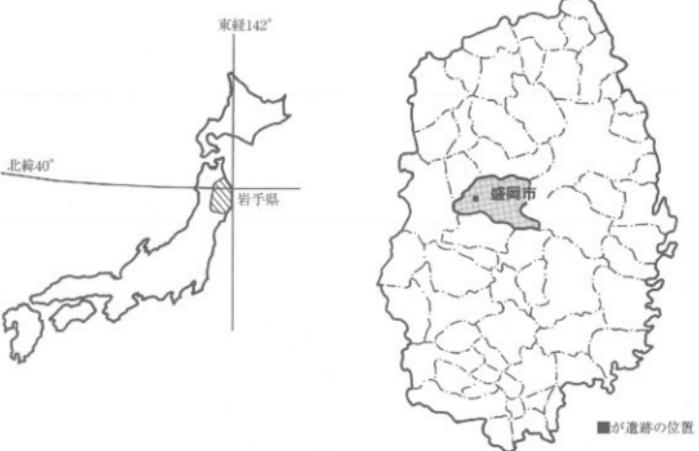
盛岡市は、北上川およびその水系に属する西側奥羽山系からの零石川、東側北上山系からの中津川が落ち合う冲積地に立地している。流れの中心をなす北上川は、源流が県北部の岩手郡御堂地内にあり、ここから南方向へ貢流しながら、太平洋へ流れ出る宮城県石巻市までの延長は243km、流域面積が10,720km²、支流数216河川という東北随一の大河川である。

この北上川流域は、源流から盛岡市以北までを「上流域」、ここから県南部の一関市孤禅寺峠谷までを「中流域」、以下河口の石巻市までを「下流域」として区分され、飯岡沢田遺跡が位置する一帯は、北上川中流域の上流部と、零石川の河口部が合流する地点付近に存在している。

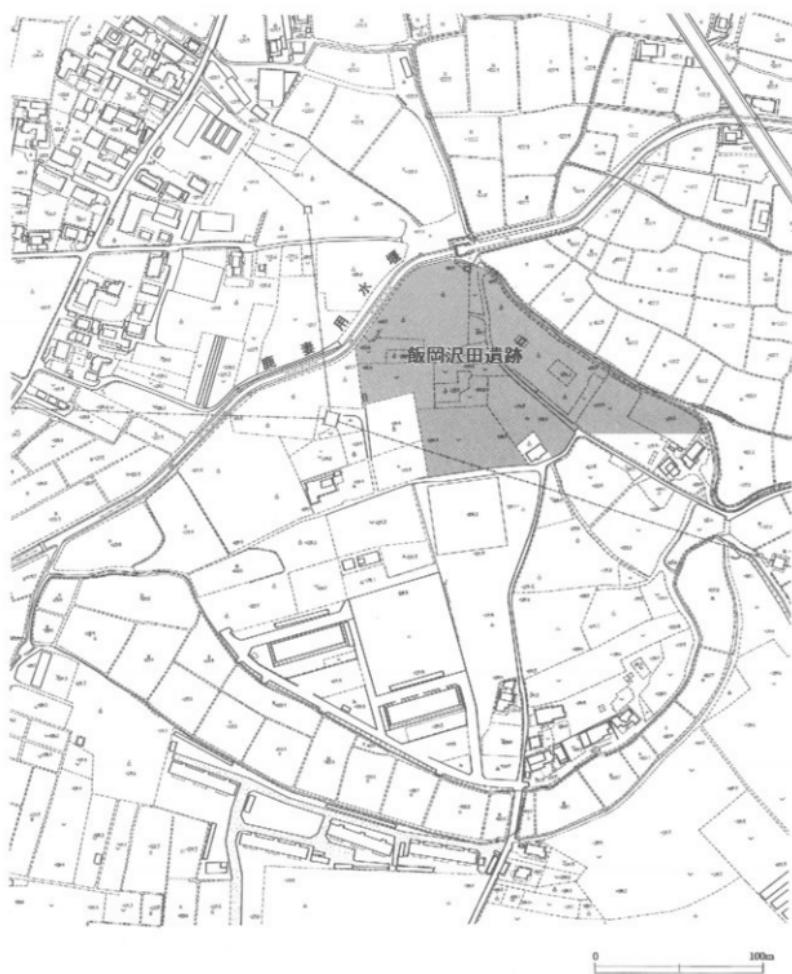
これらの河川が肥沃な耕作地や平野を提供し続けてきた一方で、過去には水害による氾濫が幾度も繰り返され、当遺跡の北西約3kmに存在した国指定史跡「志波城跡」は水害を克服できず、西暦803年に築城されてからわずか9年のうち、南東約10kmに位置する「徳丹城」へ機能を移すこととなったようである。

当遺跡一帯の地形図や航空写真を観察すると、耕地整理や都市化、区画整理が進んだ現在でも、河川が流路を何度も変えてきた痕跡を見て取ることができる。

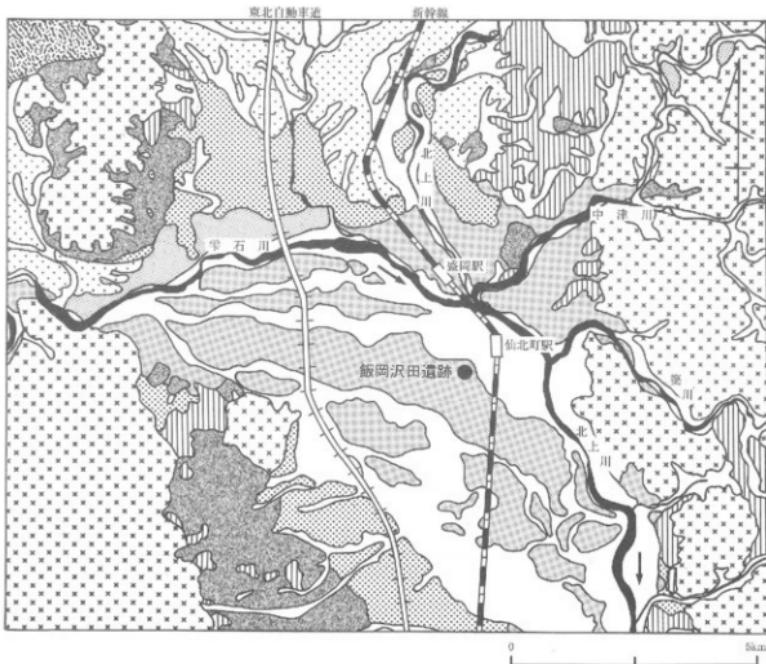
調査区域一帯の河岸段丘面は、一般に「都南段丘」（中川久夫他：1963）と呼ばれており、北上川・零石川との比高も小さい「低位段丘」で、長年に渡る解析を受けているため、その段差や境界が不明瞭となっている箇所が多く見られる。



第1図 遺跡の位置及び遺跡周辺の地形図



第2図 開発前の土地利用状況（1990年代初頭）



第3図　遺跡周辺地形分類図

3. 周辺の遺跡

平成14年4月の岩手県教育委員会のまとめでは、盛岡市内に500個所以上の遺跡が登録されている。第5図では、今回調査した遺跡が所在する市内本宮・飯岡地区周辺を中心に125個所の遺跡を紹介する。

本遺跡が立地する零石川南側右岸と一方の北側左岸とでは、遺跡の内容が対称的に分布している様子がうかがわれる。北側左岸の台地上には、大館遺跡群などの縄文時代の遺跡が分布しているが、南側右岸の段丘面上には一部の縄文期の陥し穴状遺構等を除き、志波城跡をはじめとする奈良～平安期を中心とした遺跡が数多く見られる。

4. 地層の基本層序

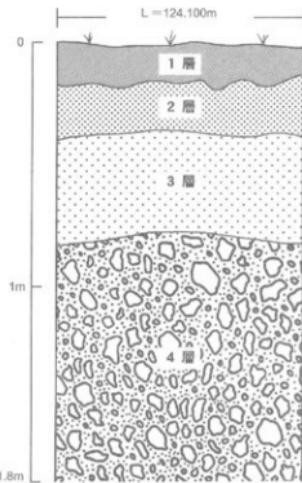
当遺跡における調査前の土地利用状況は、畠地・休耕地が主体で、全体が河岸段丘面とその縁を整地した平坦地となっていた。

小規模に区画された旧耕作地には複数の所有者が存在し、後年の耕作等による深い掘削痕が見られた個所があったものの、概して大規模な耕地整理・土地改良が施された様子などは見られず、表土以下の層序には大きな変化が見られなかった。

<基本層序>

調査区北側区域

- 1層：10YR2/3 黒色土 粘性弱 締まり密
(旧耕作土)
- 2層：10YR4/6 褐色土 粘性あり 締まりやや密
(遺構検出面)
- 3層：10YR4/6 褐色細砂 粘性なし 締まりやや密
(細かい根の擾乱が多い)
- 4層：10YR4/6 褐色細砂 粘性なし 締まりやや密
(礫層で、全体に径5～10cmの丸い自然礫を多く含む)



第4図 基本層序

表1 周辺の遺跡一覧表

NO	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
1	田面野木	散布地	縄文／古代	土器
2	猪去八幡館	城郭跡	中世	堀、郭
3	上猪去	集落跡	縄文／古代	縄文土器、土師器、土坑、孤立柱建物跡
4	綱田	散布地	平安	土師器
5	松ノ木	集落跡	平安	土師器
6	八ツ口	散布地	古代	土師器、住居跡
7	八卦	集落跡	古代	土師器、住居跡、土坑
8	太田駒ヶ森古墳群	古墳	奈良	土師器、刀、玉、和同開珎
9	館	集落跡	平安	土師器、住居跡、城館跡、堀、土壁
10	上野屋敷	散布地	古代	土師器
11	畠中	集落跡	古代	土師器
12	小沼	集落跡	平安	土師器、縄文陶器、住居跡
13	一本木	集落跡	平安	土師器、住居跡
14	五兵衛新田	集落跡	古代	土師器
15	天沼	集落跡	古代	土師器
16	竹鼻	集落跡	古代	土師器
17	志波城	城郭跡	平安	土器、孤立柱建物跡、門跡、築地、大溝
18	田貝	集落跡	古代	土師器、住居跡
19	竹前	集落跡	平安	土師器、縄文陶器、住居跡
20	新堀端	城郭跡	縄文／古代	土器(縄文晚期)、古代：住居跡、土師器、土坑、大溝
21	石仏	集落跡	古代	土師器
22	田中	散布地	平安	土師器
23	林崎	集落跡	平安	土器、孤立柱建物跡
24	小畠	集落跡	平安	土器、住居跡、孤立柱建物跡
25	大宮	集落跡	古代	土師器
26	大宮北	集落跡	平安	住居跡、土師器 <H 18 年調査>
27	鬼觸A	散布地	古代	土師器 <H 9 年調査>
28	小林	集落跡	古代	土師器
29	水門	集落跡	古代	土師器
30	上越場A	集落跡	古代	土師器
31	宮沢	散布地	古代	土師器 <H 18 年調査>
32	本宮熊堂A	集落跡	縄文	縄文土器(後・晩期) <H 8 年調査>
33	本宮熊堂B	集落跡	古代	土師器、須恵器、住居跡 <H 5・9・13・14 年調査>
34	鬼觸B	集落跡	古代	土師器
35	鶴舟	集落跡	古代	土師器
36	鬼觸C	集落跡	古代	土師器
37	野古A	集落跡	古代	土師器 <H 9・13・14 年調査>
38	野古B	散布地	古代	土師器
39	合谷郷	集落跡	古代／平安	土師器、住居跡、溝跡 <継続調査>
40	上平	集落跡	縄文／古代	土器(中～晩期)、土師器、住居跡
41	猪去館	城郭跡	縄文／古代	土器、土坑、住居跡、孤立柱建物跡
42	蟹沢下	散布地	古代	土師器
43	二ツ沢	散布地	縄文／古代	土師器
44	小和田館	城郭跡	中世	堀、郭
45	蟹沢	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
46	ヘビ堂	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
47	才坂	散布地	縄文／古代	縄文土器(早～晩期)、土師器
48	大ヶ森	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
49	辻屋敷	集落跡	古代	土師器
50	西田A	集落跡	古代	土師器
51	上越場B	集落跡	古代	土師器
52	西田B	集落跡	古代	土師器、須恵器
53	前田	集落跡	古代	土師器
54	向中野館	城郭跡	平安／中世	堀、住居跡、土器、須恵器
55	綱谷地	集落跡	古代	土師器 <H 12・13 年調査>
56	南仙北	集落跡	縄文／古代	縄文土器、土師器、住居跡
57	向中野町	集落跡	古代	土師器
58	飯岡沢田	集落跡・古墳	古代／近世	古墳群、墓葬群、骨壺器、集落跡 <H 13・14 年調査>
59	飯岡才川	集落跡	古代	輪穴式、土坑、濟 <H 10・12 年調査>
60	中村	散布地	平安	土師器、須恵器
61	月見山	散布地	縄文／古代	土器
62	山中	散布地	縄文／古代	土器(早・中期)、土師器

NO	遺跡名	種別	時代	遺 儀・遺 物
63	飯開館	城郭跡	中世	空堀、礪文土器(中期)
64	斐	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
65	高船古墳群	古 墳	奈良～平安	平安兼丁刀、切小刀、土師器
66	藤島II	散布地	平安？	土師器
67	高船	散布地	縄文	土器(中期)、石器
68	大傳I	集落跡	古代	土師器、須恵器
69	大傳II	散布地	古代？	土師器？
70	稻野前	散布地	縄文	土器(後期)
71	飯岡山館	城郭跡	中世	
72	飯岡赤坂	散布地	古代	
73	いたこ塚	聚落跡	近世	
74	赤坂II	散布地	平安？	土師器
75	羽場館	城郭跡	中世	空堀
76	羽場百日本	散布地	縄文	土器(中期)
77	妙子塚	散布地	古代	小屋
78	アイノ沢	散布地	縄文	土器(晚期)
79	因幡	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
80	本筋	集落跡	平安	
81	源千代	集落跡	奈良	
82	二又	散布地	古代	土師器、須恵器
83	内村	集落跡	平安	土師器、當滑
84	中屋敷	散布地	古代	土師器
85	酒島I	集落跡	縄文／古代	縄文土器、土師器
86	深洞I	集落跡	平安	住居跡
87	高尾敷	散布地	古代	須恵器
88	法樂御現塚	聚落跡		
89	飯岡林崎I	集落跡	古代	土師器、須恵器、楕、住居跡
90	飯岡林崎II	集落跡	平安	土師器 <H13・14年調査>
91	上新田	集落跡	平安	土師器、住居跡
92	深洞II	集落跡	平安	住居跡
93	上新田I	集落跡	平安	住居跡
94	下久根I	散布地	縄文／古代	縄文土器、土師器
95	石持	散布地	古代	土師器、須恵器
96	高尾敷II	散布地	平安	土師器、須恵器
97	西	集落跡	平安	土師器、住居跡
98	西田	集落跡	平安	須恵器
99	下久根II	散布地	縄文／古代	縄文土器
100	熊糸I	集落跡	縄文／古代	縄文土器、石器、土師器、住居跡
101	松島	集落跡	古代	土師器、須恵器
102	熊糸II	集落跡	平安	土師器、須恵器、住居跡
103	熊糸II	集落跡	平安	土師器、須恵器、住居跡
104	田中	集落跡	平安	土師器、須恵器、石器
105	南谷地	集落跡	平安	土師器、須恵器、住居跡
106	夕堂	散布地	古代	土師器
107	横屋	集落跡	古代	土師器、須恵器
108	葛木	散布地	古代	土師器、石器
109	新井田I	散布地	古代	土師器、須恵器
110	新井田II	散布地	古代	土師器、須恵器
111	新田	集落跡	平安	土師器、須恵器
112	間瀬I	散布地	古代	土師器
113	下羽場	集落跡	平安	土師器、須恵器、綠釉陶器
114	下湯沢	散布地	古代	土師器、須恵器
115	大馬	散布地	古代	土師器、須恵器
116	湯森	散布地	縄文	土器(晚期)、石器
117	湯森疑塚	斜 塚	中世	中世、常滑
118	後鳥	散布地	縄文	土器、石器
119	湯沢	散布地	縄文	土器(前期・中・後期)、石器
120	鳥	埴 墓	不明	小屋
121	小出I	散布地	古代	土師器
122	間瀬II	散布地	古代	土師器、須恵器
123	間瀬III	散布地	古代	土師器、須恵器
124	森子	散布地	古代	土師器
125	矢崎	散布地	縄文/古代/近世	陥入穴状遺構、住居跡、墓壙、割立柱建物跡 <H11・14年調査>



第5図 周辺の遺跡分布図

III 野外調査と室内整理の方法

1. 野外調査

(1) グリッドの設定

飯岡沢田遺跡のグリッド(区画)設定にあたっては、盛岡市教育委員会の方法に準じて行っている。飯岡沢田地区全域の調査座標は、平面直角座標第X系のX = -35,550.000, Y = +25,750.000が原点である。この座標原点を基点として、遺跡全体を1辺50m×50mの大区画に区割りを行い、さらに大区画を2m×2mの25小区画に細分している。大区画は原点から東方向にアルファベットの大文字でA～F、南方向には1～4の数字を付した。また、小区画は原点から東方向にアルファベットの小文字でa～y、南方向には1～25の数字を与えている。本調査区は、原点から南東側の大区画2 F～3 G区に位置している。

調査区内における各基準点の成果値と杭高(標高)は以下の通りである。(日本測地系)

基準点No 1	X = -35,650.000m	Y = +26,050.000m	標高 = 123.282m
補助点No 1	X = -35,670.000m	Y = +26,030.000m	標高 = 123.923m
補助点No 2	X = -35,670.000m	Y = +26,090.000m	標高 = 123.919m

(2) 粗掘りと遺構検出

本調査に先立ち、盛岡市教育委員会による試掘調査が周辺で実施されており、今回の調査対象区域の大部分について、遺構と遺物の状況がある程度把握されていた。調査開始にあたり、ほぼ全域にわたって溝遍なく2m×5m程度の試掘個所を設定し構の状況把握に努めた。この結果、調査区全域の層序が比較的単純でほぼ水平であることや、耕作土中(I層)の遺物が少であることなどから、粗掘りには重機(ハバショベル)を使用し、その後人力による遺構検出を順次実施した。

(3) 遺構の命名

検出された遺構の命名については、盛岡市教育委員会によるものに倣って付した。

堅穴住居跡…R A　　掘立柱建物跡…R B　　柱穴列…R C　　土坑・墓塚…R D　　堅穴状遺構…R E
溝跡…R G　　周溝を含むその他の遺構…R Z

(4) 遺構の構査と実測

検出された遺構は、堅穴住居跡と堅穴状遺構が4分法、その他の遺構は2分法を原則として精査を行い、遺構によっては必要に応じて適宜併用した。記録として必要な図面は、精査の各段階において作成している。

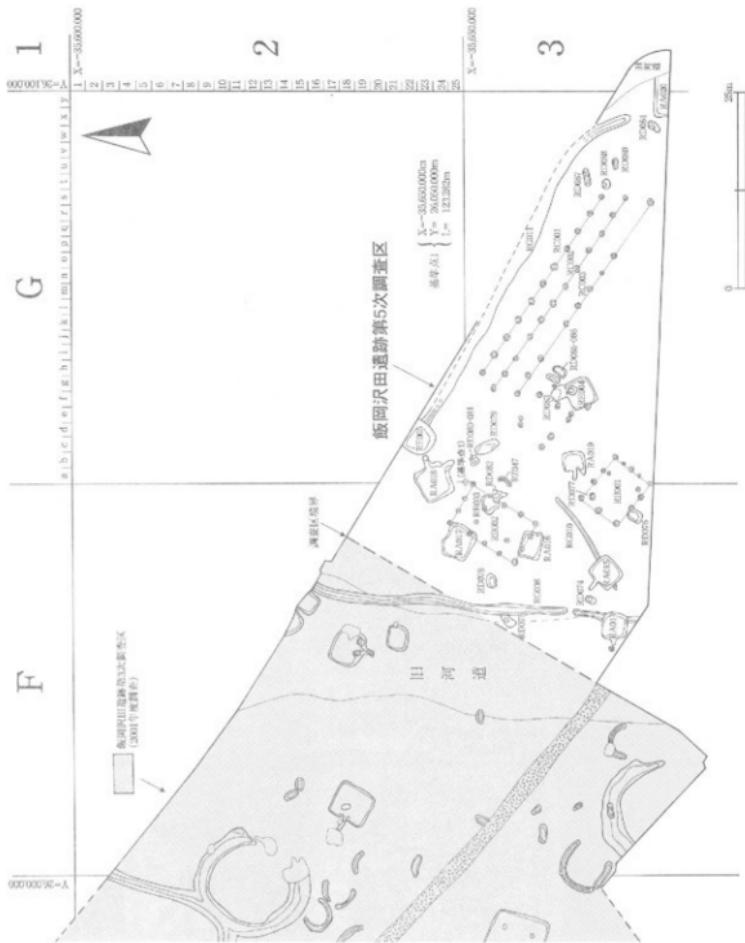
堅穴住居跡や掘立柱建物跡・土坑等の平面実測は簡易遺り方測量で行い、壠・溝跡・周溝等は主に平板測量で作図した。各実測図(平面図・断面図)の縮尺は1/20を基本として、堅穴住居跡のカマド施設の断面図は1/10、その他規模の大きな遺構等は1/50である。遺構内の出土遺物等で特徴のあるものは必要に応じて番号を付し、作図・写真撮影を行った。

(5) 写真撮影

野外調査での写真撮影は、6×7cm判カメラ(白黒)と35mm判カメラ(白黒・カラーリバーサル)を使用し、この他にボラロイドカメラ・デジタルカメラ各1台をフィールドカード作成等のメモ的な用途に併用した。撮影にあたっては、撮影内容を記載した撮影カードを対象物の撮影前に撮影挿入し、整理の際の手間を低減した。また調査終了前にラジコンヘリコプターによる航空撮影を実施した。

(6) 広報活動

埋蔵文化財に対する啓蒙活動の一環として、平成14年5月25日に調査成果を公開する現地説明会を開催し、雨天にもかかわらず約50名の参加があった。



第6図 グリッド及び遺構配置図

2. 室内整理

(1) 作業手順

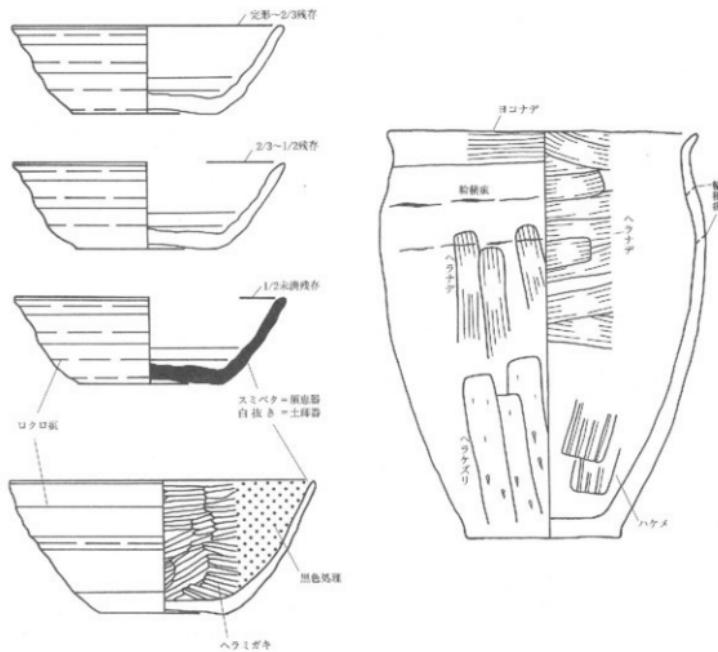
室内整理は現場で洗浄した遺物の注記作業から開始し、遺物毎の仕分け、接合復元、実測作業、拓本、遺物と遺構のトレース、遺物の写真撮影、遺物と遺構の図版作成、写真図版作成の順に作業を進めた。これらの作業と並行して遺物の計測、原稿の執筆、各種遺物の鑑定・分析を行い報告書に掲載した。

(2) 遺構

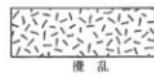
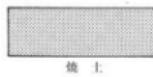
報告書図版中における各遺構図面は一部に縮尺を変更したものもあり、図面にはそれぞれスケールを付した。なお、平面図における方位矢印は座標北を示している。

(3) 遺物

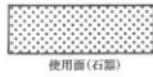
土器と陶磁器の実測は、原則として反転実測が可能なものと、一部には破片実測も併せて掲載した。土器の残存率については、口縁上端部の表現で区別している。土器の器面調整は、中軸線の両側の半分を模式的に図化した。図版の縮尺率は原則として原寸～ $1/2$ であるが、大型の遺物については、適宜スケールを付した。



(遺構)



(遺物)



第7図 実測図凡例

IV 検出された遺構と出土遺物

<概要>

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代末期～平安時代を中心とした竪穴住居跡が7棟、竪穴状遺構が3基、溝跡3条、土坑16基、近世の掘立柱建物跡が2棟、近世～近代の柱穴列が3列検出されている。

出土した遺物は、竪穴住居跡からの上師器や須恵器の壺・甕等が大部分であるが、土師器や赤焼き土器が大部分を占めており、須恵器の出土はごくわずかである。北西側の土坑1基からは、近世のものと思われる馬の歯と骨の一部が出土している。

1. 竪穴住居跡 <RA>

時代によってやや偏りはあるものの、調査区の中央から北西寄りにかけて竪穴住居跡が分布している。全住居跡7棟のうち、古墳時代末期と思われるものが1棟、奈良時代2棟、平安時代が4棟となっており、古墳時代末期から奈良時代にかけてのものは、調査区の南西部に集中して検出されており、重複することなくほぼ独立して構築されているのが特徴的である。

R A 0 1 4 竪穴住居跡（第8図・写真図版3・4）

<位置・重複関係> 調査区の南西端3F区に位置し、基本層序2層の上面と旧河道の黒色埋土上面との境界付近から検出された。RG008溝跡と一部が重複しているが、本遺構のほうが新しい。

<規模・平面形・方向> 平面の計測値は3.1×2.9mで、床面積は約9m²、平面形はほぼ隅丸の正方形を呈し、カマドを基準とした主軸方向はN-80°-Wで西に偏った北西方向を示している。

<埋土> 自然堆積と思われ、黒色土・黒褐色土が主体を占める。

<壁> 床面から緩やかに立ち上がり、残存する壁高は10～22cm、全体に浅いU字状を呈する。壁溝は検出されていない。

<床面> 旧河道に近いためか床面には小径の自然礫層が露出しており、8cm程度の貼り床が確認された。

<カマド> 北西壁のはば中央に位置している。カマドの焚き口に焼土が分布しているが、上部が削平を受けているため残存状況はよくない。そぞ部分は一部地山を削りだして形成されているものと思われ、煙道は煙出しに向かって「くの字」に落ち込む割り抜き式の形態である。

<付随土坑・ピット> 煙出し付近から1基の柱穴状ピットが検出されているが、本遺構に伴うものであるかは不明のため、PP8として別の遺構番号を付し計測・記載した。

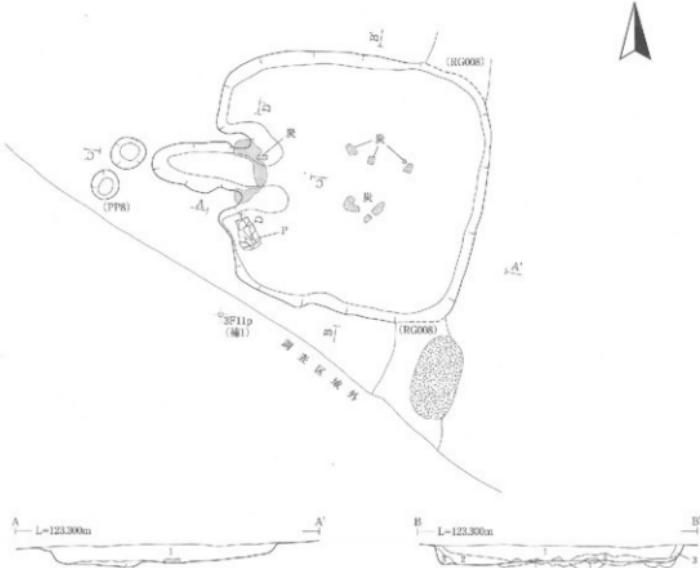
PP8	
径(cm)	37×30
深さ(cm)	14

<出土遺物> カマドの左脇から、ほぼ完形に復元できた上師器の壺（遺物No.1）が潰れた状態で出土した程度で、出土量はわずかである。

<時期> 出土遺物から、奈良時代の遺構と推定される。

R A 0 1 5 竪穴住居跡（第9図・写真図版5・6）

<位置・重複関係> 調査区の南西端3F区に位置し、基本層序2層の上面から検出された。RG010溝跡と一部が重複しているが、本遺構のほうが新しい。



R A 0 1 4 穫穴住居跡 塵土 (A - A' , B - B')

1. 10Y Rz/2 黒褐色土 粘性やや有り 細まりやや密
(炭化物と塊土をわずかに含む)
2. 10Y Rz/3 黒褐色土 粘性やや有り 細まり密
(塊山ブロックを20~30%含む)
3. 10Y Rz/4 黑褐色土 粘性やや有り 細まり密
(黒褐色土のブロックを少しあむ。壁の崩落土?)
4. 10Y Rz/6 黑褐色土 粘性やや有り かたく締まる
(黒褐色土のブロックを20%含む。詰り土)

0 1'00 2'm



R A 0 1 4 穫穴住居跡 カマド (C - C' , D - D')

1. 10Y Rz/2 黑褐色土 粘性やや有り 細まり密
(炭化物と塊土をわずかに含む)
2. 10Y Rz/3 黑褐色土 粘性やや有り 細まりやや密
(炭化物と塊土をわずかに含む)
3. 10Y Rz/4 黑褐色土 粘性やや有り 細まり密
(黒褐色土と塊土のブロックを10%含む。カマド天井の崩落土?)
4. 10Y Rz/3/4 黑褐色土 粘性有り かたく締まる
(塊土を40%程度含む)
5. 10Y Rz/2 黑褐色土 粘性有り 細まり密
6. 10Y Rz/4 黑褐色土 粘性やや有り かたく締まる
(カマド底での崩落土?)
7. 塵土
8. 10Y Rz/1 黑褐色土 粘性有り かたく締まる
(炭化物と塊土のブロックを5%含む)
9. 10Y Rz/2 黑褐色土 粘性やや有り 細まり密
(炭化物と塊土のブロックを10%含む)
10. 10Y Rz/1 黑褐色土 粘性やや有り 細まり密
(炭化物と塊山ブロックを20%と、塊土をわずかに含む)
11. 10Y Rz/3 黑褐色土 粘性やや有り 細まり密
(塊山土との混合土)
12. 10Y Rz/2 黑褐色土 粘性有り 細まりやや密
(塊山ブロックを20%、炭化物を少含む)

0 1'30 3'm

第8図 R A 0 1 4 穫穴住居跡

＜規模・平面形・方向＞ 平面の計測値は3.3×3.1mで、床面積は約10.2m²、平面形はほぼ隅丸の正方形を呈し、主軸方向はN-45°-Wで北西方向を示している。

＜埋土＞ 自然堆積と思われ、黒褐色土が主体を占める。

＜壁＞ 床面から緩やかに立ち上がり、残存する壁高は10~19cm、遺構上面が削平を大きく受けているため全体に皿状を呈する。壁溝は検出されていない。

＜床面＞ 旧河道に近いためか床面には小径の自然礫層が露出しており、8cm程度の貼り床が確認された。

＜カマド＞ 北西壁のほぼ中央に位置している。カマドの焚き口に若干の焼上が分布しているが、上部が大きく削平を受けていたため煙道・煙出しとともに残存状況はよくない。そこで部分は一部地山を削りだして形成されているものと思われる。

＜付随土坑・ピット＞ 遺構内から検出されたピット類は以下の通りである。

	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4
径(cm)	25×25	24×20	26×23	18×17
深さ(cm)	19	17	9	9

＜出土遺物＞ カマドとは対称的な位置にある南側壁面付近から、丸底で内外面に段と黒色処理が施された、古墳時代末期の特徴をもつ土師器の环が2点(№3・4)出土しているものの、出土量はごくわずかである。

＜時期＞ 出土遺物から、古墳時代末期の遺構と推定される。

R A 0 1 6 積穴住居跡（第10図・写真図版7・8）

＜位置・重複関係＞ 調査区の西侧3F区に位置し、基本層序2層の上面から検出された。R B 002掘立柱建物跡と一部が重複しているが、本遺構のほうが古い。

＜規模・平面形・方向＞ 平面の計測値は3.2×2.3mで、床面積は約7.4m²、平面形は隅丸の長方形を呈し、主軸方向はE-17°-Sで南東方向を示している。

＜埋土＞ 黒褐色土が主体となった自然堆積と思われるが、1層に含まれるブロック状の土和田a降下火山灰は、二次堆積によるものと推定される。

＜壁＞ 床面から緩やかに立ち上がり、残存する壁高は10~17cm、全体に浅いU字状を呈する。壁溝は検出されていない。

＜床面＞ 床面には小径の自然礫層が露出しており、4~15cm程度の貼り床が確認された。

＜カマド＞ 南東隅に位置しているが、上部が大きく削平を受けており、カマドの焚き口付近に焼上がわずかに分布するのみで、煙道・煙出しは検出されていない。カマドのそで部分は自然礫と、一部地山を削りだして形成されているものと思われる。残存状況が良くないため詳細は不明であるが、若干残っていた煙道が上向きであったことから、煙出しに向かってゆるやかに立ち上がる形態の可能性も考えられる。

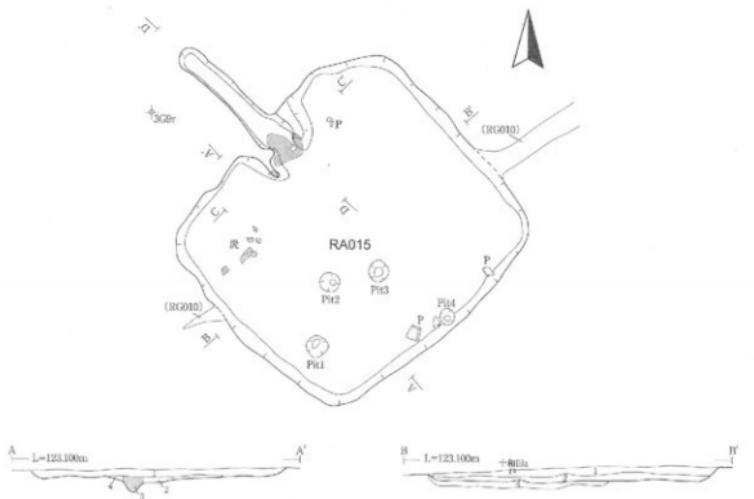
＜付随土坑・ピット＞ 検出されていない。

＜出土遺物＞ カマド付近から土師器の甕(№6)のほかに、外面に指紋が確認できるほどの明瞭なナデ痕が残る赤焼きの环(№5)が出土している。

＜時期＞ 出土遺物から、平安時代の遺構と推定される。

R A 0 1 7 積穴住居跡（第11図・写真図版9・10）

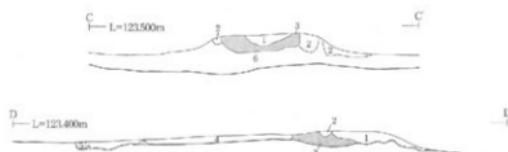
＜位置・重複関係＞ 調査区の北西端2F区に位置し、基本層序2層の上面から検出された。R B 002掘立柱建物跡と一部が重複しているが、本遺構のほうが古い。



R A 0 1 5 竪穴住居跡 墓土 (A - A' , B - B')

1. 10Y R2/1 黒色土、粘性やや有り 締まりやや密
(堆積中に塊状ブロックを10%含む)
2. 10Y R2/1 黒褐色土、粘性やや有り、かたく締まる
(地山がブロックを30-40%含む、堅り度の一級?)
3. 10Y R1/2 黑褐色土、粘性やや有り 締まりやや弱
(底部に小種の塊が分離する)
4. 10Y R4/6 黄色土、粘性やや有り かたく締まる
(黒色土のブロックを10%含む、堅り度)

0 1:60 2m

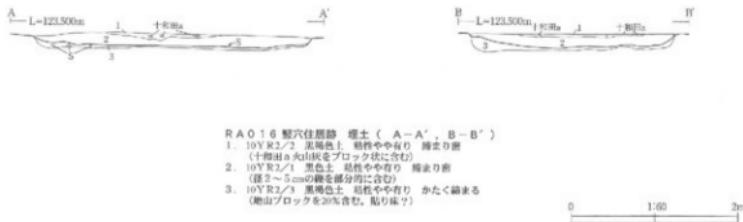
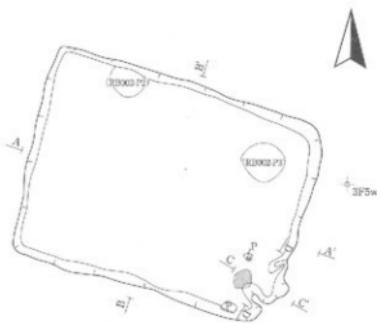


R A 0 1 5 竪穴住居跡 カマド (C - C' , D - D')

1. 10Y R2/1 黒色土、粘性やや有り 締まりやや密
(地山と堆土のブロックを10%含む)
2. 10Y R2/1 黒褐色土、粘性やや有り 締まりやや密
(黒褐色土のブロックを30%含む)
3. 10Y R3/4 黑褐色土、粘性やや有り 締まりやや密
(焼土が僅かに混入する)
4. 10Y R2/3 黑褐色土、粘性やや有り 締まりやや密
(焼土が下部に混入し、炭化物も部分的に含む)
5. 10Y R4/6 黄色土、粘性やや有り 締まりやや密
(崩落土?)
6. 10Y R4/6 黄色土、粘性やや有り 締まりやや密
(中・下層に厚さ2-10cmの繊を含む)

0 1:30 1m

第9図 R A 0 1 5 竪穴住居跡



- R A O 1 6 壺穴住居跡 カマド（C—C'，D—D'）
- 10YR 2/2 黒褐色土、粘性やや有り 緩まり密
(地盤を含む部分のみで2%を超える)
 - 10YR 3/2 黒褐色土
 - 3 黒褐色土、粘性やや有り 緩まり密
 - 10YR 1/2 黒褐色土、粘性やや有り 緩まりやや密
(地土を全部含む場合)
 - 10YR 2/3 黑褐色土、粘性やや有り 緩まりやや密
(カマドのそと部分?)
 - 10YR 5/6 白色細砂 粘性弱 緩まり弱

0 1:60 1m

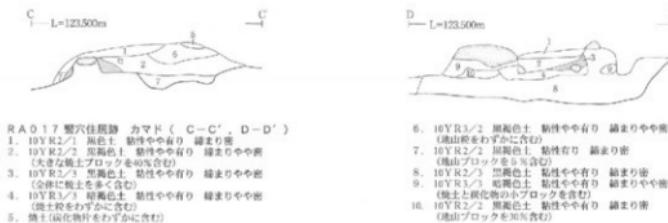
第10図 R A O 1 6 壺穴住居跡



RA 017 竪穴住居跡 P i t 1 ~ 3 墓土 (E—E' , F—F')

1. 10YR 2/2 黒褐色土 粘性有り 締まりやや密
2. 10YR 2/3 黒褐色土 粘性有り 締まりやや密 (小径の土をわずかに含む)

0 160 2m



0 130 1m

第11図 RA 017 竪穴住居跡

＜規模・平面形・方向＞ 平面の計測値は $3.8 \times 3.2\text{m}$ で、床面積は約 12.2m^2 、平面形は隅丸の長方形を呈し、主軸方向はE- 24° -Sで南東方向を示している。

＜埋土＞ 自然堆積と思われる、黒褐色土が主体を占める。

＜壁＞ 床面からやや緩やかに立ち上がり、残存する壁高は8~25cm、全体に浅いU字状を呈する。壁溝は検出されていない。

＜床面＞ 床面には小径の自然礫層が露出しており、5cm程度の貼り床が確認された。

＜カマド＞ 南東隅に位置しているが、上部が大きく削平を受けており、カマドの焚き口付近に焼土が分布するのみで、煙道・煙出しは検出されていない。カマドのそで部分は、大径の自然礫と一部地山を削りだして形成されているものと思われ、芯材に使用された一部の礫は、RB002掘立柱連物跡の柱穴によってえぐり抜かれていた。残存状況が良くないため詳細は不明であるが、若干残っていた煙道が上向きであったことから、煙出しに向かってゆるやかに立ち上がる形態の可能性も考えられる。

＜付随土坑・ピット＞ 遺構内から検出されたピット類は以下の通りである。

	Pit 1	Pit 2	Pit 3
径(cm)	48×40	63×48	30×25
深さ(cm)	7.0	12.0	21.0

＜出土遺物＞ 出土遺物が多い遺構で、登録した遺物は30点ある。このうち甕は2点のみで、他は土師器・赤焼きの环で占められ、高台环(№15)も1点含まれている。赤焼きの出土数は土師器をやや上回り、特徴のあるものとしては、口縁部にアスファルトが付着するもの(№8)や、底部に制止糸切り痕が残るもの(№22・24)などが挙げられる。

＜時期＞ 出土遺物から、平安時代の遺構と推定される。

R A 0 1 8 積穴住居跡（第12・13図・写真図版11・12）

＜位置・重複関係＞ 調査区の北西端2F区と2G区の境界付近に位置し、基本層序2層の上面から検出された。重複関係はない。

＜規模・平面形・方向＞ 平面の計測値は $4.0 \times 3.7\text{m}$ で、床面積は約 14.8m^2 、平面形はほぼ隅丸の正方形を呈し、南北カマドを基準とした主軸方向はE- 60° -Sで南東方向を示している。

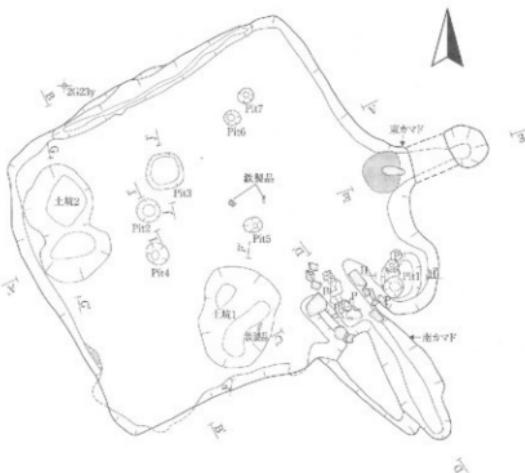
＜埋土＞ 黒褐色土が主体のやや複雑な堆積状況を示すが、自然堆積と思われる。3層に含まれる小プロック状の十和田a降下火山灰は、二次堆積によるものと推定される。

＜壁＞ 床面からやや急に立ち上がり、残存する壁高は23~36cm、全体にU字状を呈する。壁溝は北西壁面付近からのみ検出されている。

＜床面＞ 自然礫の露出はなく全体的になだらかであるが、少量の炭化物片を含む貼り床は、厚いところで20cm程度施されている。

＜カマド＞ 南東と北東の壁面から2基のカマドが検出された。北東側のカマドは削り抜き式で煙道・煙出しとともに残存していたが、支脚またはカマドの芯材の一部として使用されたものと思われる礫1点を除き、そで部分の痕跡は確認できなかった。おそらくカマド廃棄後、床面に張り出すそで部分を撤去していく可能性が考えられる。

一方の南東側で検出されたカマドには、両袖に大径の角張った自然礫が多く使用されており、焼土痕も明瞭である。焚き口付近には甕・环などの遺物が集中しており、煙道は煙出しに向かって落ち込む形態の削り抜き式であったと考えられるが、煙道の脇にはカマドを造り替えた痕跡が僅かに残っていた。



RA 018 積穴住居跡 塵土 (A-A' , B-B')

1. 10YR 2/2 黒褐色土 粘性やや有り 細まり密
2. 10YR 2/2 黒褐色土 粘性やや有り 細まり密
(地山ブロックと板土ブロックを含む)
3. 10YR 2/3 黒褐色土 粘性やや有り 細まりやや密
4. 10YR 2/3 黒褐色土 粘性やや有り 細まりやや密
(地山ブロックと十種類の火成岩の小ブロックを一部に含む)
5. 10YR 2/4 黒褐色土 粘性やや有り 細まりやや密
(底部の重泥)

6. 10YR 2/3 黑褐色土 粘性やや有り 細まり密
(地山ブロックを約8%含む)
7. 10YR 2/3 黑褐色土 粘性有り 細まり密
(地山ブロックを20%含む。易い床の一例?)
8. 10YR 2/3 黑褐色土 粘性やや有り 細まりやや密
(底部と地盤の火成岩ブロックを多く含む)
9. 10YR 2/3 黑褐色土 粘性やや有り かたく細まる
(地山ブロックを約5%と、少量の火成岩を含む。貼り床)



RA 018 積穴住居跡 土坑 1 (F-F')

1. 10YR 2/2 黒褐色土 粘性やや有り 細まり密
(地山ブロックを30%と、粘土ブロックをわずかに含む)



RA 018 積穴住居跡 土坑 2 (G-G')

1. 10YR 2/2 黒褐色土 粘性やや有り 細まりやや密
(地盤上の火成岩を約10%含む)
2. 10YR 2/2 黒褐色土 粘性やや有り 細まり密
(地山ブロックを全体に約50%含む)

0 1.60 2m

第12図 RA 018 積穴住居跡①

＜付隨土坑・ピット＞ 遺構内から検出された付隨土坑・ピット類は以下の通りである。

	土坑2	土坑2	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7
径(cm)	25×25	24×20	26×23	18×17	25×25	24×20	26×23	18×17	18×17
深さ(cm)	24	17	23	21	46	30	12	8	5

＜出土遺物＞ 本次調査のなかで最も出土量が多い遺構で、登録した遺物だけでも60点ある。このうち上師器・赤焼きの壺は全体の約3分の2で、他は上師器の甕となっている。特徴のあるものとしては、赤焼きで柱状高台をもつ壺(No.37)、口縁部や体部にアスファルトが付着する土師器・赤焼き壺(No.42・59)、口唇部に緩やかな沈線と、底部に回転式切り痕が残る小型の赤焼き甕(No.75)などが出土している。

＜時期＞ 出土遺物から、平安時代の遺構と推定される。

R A O 1 9 積穴住居跡（第14図・写真図版13・14）

＜位置・重複関係＞ 調査区の中央西寄り3G区に位置し、基本層序2層の上面から検出された。重複関係はない。

＜規模・平面形・方向＞ 平面の計測値は2.4×2.4mで、床面積は約5.8m²、平面形は隅丸の正方形を呈し、主軸方向はW-12°-Sで西に偏った南西方向を示している。

＜埋土＞ 自然堆積と思われ、全体に小径の礫を少量含んだ黒色土が主体である。

＜壁＞ 床面からやや急に立ち上がり、残存する壁高は20~32cm、全体にU字状を呈する。壁溝は検出されていない。

＜床面＞ 床面はなだらかで自然縫隙の露出はなく、貼り床も確認されていない。

＜カマド＞ 西壁のほぼ中央に位置しており、そで部分は一部地山を削りだして形成されているものと思われる。煙道・煙り出しとともに残存状況は良好で、カマド右そで脇の壁面には、貯蔵穴としての用途が考えられる横方向に掘り込まれた穴が検出されている。

＜付隨土坑・ピット＞ 検出されていない。

＜出土遺物＞ 遺構の残存状況は、他の住居跡と比較して良好だったものの、出土した遺物は少なく、特徴のあるものとしては、外面に段が確認できる丸底で内黒の土師器の壺(No.93)程度である。また、床面北東隅付近から柱状の短い炭化材があわせて出土している。

＜時期＞ 出土遺物から、奈良時代の遺構と推定される。

R A O 2 0 積穴住居跡（第15図・写真図版15）

＜位置・重複関係＞ 調査区の南東端3G区と3H区の境界付近に位置し、基本層序2層の上面と、旧河道の黒色埋土上面との境界付近から検出された。大半が旧河道と重複している。

＜規模・平面形・方向＞ 平面の計測値は4.0×1.7m(残存値)で、床面積は約6.8m²(残存値)、平面形はほぼ隅丸の方形を呈するものと推定される。壁面を基準とした軸方向はN-0°で真北を示している。

＜埋土＞ 壁土が薄く、旧河道と重複しているところもあり詳細は不明であるが、大部分は自然堆積と思われ、全体に細かい砂礫が含まれている。

＜壁＞ 床面から緩やかに立ち上がり、残存する壁高は8~40cm(残存値)、全体に浅いU字状を呈する。壁溝は検出されていない。

＜床面＞ 旧河道と重複し、残存状況が良くないために詳細は不明であるが、一部に5cm程度の貼り床が確認された。



RA 018 積穴住居跡 Pit 1 (H-H')
1. 10YR 2/2 黒褐色土 基性有り 締まりやや密
(地土をわずかに40%含む)

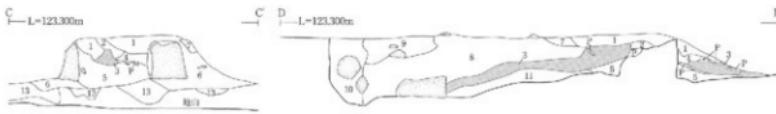


RA 018 積穴住居跡 Pit 2 (I-I')
1. 10YR 3/2 黒褐色土 基性やや有り 締まりやや密
(地山ブロックを20%含む)



RA 018 積穴住居跡 Pit 3 (J-J')
1. 10YR 2/2 黒褐色土 基性有り 締まりやや密
(地土をわずかに含む)

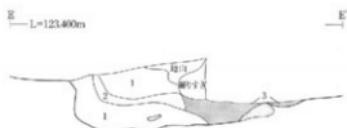
0 1:60 2m



RA 018 積穴住居跡 斧マード (C-C', D-D')

- 10YR 2/2 黒褐色土 基性有り 締まりやや密
(地土と地山ブロックをわずかに含む)
- 10YR 4/6 黒褐色土 基性有り 締まりやや密
(地土と地山ブロックを約5%含む)
- 10YR 3/4 黒褐色土 基性やや有り 締まりやや密
(地土を全部に30%含む)
- 10YR 2/2 黒褐色土 基性有り 締まりやや密
(地土を全部に含む)
- 10YR 2/2 黒褐色土 基性やや有り 締まりやや密
(地土のブロックと地化物質を全部に含む。カマドのそで上)

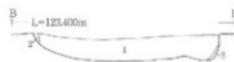
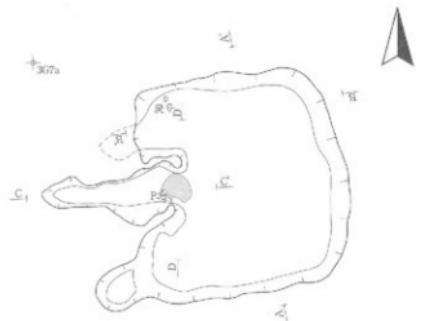
- 10YR 2/2 黒褐色土 基性有り 締まりやや密
(地山ブロックをわずかに含む)
- 10YR 2/2 黒褐色土 基性有り 締まりやや密
(地1-30cmにかけて地化物質を含む)
- 10YR 2/2 黒褐色土 基性有り 締まりやや密
(地化物質と小碎きを含む)
- 10YR 2/2 黒褐色土 基性有り 締まりやや密
(地化物質と地山ブロックを含む)
- 10YR 2/2 黒褐色土 基性有り 締まりやや密
(地化物質をわずかに含む)
- 10YR 3/2 黒褐色土 基性やや有り 締まりやや密
(地土と地山ブロックを5~30%含む。カマド作り替入の跡)



RA 018 積穴住居跡 斧カマド (E-E')
1. 10YR 2/2 黒褐色土 基性やや有り 締まりやや密
(中位に底部にかけて地化物質を含む)
2. 10YR 4/3 に於く黒褐色土 基性やや有り 締まりやや密
(一部に黒褐色土のブロックを含む)
3. 10YR 1/1 黒褐色土 基性やや有り 締まりやや密
(地山と地土のブロックを5~30%含む)

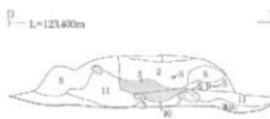
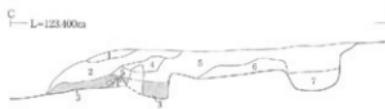
0 1:30 1m

第13図 RA 018 積穴住居跡②



RAO 19 穫穴住居跡 墓土 (A-A' , B-B')
 1. 10Y R2/1 黒色土 粘性や有り 締まりやや密
 (全体に小様の塊を少含む)
 2. 10Y R3/4 坎面土 粘性有り 締まりやや密
 (地山ブロックを30%含む。壁の厚さ)

0 120 2m

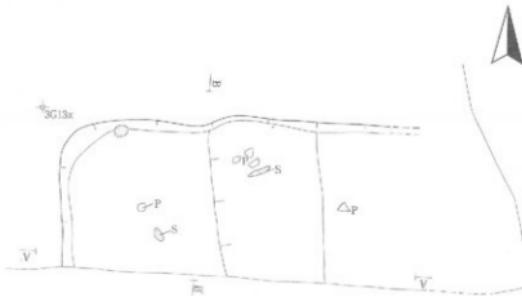


RAO 19 穫穴住居跡 カマド (C-C' , D-D')
 1. 10Y R2/1 黒色土 粘性や有り 締まりやや密
 (地山のブロックをわずか含む)
 2. 10Y R3/4 坎面土 粘性有り 締まりやや密
 (地山ブロックと炭化物をわずかに含む)
 3. 10Y R3/2 粘弱土 粘性有り 締まりやや密
 (地山を全体に30%含む)
 4. 10Y R3/4 坎面土 粘性や有り 締まりやや密
 (地山ブロックをわずかに含む)
 5. 10Y R3/3 粘弱土 粘性やや有り 締まりやや密
 (地山ブロックを30%含む)

6. 10Y R4/4 黑色土 粘性有り 締まりやや密
 (地山ブロックを30%含む)
7. 10Y R3/4 坎面土 粘性やや有り 締まり密
 (大きな地山のブロックを多く含み、底部は堅密が分布する)
8. 10Y R3/6 黑色土 粘性やや有り 締まり密
 (細かい塊を少量含む)
9. 10Y R3/3 黑色土 粘性やや有り 締まりやや密
 (地山ブロックを10%含む)
10. 10Y R3/4 黑色土 粘性やや有り 締まり密
 (細かい塊を多く含む)
11. 10Y R4/6 黑色粗砂 粘性弱 締まり密
 (厚1~20cmの繊を密に含む)

第14図 RAO 19 穫穴住居跡

0 120 2m



- R A 0 2 0 穫穴住居跡 塵土 (A - A' , B - B')
1. 10Y R2/3 深褐色土 粘性やや弱り 疎毛り密
(地山ブロックを5%含む。東側面には馬上枝を呈し、田岡辺と重なる可能性がある)
 2. 10Y R4/4 黄褐色土 粘性弱 疏毛り密
(馬床?)
 3. 10Y R2/2 黒褐色土 粘性やや弱り 疎毛り密
(地山の小礫を10%含む。地山ブロックを一部に含む)
 4. 10Y R4/4 黑褐色土 粘性弱 疏毛り密
(地山の礫を全体に少量含む)
 5. 10Y R6/6 明黄褐色細砂 粘性弱 かたく縋まる
(深褐色土のブロックを層状に少量含む)
 6. 5Y R4/6 淡褐色細砂
(黒褐色土のブロックを10%含む)

0 1.60 2m

第15図 R A 0 2 0 穫穴住居跡

＜カマド＞ 上面が大きく削平を受けており、遺構の大半が調査区外へ延びているためカマドの有無を含めた詳細は不明であるが、土器が比較的多く出土することや、本次調査区内における同時期の住居跡のカマドが、南～南東方向に構築されているものが多いことなどから、調査区外にカマドが存在しているものと推定し、住居跡として登録した。

＜付随土坑・ピット＞ 検出されていない。

＜出土遺物＞ 埋土内から約15点出土しており、土師器と赤焼きの割合がほぼ半分である。特徴のある遺物としては、口縁部に多量のアスファルトが付着した土師器の壺（No.99）や、焼成不良の長頸瓶の頸部（No.103）が出土している。

＜時期＞ 出土遺物から、平安時代の遺構と推定される。

2. 積穴状遺構 <RE>

積穴住居跡の狭間から3基の積穴状遺構が検出された。出土遺物はRE004積穴状遺構においてやや見られる程度で、出土量はごくわずかである。形態はRE004のみ小形で、他の遺構は断面形が掘り鉢状または薄い皿状を呈し、積穴住居跡に似た形態である。

RE003 積穴状遺構（第16図・写真図版16）

＜位置・重複関係＞ 調査区ほぼ中央の3F区北東隅に位置し、基本層序2層の上面から検出された。RD082上坑・RB002掘立柱建物跡とそれぞれ重複しているが、本遺構が最も古い遺構と推定される。

＜規模・平面形・方向＞ 平面の計測値は2.2×1.8mで、床面積は約4m²、平面形は隅丸のやや不整形な方形を呈する。壁を基準とした主軸方向はN-0°で真北を示している。

＜埋土＞ 全体的に自然堆積と思われ、1層と2層の間には層状の十和田a降下火山灰が観察され、一次堆積によるものと推定される。

＜壁＞ 床面から緩やかに立ち上がり、残存する壁高は15~40cm、全体にはほぼU字状を呈する。

＜床面＞ 床面には小径の自然礫層が露出しているが、3層目は地山ブロックを20%程度含んだなだらかな堆積状況を示していることから、貼り床である可能性が考えられる。

＜出土遺物＞ 出土していない。

＜時期＞ 十和田a降下火山灰の堆積状況等から、住居跡に付隨した古代（10世紀初頭以前）の遺構と推定される。

RE004 積穴状遺構（第16図・写真図版17）

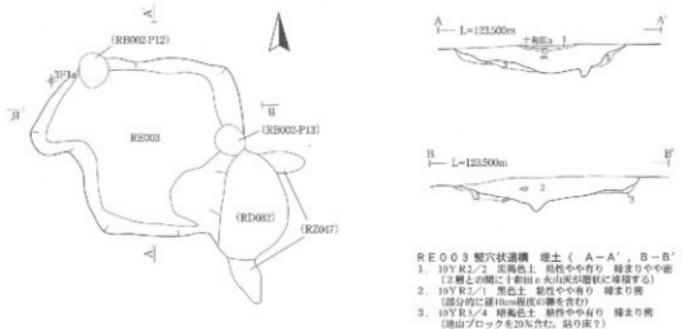
＜位置・重複関係＞ 調査区ほぼ中央の3G区に位置し、基本層序2層の上面から検出された。RD083土坑と重複しているが、断面の観察から本遺構の方が古いものと推定される。周囲には柱穴状のやや大きなピット類が数基分布している。

＜規模・平面形・方向＞ 平面の計測値は3.3×3.2mで、床面積は約10.6m²、平面形は隅丸の正方形を呈する。壁を基準とした主軸方向はN-35°-Wに傾いている。

＜埋土＞ 自然堆積と思われ、小径の自然礫を多く含んだ黒色土が主体を占める。

＜壁＞ 床面からごく緩やかに立ち上がり、残存する壁高は5~15cmと浅い皿状を呈する。

＜床面＞ 床面はややなだらかであるが、小径の自然礫が密に露出している。



第16図 RE 003・004 竪穴状遺構

＜付随ビット＞ 遺構内や近接した位置から検出されたものも含んだ5基について、計測値を以下の通り表にまとめた。以下のビットについては、本遺構に直接関連する遺構、または、本遺構とは別の建物跡を形成する可能性も考慮した上で比較・検討を行ったものの、それぞれの明確な対応関係を確認することはできなかった。

柱穴状 ビット	P P 3	P P 4	P P 5	P P 6	P P 7
径(cm)	63×54	55×43	70×45	57×35	53×46
深さ(cm)	26	61	15	57	22

＜出土遺物＞ 埋土や隣接ビット内から、やや摩滅した赤焼きの坏片が数点出土している。

＜時期＞ 出土遺物から平安時代の遺構と推定される。

R E 0 0 5 穹穴状遺構（第17図・写真図版18）

＜位置・重複関係＞ 調査区の北東端2G区に位置し、基本層序2層の上面から検出された。RG011溝跡と重複しているが、重複部分が段丘面の縁と重なっているため新旧関係の詳細は不明であるが、本遺構の方が古いものと推定される。

＜規模・平面形・方向＞ 平面の計測値は3.7×2.9m(暫定値)で、床面積は約10.7m²、平面形は隅丸の方形を呈する。壁を基準とした主軸方向はN-75°-Wに傾いている。

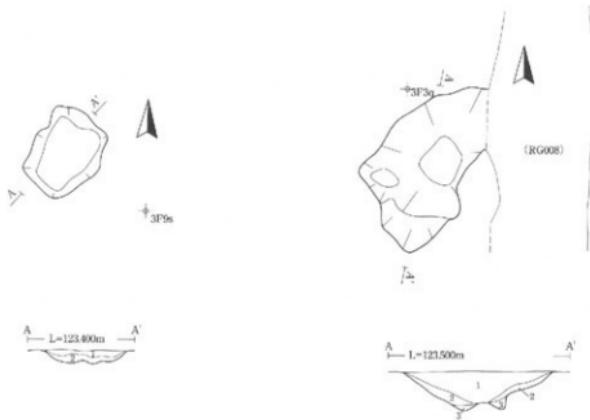
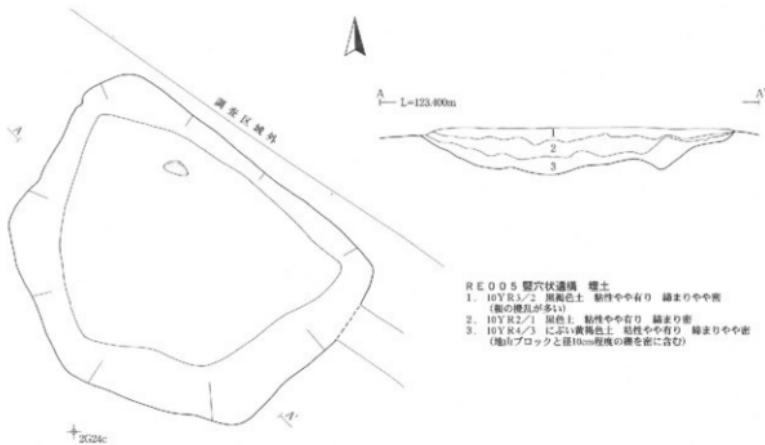
＜埋土＞ 自然堆積と思われる黒褐色土が主体を占める。

＜壁＞ 床面から掘り鉢状に立ち上がり、残存する壁高は38~55cm、全体にはU字状を呈する。

＜床面＞ 床面にはやや大きめの自然礫層が露出しているが、3層目には地山ブロックが混入したにぶい黄褐色土層が観察されることから、貼り床または掘り方による修正が施されたものと推定される。

＜出土遺物＞ 土師器片や弥生土器片が出土しているが、いずれも検出面付近からであるため遺構に伴うものかは判断しにくい。

＜時期＞ 時期を判断する出土遺物に乏しく詳細は不明である。



第17図 RE 005 穫穴状遺構・RD 074, 075 土坑

3. 土坑 < R D >

調査区のほぼ全域からあわせて16基検出されている。近世の墓壙と推定される1基を除き、古代～近世のものが大半と思われるが、出土遺物が少なく詳細な時期については不明なものが多い。

また、隣接する前年度調査区内(第3次調査区内)から数多く検出された、古代の墓壙のような形態の土坑は、本次調査区内からは一切検出されていない。

土坑観察表 (表中のカッコ内数字は暫定値で計測したもの)

R D 0 7 4 土坑 (第17図・写真図版19)

位置	3F区
重複関係	なし
平面形	隅丸長方形
開口部径	100×85cm
深さ	15cm
長軸方向	N-55°-E
埋土	黒褐色土が主体
底面	底面付近は掘り方による修正？
出土遺物	なし
時期・性格	時期、性格は不明

R D 0 7 5 土坑 (第17図・写真図版19)

位置	3F区
重複関係	R G008溝跡(本道構:新)
平面形	不整形
開口部径	(210)×125cm
深さ	15cm
長軸方向	N-55°-E
埋土	黒褐色土が主体
底面	底面付近は掘り方による修正？
出土遺物	なし
時期・性格	時期、性格は不明

R D 0 7 6 土坑 (第18図・写真図版19)

位置	3F区
重複関係	R B001建物跡(新旧不明)
平面形	隅丸長方形
開口部径	170×130cm
深さ	15cm
長軸方向	N-40°-E
埋土	黒褐色土が主体、一部に焼土を含む
底面	底面付近は掘り方による修正？
出土遺物	なし
時期・性格	時期、性格は不明、3個の自然礫が出土している

R D 0 7 7 土坑 (第18図・写真図版19)

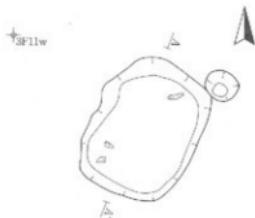
位置	3F区
重複関係	R B001建物跡(新旧不明)
平面形	不整椭円形
開口部径	70×55cm
深さ	15cm
長軸方向	N-45°-E
埋土	黒褐色土が主体
底面	底面付近は掘り方による修正？
出土遺物	なし
時期・性格	時期、性格は不明(近世?)

R D 0 7 8 土坑 (第18図・写真図版20)

位置	3F区
重複関係	なし
平面形	楕円形
開口部径	160×115cm
深さ	25cm
長軸方向	N-55°-E
埋土	礫を多く含んだ黒褐色土の單層
底面	なだらかで自然縁を密に含む
出土遺物	南側壁面付近の上層から、馬の歯が出土している
時期・性格	近世の墓壙である可能性が高い

R D 0 7 9 土坑 (第18図・写真図版20)

位置	3G区
重複関係	なし
平面形	長楕円形
開口部径	345×140cm
深さ	55cm
長軸方向	N-35°-W
埋土	黒褐色土が主体
底面	やや掘り鉢状を呈する
出土遺物	なし
時期・性格	時期、性格は不明



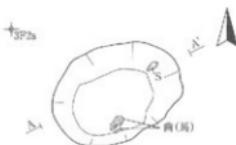
R D 076 土坑

1. 10YR2z/2 黒褐色土 弾性やや有り 繋まりやや密
(地山ブロックを20%含む)
2. 10YR2z/3 黒褐色土 弹性やや有り 繋まり密
(地山ブロックを20%含む)
3. 填土 (黒褐色土を多量に、腐食性物も少量含む)



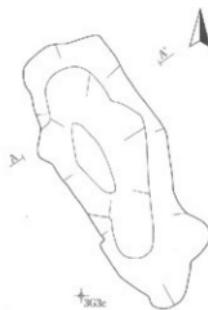
R D 077 土坑

1. 10YR2z/2 黒褐色土 弹性やや有り 繋まりやや密
(地山ブロックを5%含む)
2. 10YR2z/3 黑褐色土 弹性有り 繋まりやや密
(地山ブロックを20%含む)



R D 078 土坑

1. 10YR2z/2 黑褐色土 弹性やや有り かたく繋まる
(径1~10cmの縁を多く含む)



R D 079 土坑

1. 10YR2z/2 黑褐色土 弹性有り 繋まり密
(地山ブロックを20%含む)
2. 10YR2z/3 黑褐色土 弹性有り 繋まり密
(縫合と小縫を50%含む、壁の層底土?)
3. 10YR2z/1 黑褐色土 弹性有り 繋まり密
(縫合をわざかに含む)



第18図 R D 076~079 土坑

R D 0 8 0 土坑（第19図・写真図版20）

位 置	3 G 区
重複関係	R D 081 土坑
平 面 形	椭円形
開口部径	85×(45) cm
深 さ	5 cm
長軸方向	N-35°-W
埋 土	暗褐色土と褐色土が同じ割合で堆積する
底 面	なだらか
出土遺物	なし
時期・性格	時期、性格は不明・重複するが新旧関係はない

R D 0 8 1 土坑（第19図・写真図版21）

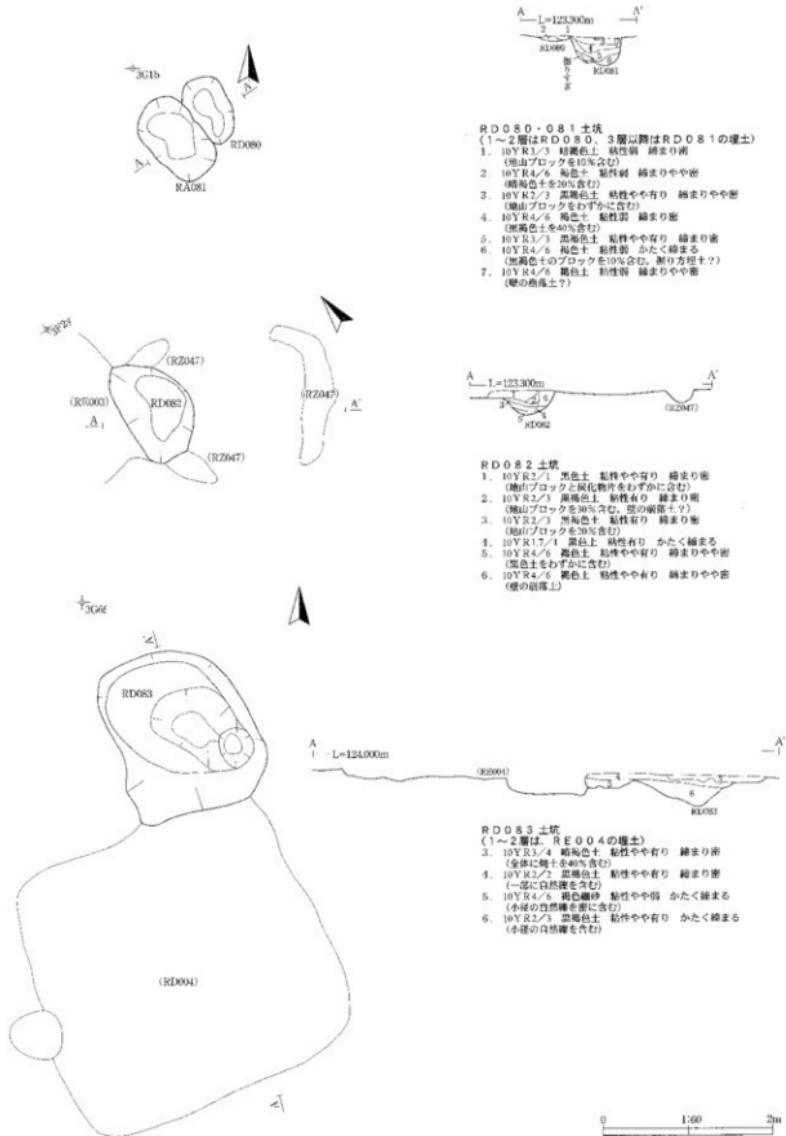
位 置	3 G 区
重複関係	R D 080 土坑
平 面 形	椭円形
開口部径	110×(65) cm
深 さ	35 cm
長軸方向	N-40°-W
埋 土	褐色土が主体・小規模ながらレンズ状の複数堆積が見られる
底 面	やや盛り跡状を呈する
出土遺物	なし
時期・性格	時期、性格は不明・重複するが新旧関係はない

R D 0 8 2 土坑（第19図・写真図版21）

位 置	3 F 区
重複関係	R Z 047 円形周溝（本遺構：新） R E 003 穴六状遺構（本遺構：新）
平 面 形	不整橢円形
開口部径	(145)×130 cm
深 さ	30 cm
長軸方向	N-45°-W
埋 土	黒褐色土・褐色土が主体
底 面	ゆるやか
出土遺物	なし
時期・性格	古代（平安？）・性格は不明で、小規模ながら複数の堆積状況を示す

R D 0 8 3 土坑（第19図・写真図版21）

位 置	3 G 区
重複関係	R E 004 穴六状遺構（本遺構：新）
平 面 形	隅丸長方形
開口部径	(200)×160 cm
深 さ	40 cm
長軸方向	N-30°-W
埋 土	黒褐色土が主体で、北東側の上層に層状の焼土を含む
底 面	中央部分がやや窪む
出土遺物	焼土を含み、赤燒きや土師器の出土が多い（8点）
時期・性格	平安・R E 004 の付隨施設である可能性が考えられる



第19図 RD 080～083 土坑

R D 084 土坑（第20図・写真図版21）

位 置	3 G 区
重複関係	なし
平面形	不整橢円形(洋なし型)
開口部径	155×90cm
深 さ	5 cm
長軸方向	N - 50° - E
埋 土	黒褐色土が主体
底 面	皿状
出土遺物	なし
時期・性格	時期、性格は不明・ごく浅く上部は削平を受ける

R D 085 土坑（第20図・写真図版22）

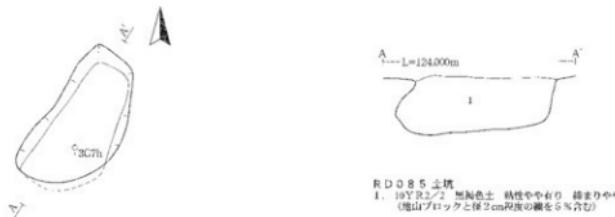
位 置	3 G 区
重複関係	なし
平面形	長橢円形
開口部径	180×90cm
深 さ	65cm
長軸方向	N - 40° - E
埋 土	黒褐色土の單層
底 面	なだらかであるが、長軸方向の西側壁面をやや掘り込む形態を呈する
出土遺物	なし
時期・性格	新しい時期の遺構と推定され、性格は不明である

R D 086 土坑（第20図・写真図版22）

位 置	3 G 区
重複関係	なし
平面形	長橢円形
開口部径	180×60cm
深 さ	65cm
長軸方向	N - 25° - E
埋 土	黒褐色土と黄褐色土が同じ割合で堆積する
底 面	ややなだらかで、自然縫を密に含んだ礫層が露出する
出土遺物	なし
時期・性格	新しい時期の遺構と推定され、性格は不明である

R D 087 土坑（第20図・写真図版22）

位 置	3 G 区
重複関係	なし
平面形	長橢円形
開口部径	215×40cm
深 さ	25cm
長軸方向	N - 80° - E
埋 土	黒褐色土が主体
底 面	底面付近は掘り方による修正？
出土遺物	赤焼き杯(No.117)：口縁部にアスファルトが付着する
時期・性格	出土遺物は平安のものであるが、流れ込みの可能性も考えられる・性格は不明



第20図 RD 084～087 土坑

R D 088 土坑（第21図・写真図版22）

位 置	3 G 区
重複関係	なし
平 面 形	隅丸方形
開口部径	90×70cm
深 さ	45cm
長軸方向	N-80°-E
埋 土	黒褐色土の単層
底 面	掘り鉢状を呈する
出土遺物	なし
時期・性格	時期、性格は不明

R D 089 土坑（第21図・写真図版23）

位 置	3 G 区
重複関係	なし
平 面 形	長楕円形
開口部径	100×50cm
深 さ	25cm
長軸方向	N-80°-E
埋 土	暗褐色土が主体
底 面	やや掘り鉢状を呈する
出土遺物	なし
時期・性格	時期、性格は不明

4. 周溝 < R Z >

調査区のほぼ中央、R B002掘立柱建物跡付近から、やや並んだ形態の周溝1基が検出された。

本遺構の形態については、円形・方形等の区分が困難なことから、本遺跡第3次調査事例に倣い、單に「周溝」として登録することとした。

R Z 047 周溝（第21図・写真図版23）

<位置・重複> 調査区中央の3 F ~ 3 G 区に、R D082土坑と重複して位置する。基本層序の2層上面から検出された。

<平面形・規模> 周溝の西側がR D082土坑によって切られているため詳細は不明であるが、北東と南西側の2個所が途切れた、円形に近い不整な形態を呈するものと思われる。外径は2.3m、内径1.8m、幅17~35cm、深さは15cm程度である。

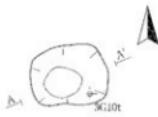
<堆積状況> 1層目は黒色土による自然堆積と思われるが、底面付近の2層目は掘り方による修正が施されている可能性がある。

<壁・底面> 壁はU字状を呈し、床面には緩やかな凹凸が見られる。

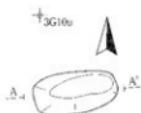
<主体部> 検出されていない。

<出土遺物> 出土していない。

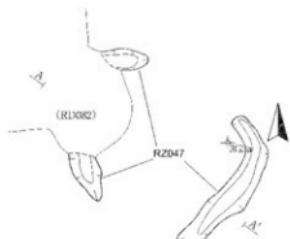
<時期> 重複関係から、平安時代の遺構と思われるR D082土坑よりも古い時期のものとなるが、周辺の類する遺構（本遺跡第3次調査：R Z 002周溝）と形態に大きな差異は見られないことから、平安時代のものと推定している。



R D 0 8 8 土坑
1. 10Y R2/1 黒褐色土、粘性やや弱 締まり密
(地山ブロックを10%含む)
2. 10Y R4/4 黄色土、弱性やや弱 締まり密



R D 0 8 8 土坑
1. 10Y R2/1 黒褐色土上、粘性やや弱 締まり密
(地山ブロックを全体にわざかに含む)
2. 10Y R4/4 黄色土、弱性やや弱 締まり密
(地山土のブロックを10%含む)



R Z 0 4 7 周溝
1. 10Y R2/1 黒褐色土、粘性やや弱 締まり密
(地山ブロックをわざかに含む)
2. 10Y R5/6 黄褐色土、弱性弱 締まりやや密
(地山土のブロックをわざかに含む。断り方理モ?)

0 100 200

第21図 R D 0 8 8, 0 8 9 土坑・R Z 0 4 7 周溝

5. 溝跡 < R G >

調査区の東西両側から 3 条の溝跡が検出された。西端の R G 008 溝跡は、前年度調査区内(第3次調査区)から続くもので、南側の調査区外へさらに続くものと思われる。R G 010 溝跡は、古墳時代末期の堅穴住居跡に切られていることから比較的古いもので、底面には溝の掘削時にいたるものと思われる工具痕を確認することができる。東端の R G 011 溝跡は、段丘面の縁際に沿って延びているが、大部分が削平を受けしており残存状況はよくない。

いずれの溝跡も、溝底または区画としての性格が考えられるものの出土遺物に乏しく、上面も大きく削平を受けていることなどから詳細は不明である。

R G 0 0 8 溝跡 (第22図・写真図版24)

<位置・重複関係> 調査区の西端 2 F ~ 3 F 区にかけて南北方向へ延びており、基本層序 2 層の上面と、旧河道の黒色埋土上面との境界付近から検出された。RA014堅穴住居跡(奈良時代)と重複しているが、検出状況から本造構のほうが古い。前年度調査区内(第3次調査区)から続くものである。

<規模> 計測値は長さ 11.2m(今年度調査範囲分のみの数値)、幅 26~52cm、深さは 5~17cm である。

<埋土> 自然堆積と思われ黒褐色土が主体を占めるが、底部付近には掘り方による修正が施されている可能性が考えられる。

<断面形> 凹凸が多い底面から緩やかに立ち上がる。

<出土遺物・時期> 出土遺物はないものの、奈良時代の RA014 堅穴住居跡に切られていることから、奈良時代以前の古代の造構と推定される。

R G 0 1 0 溝跡 (第23図・写真図版25)

<位置・重複関係> 調査区の西側 3 F 区において北東~南西方向へ延びており、基本層序 2 層の上面から検出された。RA015堅穴住居跡(古墳時代末期)と重複しているが、検出状況から本造構のほうが古い。

<規模> 計測値は長さ 7.8m、幅 27~34cm、深さは 5~10cm である。

<埋土> 自然堆積と思われ、黒褐色土が主体を占める。

<断面形> 底面から緩やかに立ち上がる。

<出土遺物・時期> 出土遺物はないものの、古墳時代末期の RA015 堅穴住居跡に切られていることから、古墳時代末期以前の古代の造構と推定される。

R G 0 1 1 溝跡 (第24図・写真図版26)

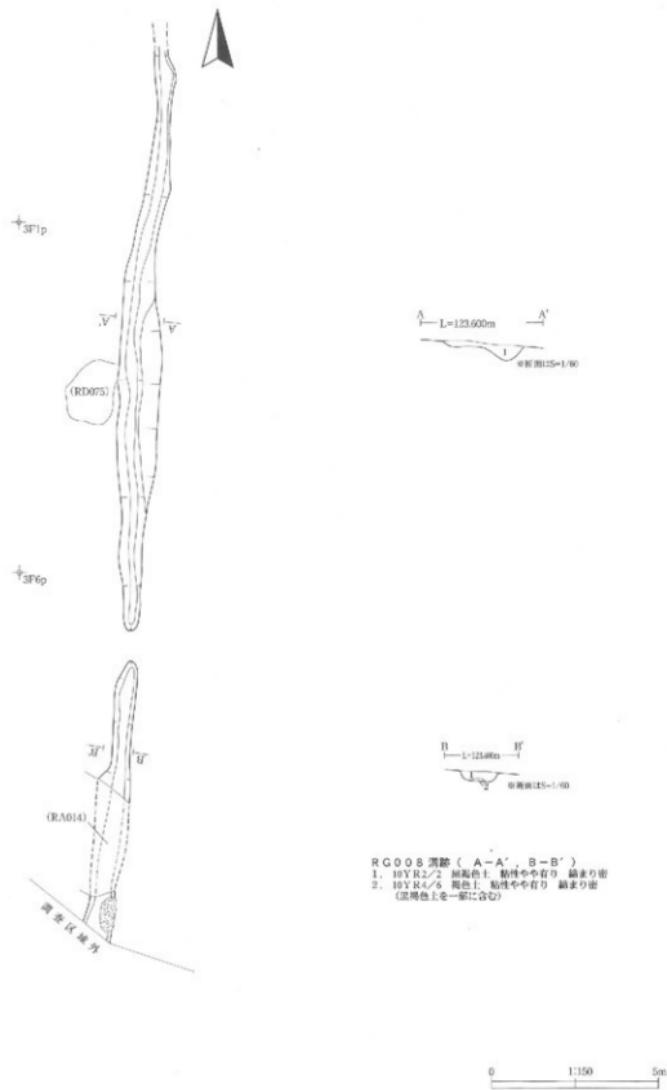
<位置・重複関係> 調査区の東端 2 G ~ 3 G 区において北西~南東方向へ延びており、基本層序 2 層の上面と、擾乱を受けた段丘面の縁際に沿って検出された。RF005堅穴状造構との重複が見られ、重複部分が擾乱を受けているために詳細が不明ではあるものの、本造構の方が新しいものと推定している。

<規模> 計測値は長さ 17.1m、幅 18~27cm、深さは 9~53cm である。

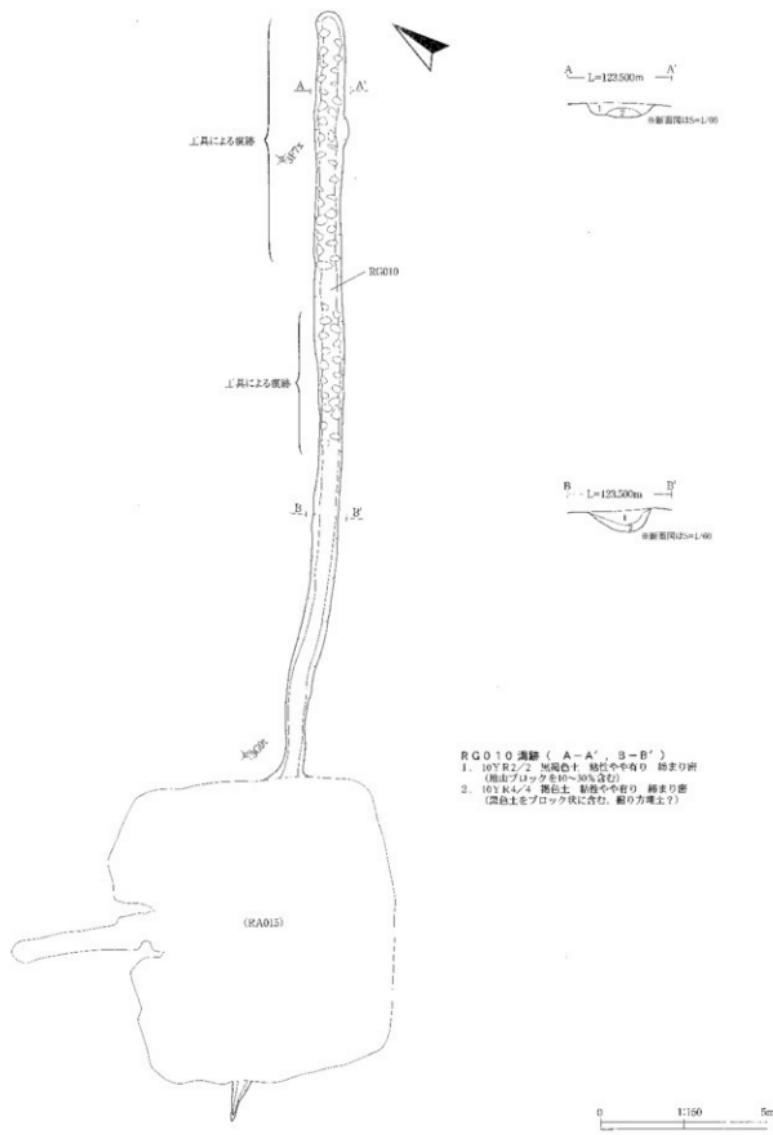
<埋土> 自然堆積と思われ、暗褐色土と黒褐色土が主体を占める。

<断面形> 底面からやや緩やかに立ち上がる。

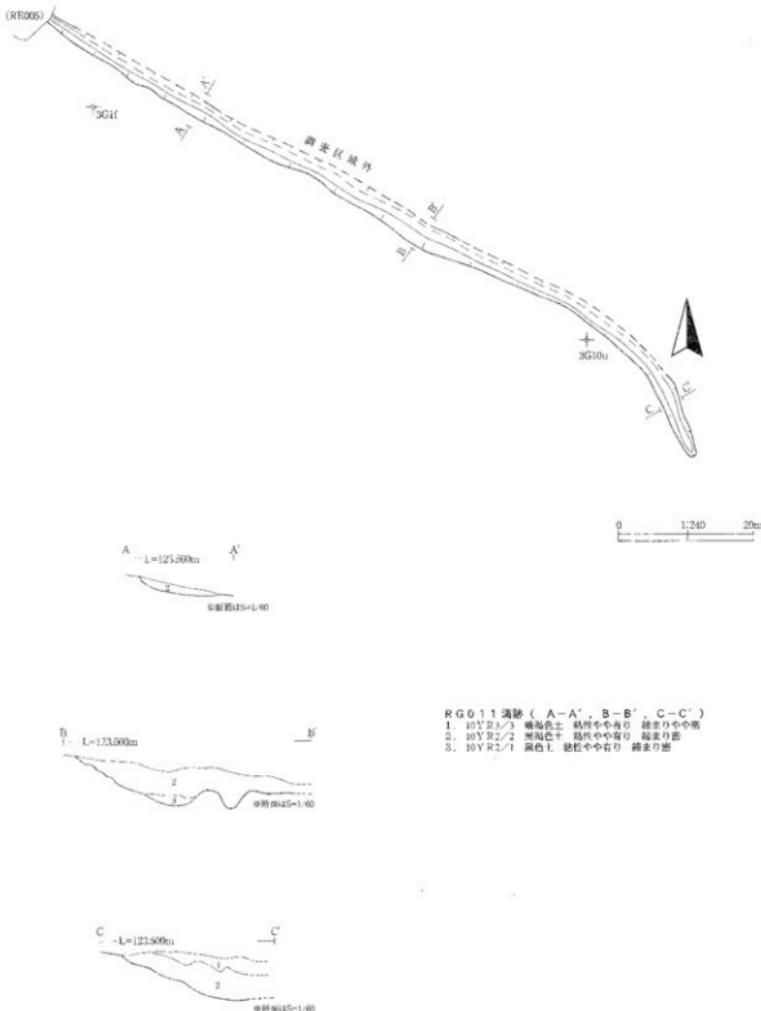
<出土遺物・時期> 赤焼きの瓦片が出土しているが、流れ込みによるものと考えられ、造構の時期は不明である。また、底面高は一定せず、段丘の縁に沿って分布することから、区画溝の可能性が考えられる。



第22図 RG008 溝跡



第23図 R G 0 1 0 溝跡



第24図 RG011 溝跡

6. 挖立柱建物跡 < R B >

調査区の西側から、2棟の掘立柱建物跡が検出された。各建物跡は柱間寸法等から近世の造構と推定されるが、R B 002掘立柱建物跡については、重複する平安期の竪穴住居跡のカマドそで石部分を割り抜いて、柱穴が構築される様子が見られる。なお、平面図中の柱間寸法については、代表的な柱間数値(cm)を計測したのち、1尺=30.3cmで換算し併記している。

R B 0 0 1 挖立柱建物跡（第25図・写真図版27・28・復元写真：32）

<位置・重複関係> 調査区の西側、3F～3Gグリッドにまたがって位置し、造構検出面は基本層序の2層上面である。R D076・077土坑と近接するが、本造構の方が新しいものである。

<規模・建物方位> 衍行3間(681cm: 22.5尺)、梁間2間(546cm: 18尺)、棟方向は北西～南東で北を基準に約50°西偏する。

<柱穴寸法> 柱穴の開口部径と深さは以下の通りである。（近接する柱穴状ピットの数値も併記した）

	P-1	P-2	P-3	P-4	P-5	P-6	P-7	P-8	P-9	P-10
径(cm)	50×42	43×36	54×46	48×42	40×38	55×47	47×43	40×40	40×38	42×38
深さ(cm)	62	62	56	77	60	20	48	43	50	50
	P-11	P-12	P P 1	P P 2						
径(cm)	20×17	22×22	50×38	48×40						
深さ(cm)	15	16	29	39						

<柱間寸法> 衍行が9尺(272cm)・6.5尺(198cm)・7尺(211cm)、梁間については北西側が9尺(273cm)、南東側では10尺(302cm)・8尺(242cm)とこの柱間に小さな支柱穴を1基ずつ設けている。

<建物の性格> 平面形を観察すると、南東側の梁部分に小さな支柱穴が2基付随している様子が確認されたが、それ以外に対応関係を示すような柱穴等は確認されていない。大きさから小形の家屋または付属小屋的な用途が考えられ、近接するR B 002掘立柱建物跡と対応する建物の可能性もある。

<出土遺物> 出土していない。

<時期> 柱間寸法等から近世の可能性が高い。

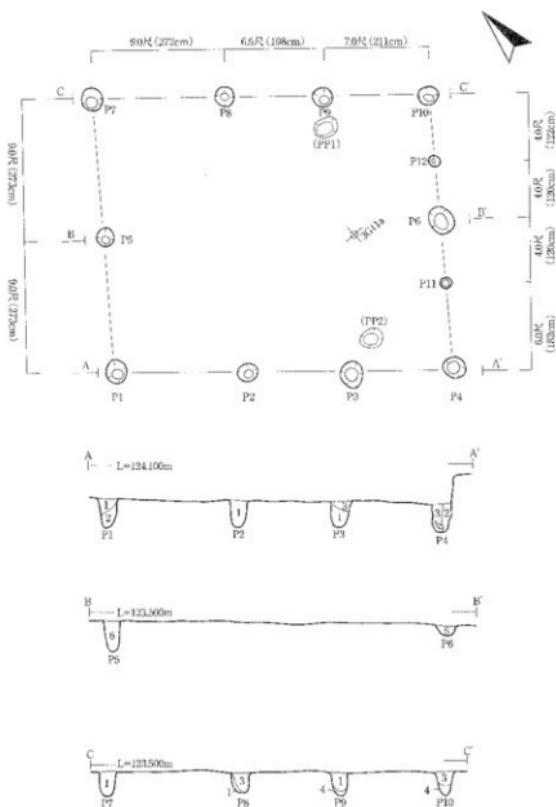
R B 0 0 2 挖立柱建物跡（第26図・写真図版29～31）

<位置・重複関係> 調査区の西側、2F～3Fグリッドにまたがって位置し、造構検出面は基本層序の2層上面である。平安期の竪穴住居跡や土坑等と重複するが、本造構の方が新しいものである。

<規模・建物方位> 衍行4間(954cm: 31.5尺)、梁間3間(560cm: 18.5尺)、棟方向は北東～南西で北を基準に約30° 東偏する。

<柱穴寸法> 柱穴の開口部径と深さは以下の通りである。

	P-1	P-2	P-3	P-4	P-5	P-6	P-7	P-8	P-9	P-10
径(cm)	42×35	42×35	50×46	41×38	42×38	36×35	60×55	33×33	45×45	43×33
深さ(cm)	60	50	53	55	48	35	47	60	55	34
	P-11	P-12	P-13	P-14	P-15	P-16	P-17			
径(cm)	46×43	41×35	38×33	43×37	35×30	42×40	40×35			
深さ(cm)	37	50	38	52	23	32	45			



R B 0 0 1 捨立柱建物跡 (A - A' ~ C - C')

1. 10Y R1.4 黒褐色土 勝利色 烧け残り かたく縮まる
(径1~3cmの小礫と共に焼け残り含む)
2. 10Y R2.3 黑褐色土 勝利色有り 烧け残りや砂
(燒け残り十数粒と共に焼け残りと、径3~5mmの小礫を一部に含む)
3. 10Y R2.2 黑褐色土 勝利色有り 烧け残りや砂
(焼け残りブロックを10%含む)
4. 10Y R4.6 黑褐色土 烧け残りなし かたく縮まる
5. 10Y R2.2 黑褐色土 勝利色有り 烧け残りや砂
(焼け残りブロックを10%含む)
6. 10Y R2.3 黑褐色土 勝利色や有り かたく縮まる
(焼け残りブロックを40%含む)

0 1:100 5m

第25図 R B 0 0 1 捨立柱建物跡

＜柱間寸法＞ 柱行が9尺(274cm)・7.5尺(226~228cm)、梁間は6.5尺(196cm)と6尺(181・183cm)を使用している。

＜建物の性格＞ 北東側に2基、南西側に1基の支柱穴がそれぞれ付随する形態で、建物の大きさから小型の家屋または付属小屋的な用途が考えられるが、近接するRB001掘立柱建物跡を付属小屋として仮定した場合、本遺物跡は母屋になる可能性がある。

＜出土遺物＞ 出土していない。

＜時期＞ 柱間寸法等から近世の可能性が高い。

7. 柱穴列 <RC>

調査区の東側から3列の柱穴列が検出された。全長は27~30mで、各柱穴列間は約2.5mの間隔があり、平面形は千鳥状の配列を呈する。柱間寸法等から近世の遺構と推定されるが、ごく浅い柱穴の埋土内から新しい時期の釘金等も出土していることから、近代にかかる可能性も考えられる。なお、平面図中の柱間寸法については、柱間数値(cm)を計測したのち、1尺=30cmで換算し併記している。

本遺構は独特な柱穴配列から、長屋等の建物跡、または何らかの柵列としての機能を持たされた遺構と推定されるが、類例に乏しく詳細は不明である。

RC001 柱穴列 (第27図・写真図版33・34・37)

＜位置・重複関係＞ 調査区の東側3Gグリッドに位置し、遺構検出面は基本層序の2層と3層の境界付近である。重複関係はない。

＜規模・方位＞ 計測値は全長約30mで、柱穴は削平を受けたことによって途中が抜けている部分がある。軸方向は北を基準に55°西偏する。

＜柱穴寸法＞ 柱穴の開口部径と深さは以下の通りである。

	P-1	P-2	P-3	P-4	P-5	P-6	P-7	P-8	P-9
径(cm)	40×38	58×48	38×34	45×40	44×35	40×35	30×25	42×38	50×40
深さ(cm)	35	27	30	17	15	8	6	15	17

＜柱間寸法＞ 計測値から、8.5尺(259cm)~9尺(273cm)を主に使用している。

＜遺構の性格＞ 上面の大部分が削平を受けたことにより、一部の柱穴が消滅しているものの、他の2列と対応するものと思われる。柱穴列全体を平面から観察すると千鳥状の配列ではあるが、中央のRC002柱穴列を建物床の支脚と想定した場合、長屋状の建物を形成する可能性も考えられる。建物跡ではない場合、境界や何らかの意図によって構築された柵列とも推測できるが、類例に乏しく詳細は不明である。

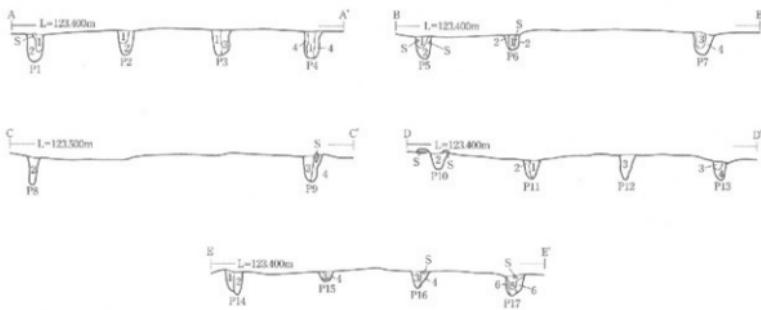
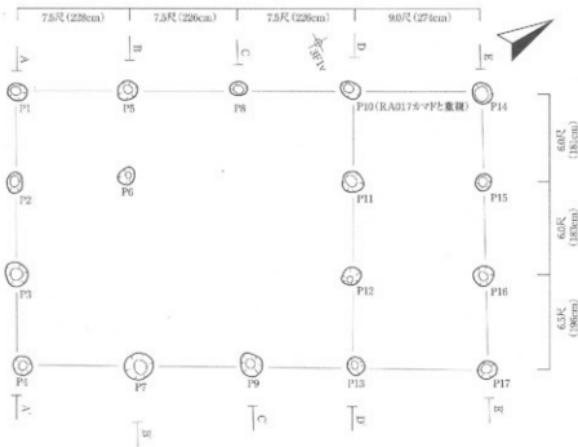
＜出土遺物＞ 柱穴内から、近世~近代のものと思われる新しい時期の鉄製品(釘金)や陶磁器片が出土している。

＜時期＞ 出土遺物や柱間寸法等から、近世~近代にかけての遺構と推定される。

RC002 柱穴列 (第27図・写真図版33~37)

＜位置・重複関係＞ 調査区の東側3Gグリッドに位置し、遺構検出面は基本層序の2層と3層の境界付近である。重複関係はない。

＜規模・方位＞ 計測値は全長約29.5mで、軸方向は北を基準に55°西偏する。



- R B 0 0 2 据立柱建物跡 (A - A' ~ E - E')
- 10Y R2/2 黒褐色土 粘性弱 細まりやや密
 2. 10Y R2/2 黒褐色土 粘性弱 細まりやや密
(塊2~5cmの小礫と地山ブロックを含む)
 3. 10Y R2/2 黒褐色砂質 粘性弱 細まり密
(塊2~5cmの小礫と地山ブロックを含む)
 4. 10Y R2/2 黒褐色砂質 粘性弱 細まり密
(塊2~5cmの小礫を含む)
 5. 10Y R2/2 黒褐色土 粘性弱 細まり密
(地山ブロックを10%と、径10cm程度の隙を含む)
 6. 10Y R4/6 黒色やや有り 細まり密
(黒褐色土のブロックを20%含む)

0 1:100 5m

第26図 R B 0 0 2 据立柱建物跡

＜柱穴寸法＞ 柱穴の開口部径と深さは以下の通りである。

	P-1	P-2	P-3	P-4	P-5	P-6	P-7	P-8	P-9	P-10
径(cm)	36×33	43×42	42×38	48×45	45×43	52×50	50×42	47×42	50×45	48×48
深さ(cm)	10	13	4	27	20	27	27	15	15	20
	P-11	P-12								
径(cm)	45×40	50×40								
深さ(cm)	13	30								

＜柱間寸法＞ 計測値から、8.5尺(259cm)～9尺(273cm)を主に使用している。

＜遺構の性格＞ 上面の大部分が削平を受けしており、両端部の柱穴が消滅している可能性が考えられるものの、他の2例と対応する遺構と思われる。柱穴列全体を平面から観察すると、千鳥状の配列ではあるが、本柱穴列を建物床の支脚と想定した場合、長屋状の建物を形成する可能性も考えられる。建物跡ではない場合、境界や何らかの意図によって構築された柵列とも推測できるが、類例に乏しく詳細は不明である。

＜出土遺物＞ 柱穴内から、近世～近代のものと思われる新しい時期の鉄製品(針金)や陶磁器片が出土している。

＜時期＞ 出土遺物や柱間寸法等から、近世～近代にかけての遺構と推定される。

R C 0 0 3 柱穴列（第27図・写真図版33・36・37）

＜位置・重複関係＞ 調査区の東側3Gグリッドに位置し、遺構検出面は基本層序の2層と3層の境界付近である。重複関係はない。

＜規模・方位＞ 計測値は全長約26.5mで、柱穴は削平を受けたことによって両端部分が消滅している可能性が考えられる。軸方向は北を基準に55°西偏する。

＜柱穴寸法＞ 柱穴の開口部径と深さは以下の通りである。

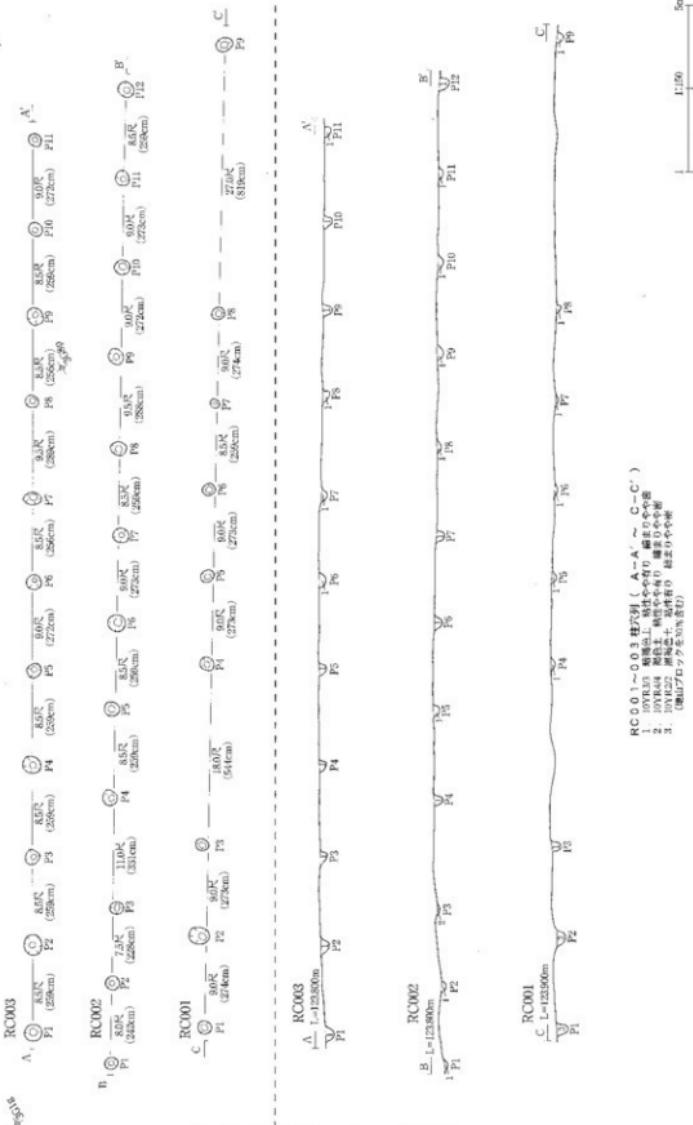
	P-1	P-2	P-3	P-4	P-5	P-6	P-7	P-8	P-9	P-10
径(cm)	50×50	62×53	47×40	58×52	45×38	48×45	57×40	38×35	50×46	44×44
深さ(cm)	25	27	22	22	25	24	18	23	32	28
	P-11									
径(cm)	40×34									
深さ(cm)	19									

＜柱間寸法＞ 計測値から、8.5尺(259cm)～9尺(273cm)を主に使用している。

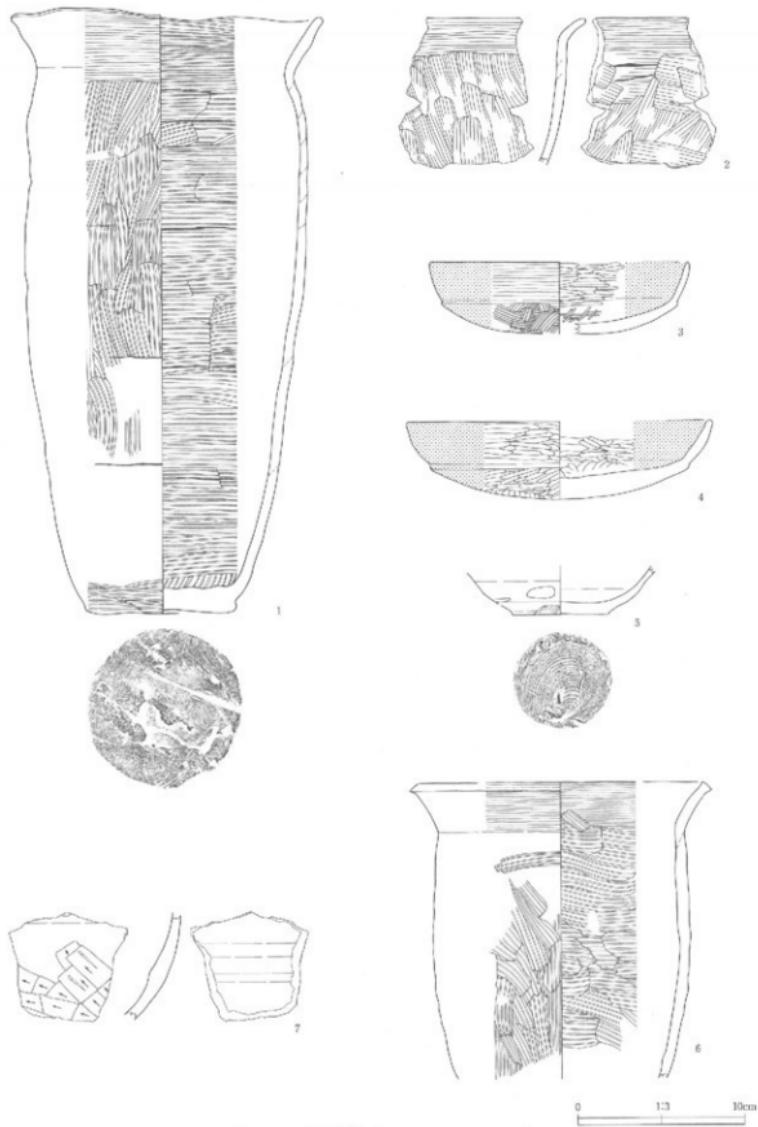
＜遺構の性格＞ 上面の大部分が削平を受けしており、両端部の柱穴が消滅している可能性が考えられるものの、他の2例と対応する遺構と思われる。柱穴列全体を平面から観察すると、千鳥状の配列ではあるが、中央のR C 002柱穴列を建物床の支脚と想定した場合、長屋状の建物を形成する可能性も考えられる。建物跡ではない場合、境界や何らかの意図によって構築された柵列とも推測できるが、類例に乏しく詳細は不明である。

＜出土遺物＞ 柱穴内から、近世～近代のものと思われる新しい時期の鉄製品(針金)や陶磁器片が出土している。

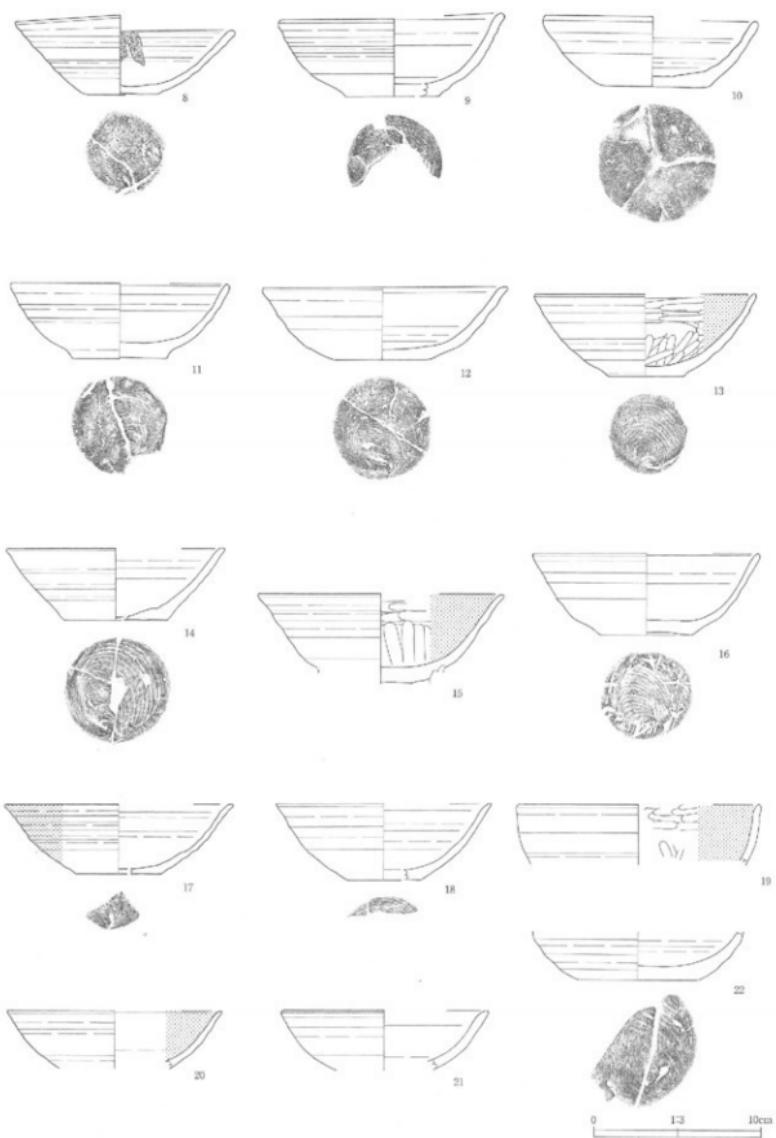
＜時期＞ 出土遺物や柱間寸法等から、近世～近代にかけての遺構と推定される。



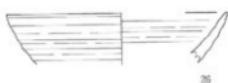
RC 001~003 柱穴列 (A-A' ~ C-C')
 1. JOY033 鋼筋柱上部材の柱穴
 2. JOY044 鋼筋柱下部材の柱穴
 3. JOY022 施工用柱穴
 (黒マーブルをNENRD)



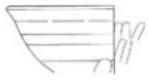
第28図 出土遺物 (RA014~016)



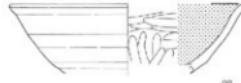
第29図 出土遺物 (RA017)



26



27



28



29



30



31



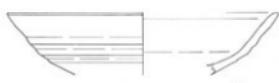
32



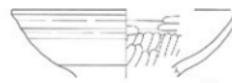
33



34



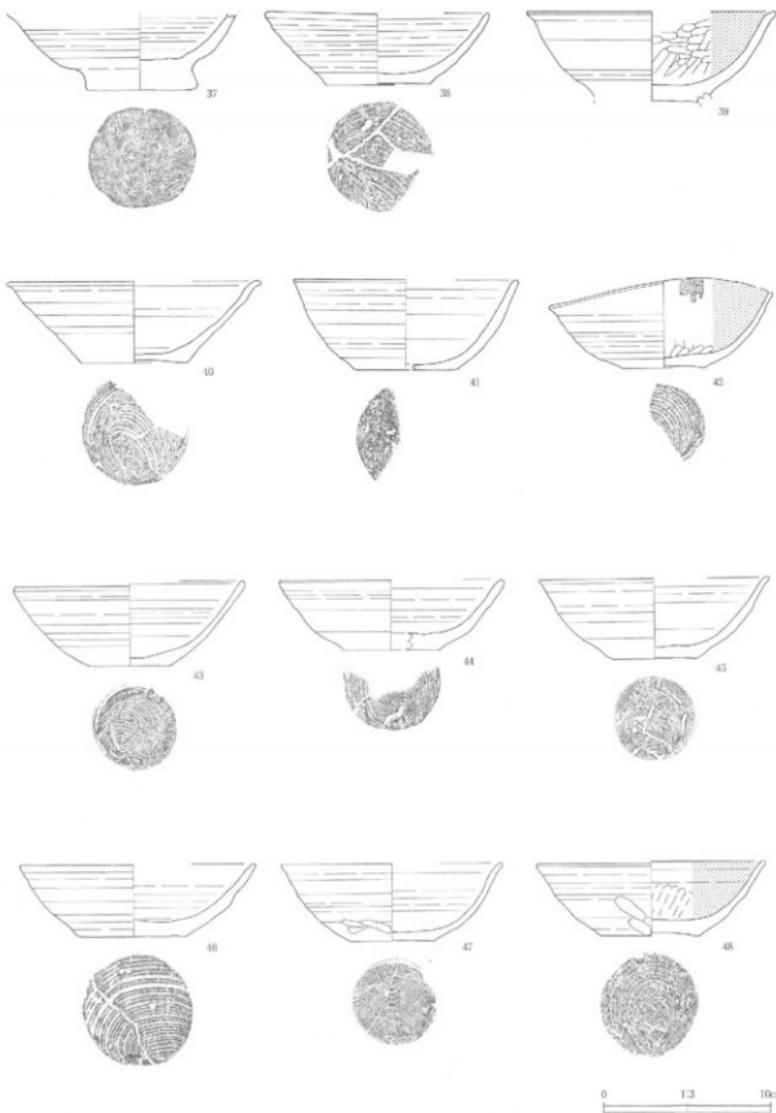
35



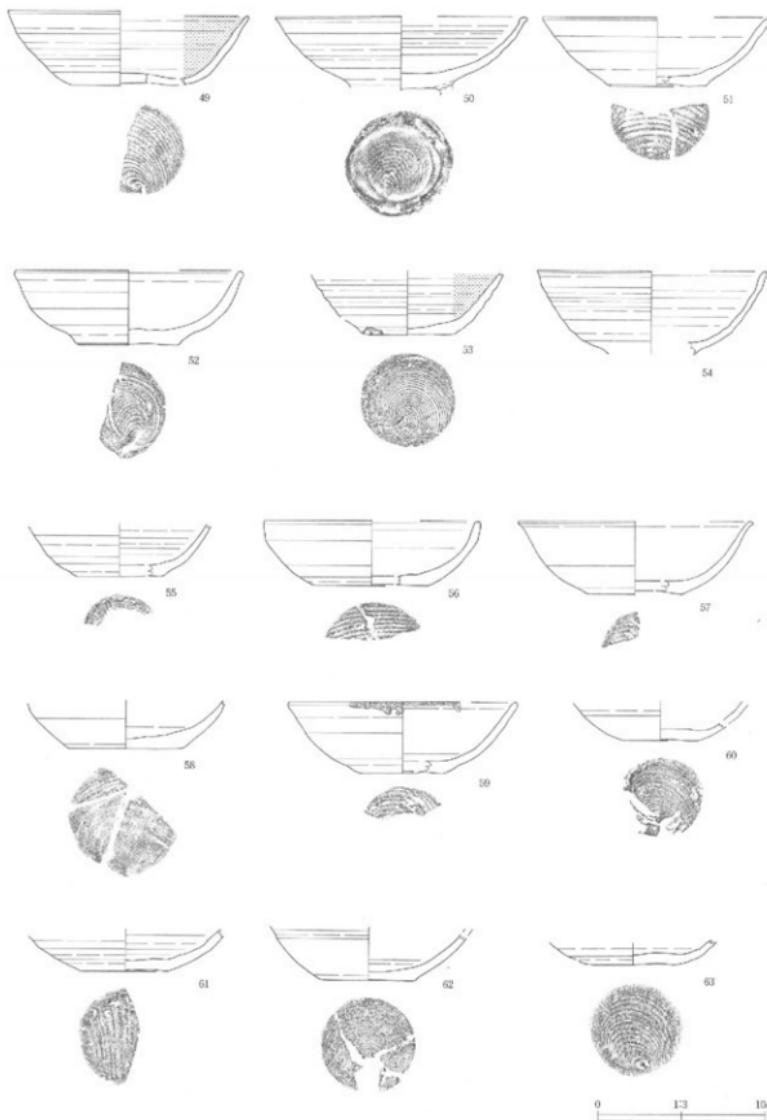
36



第30図 出土遺物 (RA017)

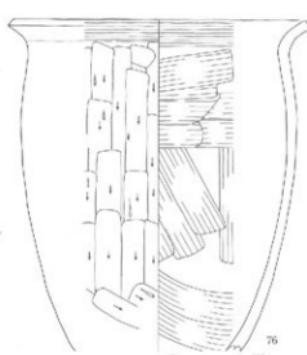
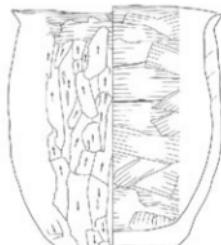
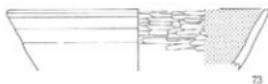
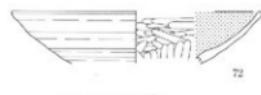
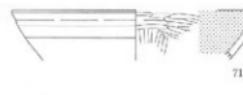
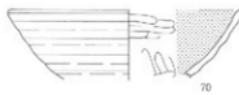
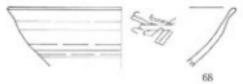
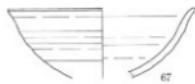
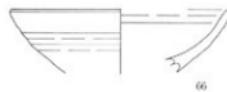
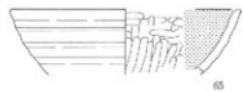
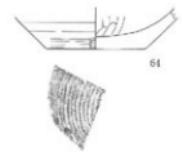


第31図 出土遺物 (R A 0 1 8)

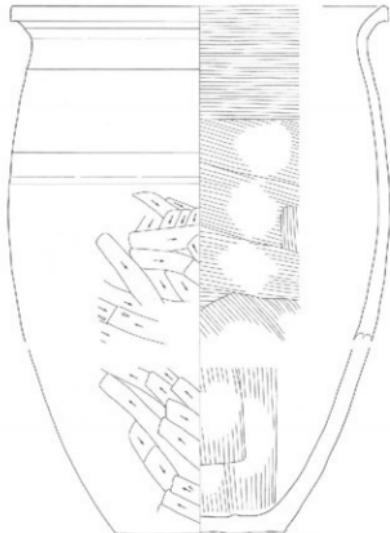


第32図 出土遺物 (R A 0 1 8)

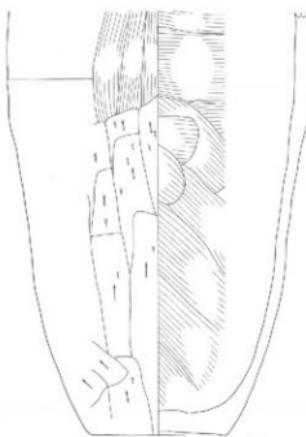
0 1:3 10cm



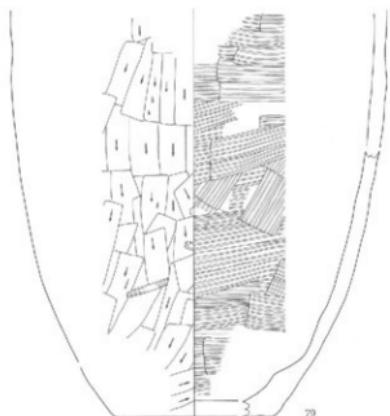
第33図 出土遺物 (R A 0 1 8)



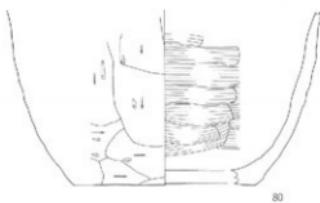
77



78



79



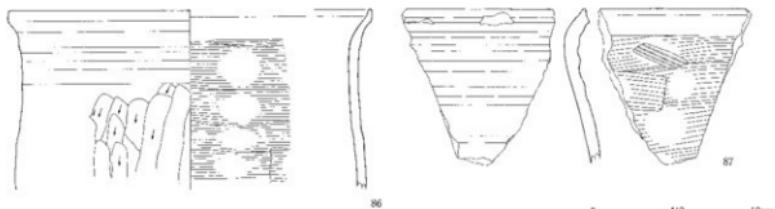
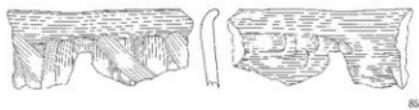
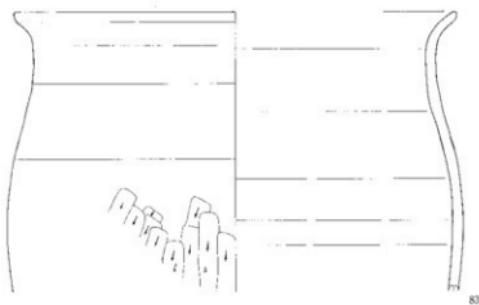
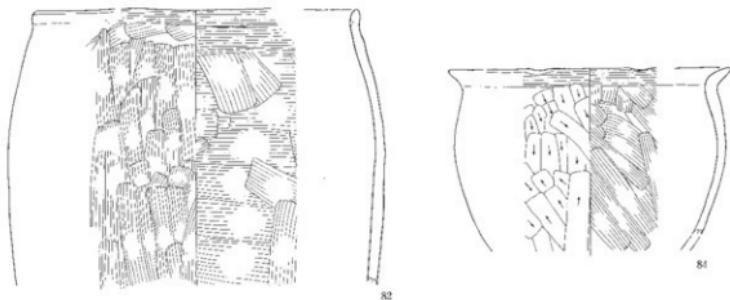
80



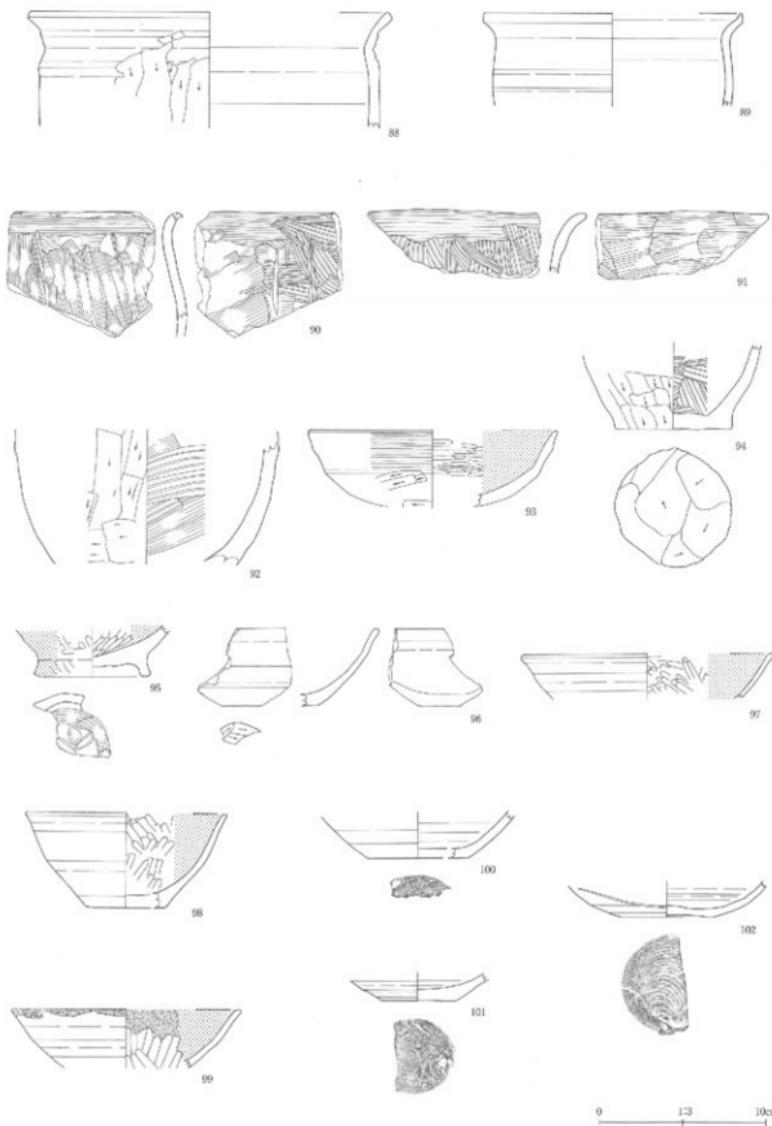
81

0 13 10cm

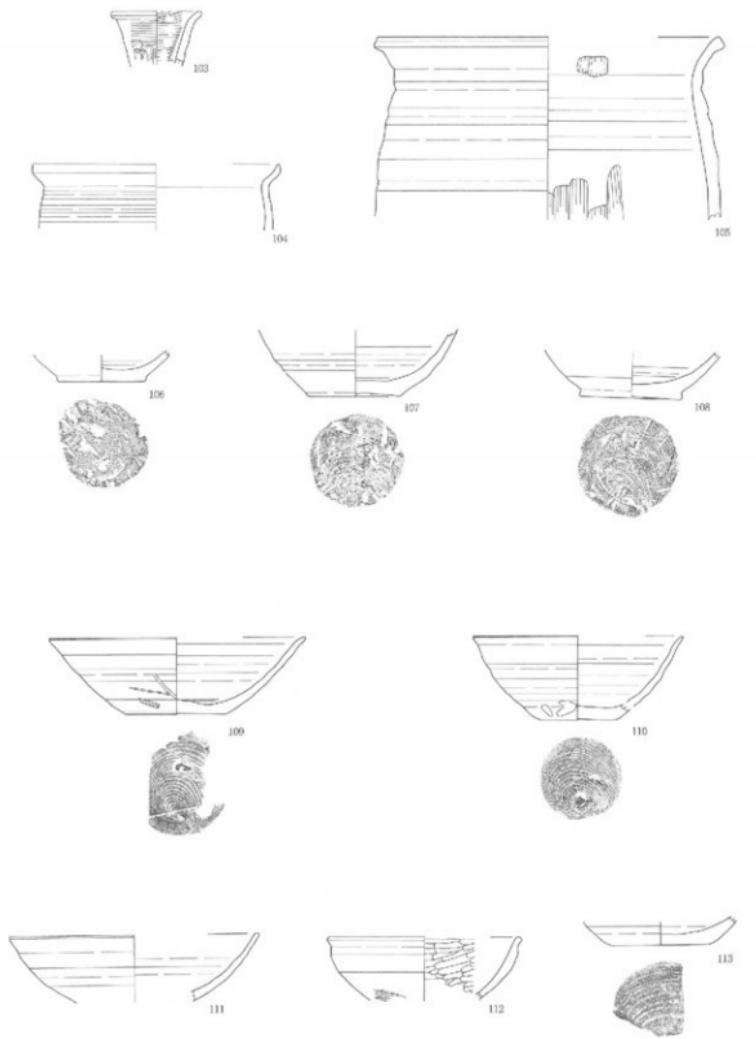
第34図 出土遺物 (RAO 18)



第35図 出土遺物 (RA018)



第36図 出土遺物 (RA018~020)

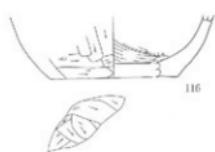


第37図 出土遺物 (RA020～RD083)

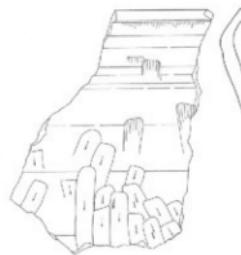
0 1/3 10cm



114



116



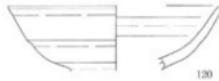
117



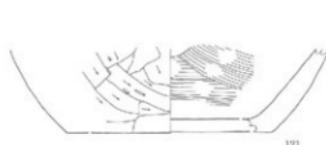
118



119



120



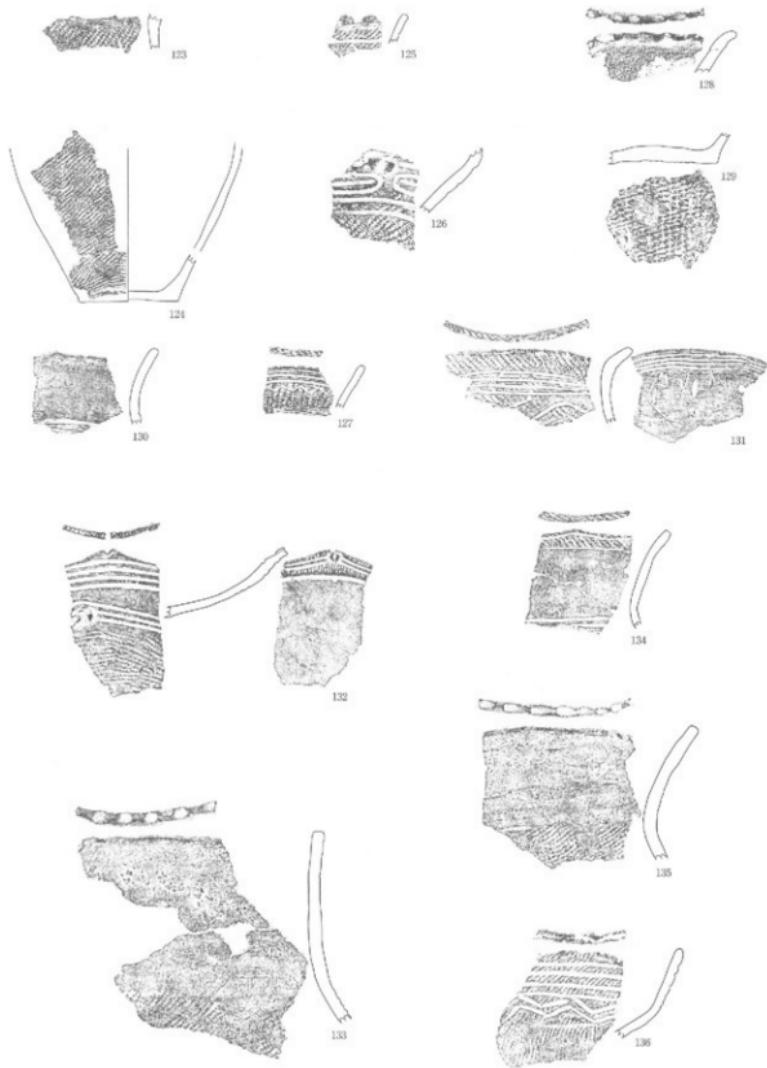
121



122

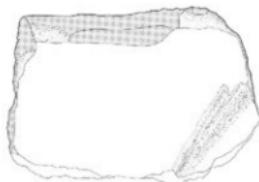
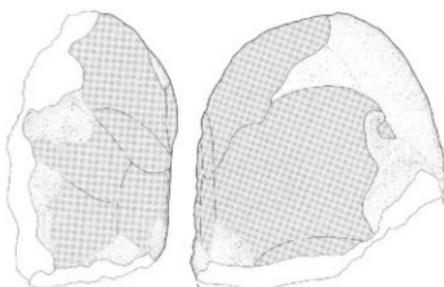
0 1 3 10cm

第38図 出土遺物 (R D 0 8 3 ~ R G 0 1 1)

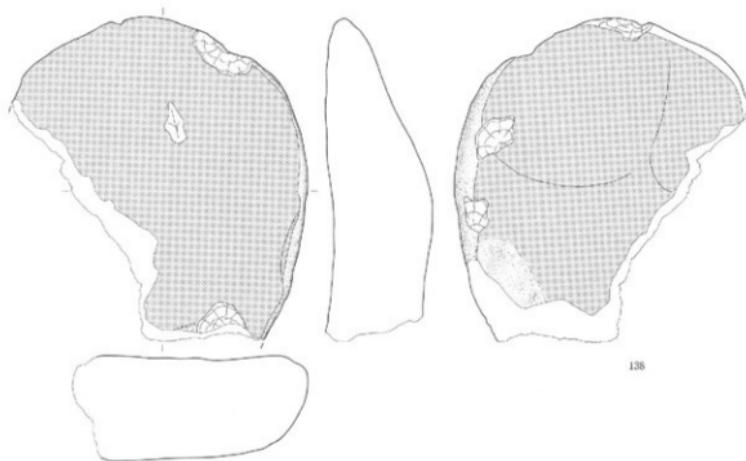


第39図 出土遺物（弥生土器・遺構内、外）

0 1:3 10cm



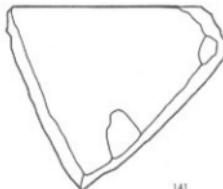
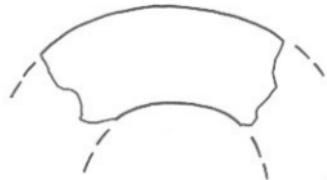
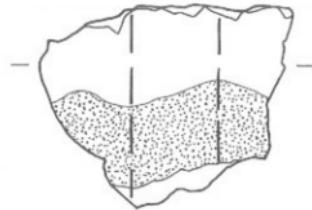
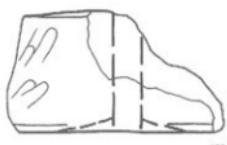
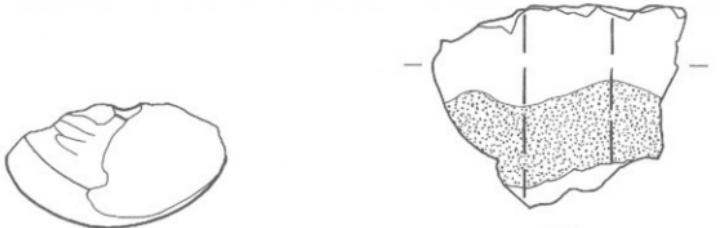
137



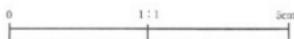
138



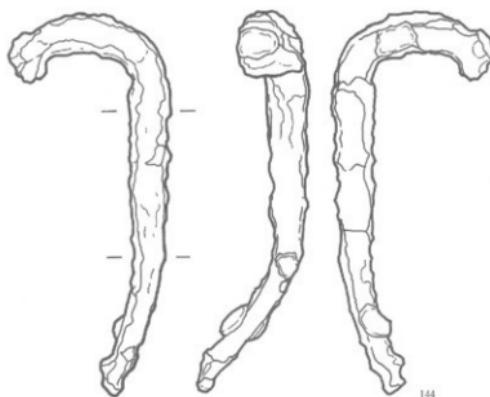
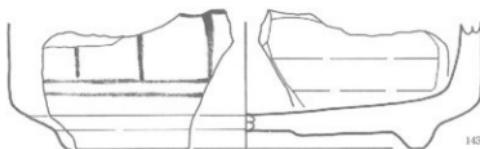
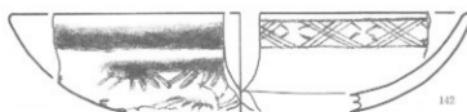
第40図 出土遺物（石器・石製品）



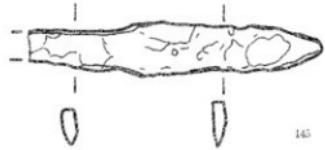
141



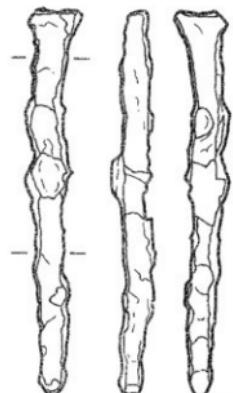
第41図 出土遺物（土製器・陶磁器）



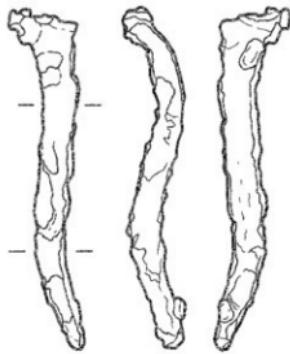
第42図 出土遺物（陶磁器・鉄製品）



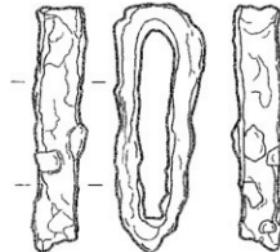
145



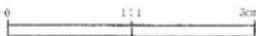
147



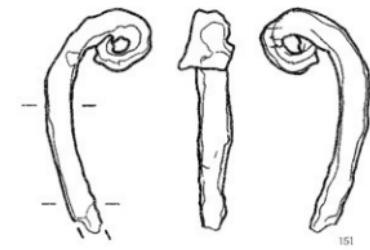
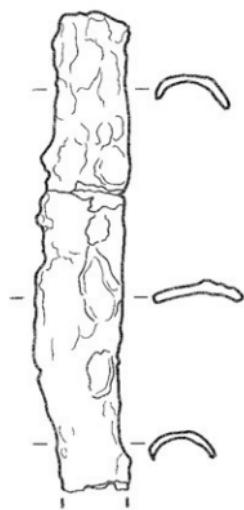
146



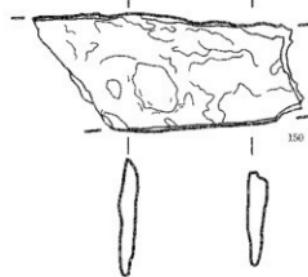
148



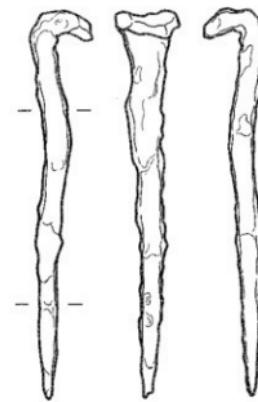
第43図 出土遺物（鉄製品）



149



150



152



第44図 出土遺物（鉄製品）

表2 造物觀察表（土器）

本番 1	番號名 RA014	出土地点 カマド左脇	形 種 成形 土師器 壺	外表面質(口端部)	内面質質(口端部)	外表面質(体側)	内面質質(体側)	底面質質	黑色斑塊	口徑cm	底径cm	高さcm	備考	
2	2	RA014	理工	土師器 壺	未	ヨコナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	18.7	9.1	36	輪積み壺が叩開に挟る。	
3	3	RA015	床面削除	土師器 壺	未	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	内面	<16.8>	<8.6>	内・外面上に有板=古被施。	
4	4	RA015	床面削除	土師器 壺	未	ヨコナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	内・外面	<15.8>	<4.3>	内・外面上に有板=古被施。	
5	5	RA016	カマド附近	土師器 壺	未	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	内・外面	<18.4>	<4.7>	外側に断駁なナナデ痕(削痕)。	
6	6	RA016	カマド附近	土師器 壺	未	ヨコナデ	ハクメ	ヨコナデ	ヨコナデ	内面	<16.2>	5.8	<2.5>	
7	7	RA016	理工	須磨器 罐	口クロ	ロクロ	ロクロ+ヘラカズリ	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ	<22.6>	<6.6>	土上に断駁が多く食入。	
8	8	RA017	理工	赤絞き 壺	口クロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<13.7>	4.3	口部部にアヌフルト付着。	
9	9	RA017	理工	赤絞き 壺	口クロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<13.7>	4.6	口部部にアヌフルト付着。	
10	10	RA017	理工	赤絞き 壺	口クロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	1.3	6.3	4.2	朱衣が美しい。
11	11	RA017	理工	赤絞き 壺	口クロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<13.2>	5.8	4.5	外側に断駁なロクロ口幅。
12	12	RA017	カマド	赤絞き 壺	口クロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<13.6>	6	4.5	外側に断駁なロクロ口幅。
13	13	RA017	カマド	土師器 外	口クロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	13.4	4.4	5	外側に断駁し、黒衣風ふ?
14	14	RA017	理工	赤絞き 壺	口クロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<13.2>	<6.2>	土上に金當母を食入。	
15	15	RA017	カマド	土師器 高台所	口クロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<14.8>	<5.5>	高台所被施。	
16	16	RA017	床面	赤絞き 壺	口クロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<13.5>	5.4	土上に金當母を多く食入。	
17	17	RA017	理工・カマド	土師器 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<13.0>	<6>	4.2	外側に断駁なロクロ口幅。
18	18	RA017	理工	赤絞き 壺	口クロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<13>	<4.5>	土上に蠟燭を食入。	
19	19	RA017	理工	土師器 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	14.5	4.6	土上に蠟燭や不明顯。	
20	20	RA017	カマド	赤絞き 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<13>	<3.5>	内面や不明顯。	
21	21	RA017	カマド	赤絞き 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<12.6>	<3.5>	内・外面上に剥離多く。	
22	22	RA017	理工	赤絞き 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	7	<2.5>	底面に滑止めラッパ切り縫。	
23	23	RA017	カマド	赤絞き 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	5.4	<2.5>	土上に金當母を食入。	
24	24	RA017	理工	赤絞き 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	6	<12>	全体下半に明瞭なロクロ二層。	
25	25	RA017	理工	赤絞き 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	5.8	<2.9>	内面に剥離が多い。	
26	26	RA017	理工	赤絞き 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<13>	<3.7>	外腹下部に指痕。	
27	27	RA017	理工	赤絞き 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	14.4	<4.5>	地熱し、黒色不均勻。	
28	28	RA017	カマド	土師器 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<12.5>	<5.0>	土上に蠟燭を多く食入。	
29	29	RA017	理工	赤絞き 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<13>	<3.8>	底面に3次の鉄錆、木炭錆?	
30	30	RA017	理工	土師器 壺	未	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	内面	<13>	<3.8>	底面に3次の鉄錆、木炭錆?	
31	31	RA017	理工	赤絞き 壺	未	ヘラカズリ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	内面	<12.6	<3.5>	底面に3次の鉄錆、木炭錆?	
32	32	RA017	理工	赤絞き 壺	未	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<13>	<4.8>	底面に3次の鉄錆、木炭錆?	
33	33	RA017	床面	赤絞き 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<12.5>	<4.5>	外腹下部にナヂ。	
34	34	RA017	カマド	赤絞き 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<12>	<4>	外腹下部にナヂ。	
35	35	RA017	理工	赤絞き 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<16.3>	<3.8>	底面が美しい。	
36	36	RA017	理工	土師器 壺	ロクロ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	ロクロ+ナデ	内面	<13.9>	<3.5>	底面に黒色剥離。	

本番 伝等	遺物名	出土地点・層位	器 形	外直圓筒形(口横部)	外直圓筒形(体部)	内面直筒形(口横部)	外直圓筒形(体部)	底面規則(内底)	底面規則(内底)	口径cm	底径cm	耕高cm	備 考
111 195 RD083 塗土	赤燒き 瓦	口クロロクロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	<15>	<15>	<4.5>	施土に細繩を多く含む。
112 196 RD083 塗土	赤燒き 瓦	口クロロクロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	<11.8>	<11.8>	<3.8>	内面落灰し深ぶ。
113 198 RD083 塗土	赤燒き 瓦	口クロロクロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	<11.0>	<5.3>	<1.4>	腹が平たい。
114 200 RD083 塗土	赤燒き 瓦	口クロロクロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	<11.0>	<5.3>	<1.4>	外部に細繩を含む。
115 201 RD083 塗土	赤燒き 瓦	口クロロクロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	<11.0>	<5.3>	<1.4>	施土に縫隙を含む。
116 202 RD083 塗土	赤燒き 瓦	口クロロクロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	<11.0>	<5.3>	<1.4>	口縫隙にフスフルト付着。
117 203 RD083 塗土	赤燒き 瓦	口クロロクロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	<11.0>	<5.3>	<1.4>	腹が平たい。
118 204 RE004 塗土	赤燒き 瓦	口クロロクロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	<11.0>	<5.3>	<1.4>	口縫隙にフスフルト付着。
119 205 RE004 塗土	赤燒き 瓦	口クロロクロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	<13.6>	<13.6>	<2.8>	口縫隙にフスフルト付着。
120 209 RE004 塗土	赤燒き 瓦	口クロロクロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	<12.8>	<12.8>	<2.8>	口縫隙にフスフルト付着。
121 211 RE005 塗土	赤燒き 瓦	口クロロクロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	<17.8>	<17.8>	<4.5>	内部粘性質、無ぶ?
122 213 RG011 塗土	赤燒き 瓦	口クロロクロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ロクロロナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	<14.4>	<14.4>	<4.5>	内面底部に明瞭なナヂ痕。

遺物観察表(赤生土器)

本番 伝等	遺物名	出土地点・層位	器 形	文 標・特 徴
123 301 RA018 床面	焼 瓦	中周切削(山王川層)	L.R.単面。	輪郭を彫り直した輪郭が見られる。
124 317 R.005 壁面	焼 出刃 鉢	中周切削(山王川層)	L.R.単面。	輪郭を彫り直した輪郭が見られ、外面全体に細かい擦文が残る。
125 318 R.005 壁土・焼出刃 鉢	焼 鉢	中周切削(山王川層)	L.R.単面。	輪郭を彫り直した輪郭が見られ、口縫隙が張る。
126 310 R.008 壁土	焼 鉢	中周切削(山王川層)	L.R.単面。	輪郭を彫り直した輪郭が見られ、窓口工字。
127 302 中央区 烧作土	燒 作土	中周切削(山王川層)	L.R.単面。	窓口工字。
128 303 中央区 烧作土	燒 作土	中周切削(山王川層)	L.R.単面。	窓口部に複数の縫隙が見られる。
129 305 中央区 烧作土	燒 作土	中周切削(山王川層)	L.R.単面。	窓口部に複数の縫隙が見られる。
130 306 中央区 烧作土	燒 作土	中周切削(山王川層)	L.R.単面。	窓口部に複数の縫隙が見られる。
131 308 中央区 烧作土	燒 作土	中周切削(山王川層)	L.R.単面。	窓口部に複数の縫隙が見られる。
132 311 中央区 烧作土	燒 作土	中周切削(山王川層)	L.R.単面。	窓口部に複数の縫隙が見られる。
133 312 中央区 烧作土	燒 作土	中周切削(山王川層)	L.R.単面。	窓口部に複数の縫隙が見られる。
134 313 中央区 烧作土	燒 作土	中周切削(山王川層)	L.R.単面。	窓口部に複数の縫隙が見られる。
135 315 中央区 烧作土	燒 作土	中周切削(山王川層)	L.R.単面。	窓口部に複数の縫隙が見られる。
136 316 烧側区 烧作土	燒 作土	中周切削(山王川層)	L.R.単面。	窓口部に複数の縫隙が見られる。

遺物観察表(石器・石製品)

本番 伝番	遺物名	出土地点・層位	器 形	長さcm	幅cm	重さg	地 線
137 2004 RA017 壁土	磨石・敲石	<16.8>	15.2	10	1509	安山岩 - 斧頭形(第四紀火山)	
138 2005 RA017 カマド付近	磨石・敲石	<19.4>	<16.2>	6.3	1515	安山岩 - 斧頭形(第四紀火山)	

遺物観察表（土製品）

本番 仮番	遺物名 出土地点・層位	性種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
139 401	RAO 15 塗土	粉鉢	2.2	<3.9>	1.9	14	2-3段重矢瓶、外腹の一側にミガキがあり。
140 402	RD 087 塗土	器口	<3.7>	4.6	1.6	26	外腹にガラス質をした墨分がある。

遺物観察表（陶製品）

本番 仮番	遺物名 出土地点・層位	器種	口径cm	底径cm	高さcm	製作地	年代	備考
141 405	RAO 18 塗土（塗瓦窯付近）	碗	<9.3>	<2>	1.9	近世（Ⅲ期）		
142 406	RAO 18 塗土（塗瓦窯付近）	皿	<7.5>	<2.6>	1.6	肥前	近世（Ⅲ期）	
143 407	RE 005 塗土（塗瓦窯付近）	盤			1.3	肥前	18世紀後半？	

遺物観察表（鉄製品）

本番 仮番	遺物名 出土地点・層位	器種	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	備考
144 1001	RAO 17 塗土	釘	7.9	3.4	0.4~0.7	14.1	
145 1002	RAO 17 塗土	刀子	<5>	1.1	0.2~0.3	3.6	
146 1003	RAO 17 塗土	釘	7	1.5	0.4~0.6	7.8	
147 1004	RAO 17 カマド	釘	7.9	0.9	0.6	6	
148 1005	RAO 17 カマド	刀身附隨金？	5.1	1	0.4~0.5	1.6	
149 1006	RAO 18 土枕1	不明	<1.9>	2	0.2	8.5	
150 1007	RAO 18 塗土	刀柄頭	<5.6>	2.5	0.3~0.4	11.9	刀柄頭の先端附近？
151 1008	RAO 18 塗土	釘	<4.6>	2.2	0.4~0.5	5.6	先端がセミマイ状に彎かれている。
152 1009	RAO 18 塗土	釘	<1.9>	1.3	0.3~0.6	4.1	

遺物観察表（骨）

本番 仮番	遺物名 出土地点・層位	器種	長さcm (頭~尾)	幅cm	厚さcm	重さg	備考
153	RD 078 塗土	馬骨	21.2	8.9	1.1~2.0	371	土坑底面から浮いた状態で出土した。近世のものと推定される。

V　まとめと考察

第5次調査で検出された遺構と遺物については、前年度に実施した隣接する第3次調査区での結果もふまえながら、遺構や時期毎に整理し考察を加えまとめとしたい。

1. 立地

北上川とその支流である零石川によって形成された、緩やかな河岸段丘面上に立地している。標高は123m前後であるが、周辺の古代の集落遺跡(台太郎・熊堂・飯岡才川・細谷地)と比較すると、本遺跡は1~2m程度標高が高く、盛南開発事業が進行している調査当時でも周囲を見渡すことができた。

また、本遺跡の北西約2kmには、古代城柵の「志波城跡」(803~811年)が存在するが、零石川の度重なる氾濫により、短期間で機能を南東約10kmの徳井城に移している。航空写真からも零石川の南側には、流路を幾度も変えて蛇行した様子を現在でもうかがい知ることができ、本遺跡の周辺にも河道の転跡が随所で見られる。

西側に隣接する第3次調査区では、古代の集落跡と大規模な墓域が混在した遺跡であることが明らかになっているが、本次調査区側は0.5~1m程度標高が低い位置にあり、遺構の分布も大きく異なった状況を示している。

2. 検出遺構について

(1) 積穴住居跡

(古墳時代末期：1棟)

調査区の南西端に位置するRA015積穴住居跡は、上面の大部分が後年の削平を受け、RG010溝跡を切るように検出されたものである。浅い埋土の中からは、丸底で内外面が黒色処理をされ、内外面の体部下部に段を持つ、古墳時代末期における坪の特徴を持った土器が出土している。

カマドは奈良時代の住居跡と同様に、主軸が北西方向を向き、壁面の中央付近に位置している。平面の開口部における計測値は径が約3mで、前年度の第3次調査区内から検出されている同時期の住居跡と比較するにほぼ同じ大きさであり、本次調査区内における奈良時代の住居跡とも大きな差異は見られない。

遺物はごく僅かで、上記のようなこの時期の特徴を示す2点の坪(No.3・4)が出土したのみである。

(奈良時代：2棟)

調査区の中央から西側にかけて分布しており、遺構の上面はやや削平を受けている。

どちらもカマドは、主軸が北西～西側を向き、位置は壁面の中央付近にあるが、その部分は土器片と褐色土、および地山の削りだしによって構築されていた。平面の開口部における径は2.5~3m程度で、遺構毎の顕著な規模の差異は認められないものの、前年度の第3次調査区内から検出された同時期の住居跡と比較すると、長軸方向で5m程度の差がある。また、RA019積穴住居跡のカマド右脇付近では、奥行き約50cm程度の貯蔵穴が壁面を横方向に掘り込んで作られていた。

遺物は、RA014積穴住居跡のカマド脇から出土したほぼ完形の甕(No.1)と、RA019積穴住居跡の埋土内における坪(No.93)程度で、出土量はごく僅かである。

(平安時代：4棟)

調査区の中央付近に3棟と、東端に1棟が分布している。RA018積穴住居跡を除き、上面が後年の削平を受けているため、遺構を少し掘り下げると床面に到達するような状況であった。

カマドは主軸方向や設置位置に規則性が見られなくなり、R A018竪穴住居跡のように作り替えのカマドが存在するものもあるが、そで部分に棟が芯材として使用される例が多くなる。R A016・017竪穴住居跡では、カマドが住居壁面の角に設けられており、煙道が焚き口付近から斜めに立ち上がる形態をしていたものと推定されるが、いずれも上面の削平が著しいため詳細な構造は不明である。平面の開口部における径は4m前後のものが多く、奈良時代の住居跡よりもやや大きい。

遺物は、R A017・018竪穴住居跡で全体の出土量の半数以上を占め、他の遺構との格差が顕著である。

(2) 竪穴状遺構

中央付近から3基の遺構が検出されているが、R E004竪穴状遺構を除き、断面形状が緩やかな掘り鉢の形態を呈するものが多く、遺物もほとんど出土していないことから、詳細な時期や性格は不明である。

(3) 土坑

全域においてほぼ溝遍なく分布する土坑は、形態が多様で時期や性格が不明なものが多い。特徴がある遺構としては、R D078土坑の底からやや浮き上がった状態で、馬の頭と歯の部分（No153）が出土し、またR D083土坑からは、重複するR E004竪穴状遺構と関連しているものと思われるような、土師器・赤焼きの壺・壺の一部が見つかっている。R D078土坑については、共伴する遺物がないため詳細な時期は不明であるが、馬を葬った近世の墓壙と推定している。

(4) 溝跡

3条の溝跡が、調査区の東西両端付近から検出されている。いずれも上面が後年の削平を大きく受けているため残存状況はよくない。

R G008溝跡は、前年度行った第3次調査区内から延びてきているもので、古代以前の旧河道にほぼ沿って分布しているものである。前年度は出土遺物もなく時期をつかみかねていたが、本次調査区内では、奈良時代のR A014竪穴住居跡に切られていることから、奈良時代以前の古代に構築されたものと考えられる遺構である。また、隣接するように分布するR G010溝跡は、古墳時代末期のR A015竪穴住居跡によって切られていたことから、古墳時代末期以前に構築された遺構と思われる。特にR G010溝跡の底部には、掘削時につけた工具痕が明瞭に残り、工具痕内の僅かな埋土には、褐色土が混入したブロック状の土が入っており、掘り方による修正が施されていた可能性が高い。

底部のレベル高が一定しない東端部のR G011溝跡も含めてこれらの溝跡は、区画としての性格を持つ遺構と考えられるものである。

(5) 掘立柱建物跡

調査区の中央からやや西側において、2棟の掘立柱建物跡が検出されているが、R B001掘立柱建物跡は2間×3間の構造で、南東側の梁間部分にはやや小径の補助的な支柱穴があり、R B002掘立柱建物跡は3間×4間で、北東側の部分に2基の支柱穴が確認されている。柱間寸法を計測してみると、1尺または0.5尺単位で構築されている近世の建物跡と考えられ、いずれも小形の家屋または付属小屋的な用途が想定されるものである。

<掘立柱建物跡の復元>

R B001掘立柱建物跡については、調査終了前に開催した現地説明会において、調査現場に搬入していた角材・垂木等を使用し復元作業を試みた。単に柱穴のみを頼りに復元したこともあり、どれほど原形に近い形態で復元することができたか自信はないが、現場や室内整理において柱穴の配列のみを目録追い統ける調査員にとって、立体的に組み上げられた建物の姿は意外に大きく、江戸時代の小～中規模な家族構成であれば、日常生活には不満なく居住が可能と思われた。

(6) 柱穴列

調査区の東端付近において、河川の氾濫により堆積したものと思われる細かな砂礫上から、3列の柱穴列が検出された。

調査前の状況は、人の進入が不可能なほどの荒れた雑地であったために、削平を受けることもなく推移してきたものと思われたが、検出された柱穴はいずれもごく浅く、深さが数cm程度のものばかりであった。

出土した遺物も、近世から近代にかかるようなものも含まれていたことから、新しい時期の遺構である可能性が高い。遺構の性格としては、柱穴列が規則的な千鳥状に配列されていることで、中央のRC002柱穴列を床の支脚部分とする長屋状の建物跡や、段丘崖に並行する区画のための柵列等が想定されるものの、類例に乏しく詳細は不明である。

3. 出土遺物について

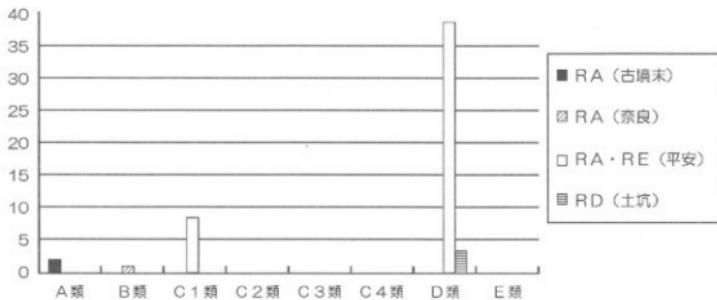
登録した遺物は全部で153点であるが、土師器・須恵器を始めとして、鉄製品や陶器、馬の骨など多様なものが出土している。また、合わせて出土した弥生土器は、古代面より上層からの出土であった。

(1) 出土した壺の比較

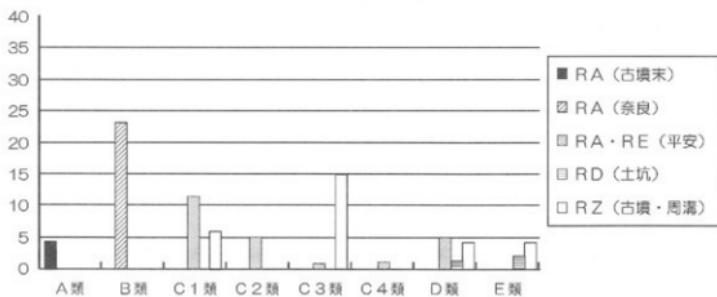
遺構から出土した残存率が良好な壺について、周辺地域の遺跡における分類事例に基づき、以下の通り簡潔にまとめてみた。なお表では、近接する第3次調査区から出土した遺物との比較もあわせて記述している。

分類	器種	時期	壺に見られる特徴・時期等	備考
A	土師器一壺	古墳末	未口クロ。底部丸底。内・外側の底部と体部の境界付近に、明瞭な段。(7世紀末の特徴)	R.A015堅穴住居跡からのみ出土。 (第3次でも1棟から出土)
B	"	奈良	未口クロ。底部丸底。外側の底部と体部の境界付近に、明瞭または緩やかな段。(8世紀代)	R.A019堅穴住居跡からのみの出土で、出土量はごく僅かである。 (第3次での出土量は多い)
C1	"	平安	ロクロ成形。内面または外側に黒色処理。底部に回転系切り痕。(9世紀代)	平安の住居跡から多数出土。 (第3次での出土量は、住居・古墳を含めてやや多い)
C2	"	"	ロクロ成形。内面または外側に黒色処理。底部はヘラケズリかナデ調整。体部下端に回転ヘラケズリまたは手持ちヘラケズリ調整。(9世紀代後半以降?)	本次調査では出土していない。 (第3次では、本次測量区に近接する平安の住居内から少量出土)
C3	"	"	ロクロ成形。内面または外側に黒色処理。底部と体部の下端に、回転ヘラケズリ調整。底部と体部の境界が角張る。(9世紀代後半を中心とする)	本次調査では出土していない。 (第3次では、古墳周溝内からの出土が大部分を占める)
C4	"	"	ロクロ成形。内面または外側に黒色処理。底部に丁寧なヘラミガキ。(9世紀後半以降から末にかけてのもの)	本次調査では出土していない。 (第3次では、本次測量区に近接する平安の住居内から1点出土)
D	赤焼き一壺	平安	ロクロ成形。内外側に黒色処理なし。酸化焰焼成によるもの。底部に回転系切り痕。(9世紀代)	最も多く出土しており、R.A017・018堅穴住居跡からのものが大部分を占める。 (第3次では、平安の住居内と一部の土坑・廻溝内からもやや多く出土)
E	須恵器一壺	"	ロクロ成形。還元焰焼成によるもの。底部は回転ヘラ切りで無調整。(9世紀代)	本次調査では出土していない。 (第3次でも出土量は僅かである)

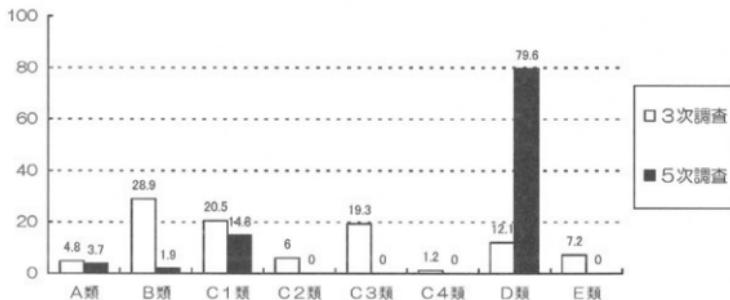
<本次調査区内から出土した坏の遺構別出土数> ※縦軸は個数を表す



<前年度の第3次調査区内から出土した坏の遺構別出土数> ※縦軸は個数を表す



<第3次・第5次調査区における坏の出土比率> ※縦軸・グラフ数値は%を表す



(2) 遺物から見た遺構毎における分布状況について

前頁の表・グラフをもとに、环で比較した各遺構における出土状況は末口クロのもの(A・B類)は古墳時代末期や奈良時代の住居内から出土しており、住居の構造と遺物に見られる特徴はほぼ合致している。

本次調査では、第3次調査の古墳・周溝群で多く見られた丁寧な調整が施される「回転ヘラケズリ調整」をもつものは一切出土しておらず、「ロクロ成形で酸化焰焼成」のいわゆる赤焼き上器の占める割合が顕著である。

一方で、古墳時代末期から奈良時代の环は、検出された遺構数の割に窓も含めた出土数は僅かなものに過ぎない。第3次調査区内におけるほぼ同時期の窓穴住居跡と比較しても、出土量の格差が顕著であり、遺構の上面が削平を受けていることを加味しても、少なさは際立つものといえる。

古墳時代末期のものと推定される住居跡は、第3次・第5次を合わせても2棟に過ぎず、周辺一帯を含めたこの地区では、奈良時代以降から平安時代にかけて、本格的に集落がややまとまって立地していく様子が見て取れる。

(3) 鉄製品

平安時代のRA017・018窓穴住居跡から出土した刀劍付隨金具?(No148: R A017)や刀劍類(No150: R A018)については、住居内で通常に使用されたものとは考えにくいものである。おそらく、第3次調査区内から検出されている古墳や周溝群に廻わる供獻品としての遺物が、何らかの理由で住居内に持ち込まれた可能性が考えられるものの、詳細については不明である。

(4) 弥生土器

登録した弥生上器は、全て表土中の耕作土内から出土したもので、土器片に摩滅したような痕跡は見られないことから、洪水等の流れ込みによるものではなく、客土として搬入された耕作土内に含まれていたものと推定される。いずれも弥生時代中期初頭(山王Ⅱ層)のものが大半を占めるが、一部には青木畠式に並行する形式と思われるような弥生時代前期の遺物も含まれている。

4. 第3次・第5次調査結果から見た一考察

今年度の調査は、前年度の調査区から続く面を行ったものであるが、遺構の分布状況には顕著な差異が表れている。

第5次調査区(1,773m²)は、前年度調査の第3次調査区(10,670m²)と地続きではあるが、表土を剥ぐと両区の境界付近には、古代以前のものと推定される旧河道が延びていることが確認され、第5次調査区の方が0.5~1m程度低くなっていた。

この僅かな高低差が、集落の立地に大きな差異をもたらしており、標高がやや高い第3次調査区に「古代の集落・古墳・墓壙群」、やや低い第5次調査区においては「古代の集落・近世の建物跡」と、それぞれ性格や時期が異なるった遺構の分布状況を示している。

航空写真から遺跡周辺を俯瞰してみると、住宅開発が進んだ現在でも河道の痕跡が随所で見られ、北西約2kmの位置にある志波城跡が、準石川の度重なる氾濫により、わずか数年で徳丹城へ機能を移さざるを得なかつたことからも、一帯は元来洪水による被害を受けやすい地域であったことが容易に理解できる。

この土地に暮らした人々は、崇敬対象である先祖を埋葬する場所として、氾濫の被害をより受けにくく最も上の土地を選んでいた様子が、第3次調査結果から窺い知ることができた。一方のやや低い位置にある第5次調査区では、さほど距離が離れていないにも関わらず、古代の古墳や墓壙と思われるような遺構はなく、第3次調査区では一切見つかっていない、近世の掘立柱建物跡をはじめとする遺構群が検出されている。



飯岡沢田遺跡第3次・第5次調査結果による遺構分布図

前年度の第3次調査区は、水害に遭いにくい最も居住に適するような周囲より高い土地に位置しているながらも、近世以降の遺構が調査区内から一切検出されていないことは、通常では考えにくいことである。おそらく墓域としての痕跡や伝承が、後世まで残り続けていた結果とも推測され、近年に至るまで庶民が居住を忌避してきた可能性が、十分に考えられるのではないかだろうか。

近隣の古代の遺跡において、該期の墓域が検出されずに推移してきたことは、これまでの調査が本遺跡よりもやや低地において多く行われてきたことによるものと思われる。本遺跡に関する発掘調査は随時続けられていく予定であり、周辺の試掘調査結果においてもやや高い南側の検出面では、古墳群が連続している状況が確認されている。2か年に渡る成果から、古代の墓域は居住域に優先して、標高が周囲より少しでも高い部分を極力選んだうえで造営されたのではないかと筆者は考えているが、進展していく今後の調査結果を楽しみに待ちたい。

<引用・参考文献>

【論文・研究紀要等】

- 古瀬 哲：1995 「茨城県における古代火葬墓の地域性—土浦市立博物館保管の付葬器の資料紹介および県内事例の集成からー」土浦市立博物館紀要第6号
- 庄内昭男：1984 「秋田県における古代・中世の火葬墓」研究報告第9号 秋田県立博物館
- 直井孝一：1985 「北海道式古墳の再検討」考古学ジャーナルNo.213 ニュー・サイエンス社
- 高橋信雄：1987 「岩手県における末期古墳群の再検討」北東古代文化第18号 北東古代文化研究会
- 玉川英喜：1990 「岩手県内の円形周溝と方形周溝」紀要X （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

- 阿部義平：1995 「古墳周辺文化の研究展望」研究紀要第10号 秋田県埋蔵文化財センター
- 八木光則：1996 「東北北部の終末期古墳群」岩手考古学第8号 岩手考古学会
- 〃：1998 「馬鹿川流域の様相」第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料
- 藤沢敦：1997 「東北北部の末期古墳の主体部構造」東北史学会大公考古学部会研究発表資料 1997
- 高橋典右衛門：1989 「楓立柱建物跡の間尺とその時代性」紀要IX（財）岩手県文化振興事業団理蔵文化財センター
- 〃：2000 「磐戸の考古跡」・「土墳墓から古墳へ」考古学ジャーナルNo.462 ニュー・サイエンス社
- 宇部則保：2002 「東北北部型土器師器にみる地域性」市川金丸先生古稀記念献呈論文集・市川金丸先生古稀を祝う会編
- 伊藤玄三：2002 「江釣子古墳群の意味するもの」第9回北上市埋蔵文化財展講演資料
- 小山野哲憲：1987 「岩手の弥生式土器編年試論」岩手県立博物館研究報告第5号 岩手県立博物館
- 大川清他編：1996 「日本土器辞典」雄山閣

【発掘調査報告書】

- 「砂沢遺跡発掘調査報告書」弘前市教育委員会 1988
- 「殿見遺跡Ⅰ・Ⅱ」八戸市埋蔵文化財調査報告書第49・57集 八戸市教育委員会 1992・1993
- 「丹後平古墳」八戸市埋蔵文化財調査報告書第44集・八戸市教育委員会 1990
- 「丹後平（1）遺跡・丹後平古墳」八戸市埋蔵文化財調査報告書第66集・八戸市教育委員会 1995
- 「丹後平古墳群」八戸市埋蔵文化財調査報告書第93集・八戸市教育委員会 2002
- 「新谷地北遺跡」宮城県文化財調査報告書第146集・宮城県教育委員会 1992
- 「熊堂古墳群・浮島古墳群発掘調査報告書」岩手県立博物館調査研究報告書第6冊 1990
- 「徳井城跡」久慈町文化財調査報告書・岩手県紫波郡久慈町教育委員会 1995～2001
- 「重島遺跡・藤沢秋森古墳群」矢巾町文化財調査報告書第22集・岩手県紫波郡矢巾町教育委員会 1998
- 「藤沢秋森古墳群」矢巾町文化財調査報告書第23集・岩手県紫波郡矢巾町教育委員会 1999
- 「岩崎台地遺跡群発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団理蔵文化財調査報告書第214集
 （財）岩手県文化振興事業団理蔵文化財センター 1995
- 「小幡遺跡第4次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第265集
 （財）岩手県文化振興事業団理蔵文化財センター 1996
- 「稻村寺遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第348集
 （財）岩手県文化振興事業団理蔵文化財センター 2001
- 「台太郎遺跡第18次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第369集
 （財）岩手県文化振興事業団理蔵文化財センター 2002
- 「台太郎遺跡第26次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第416集
 （財）岩手県文化振興事業団理蔵文化財センター 2002
- 「台太郎遺跡第35次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第417集
 （財）岩手県文化振興事業団理蔵文化財センター 2003
- 「岩手県埋蔵文化財発掘調査略例（平成13年度）」岩手県文化振興事業団理蔵文化財調査報告書第397集
 （財）岩手県文化振興事業団理蔵文化財センター 2002

写 真 図 版



写真図版 1 遺跡上空



調査前風景



刈り払い作業



試 検



重機による粗盛り

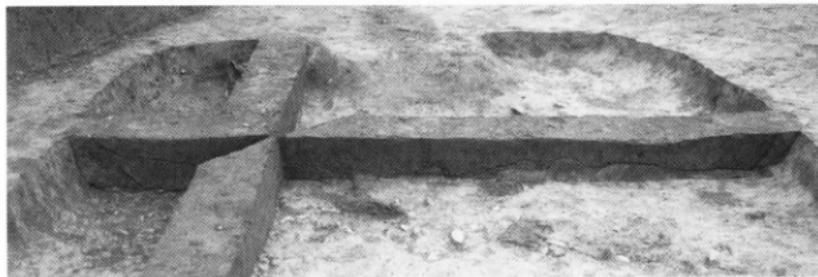


根切り作業

写真図版2 調査前風景



RA014型竪穴住居跡 全景（東から）



埋上（東から）



埋上（北から）

写真図版3 RA014型竪穴住居跡①



かまど穴掘



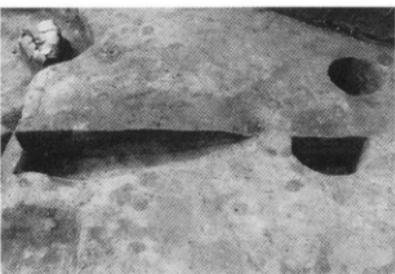
かまど断面



かまど断面

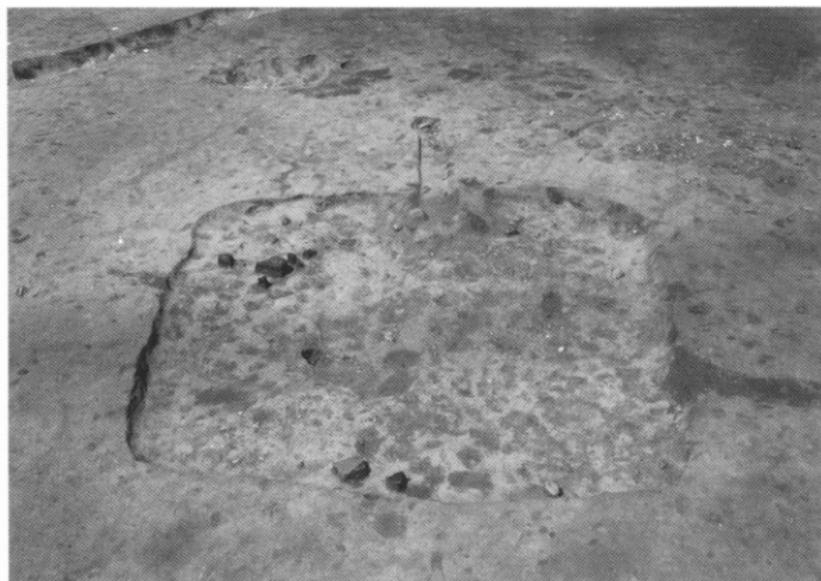


出土物（土師器・瓦）

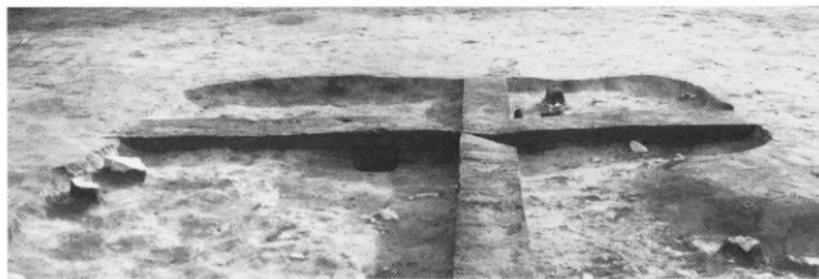


煙道・煙り出し断面

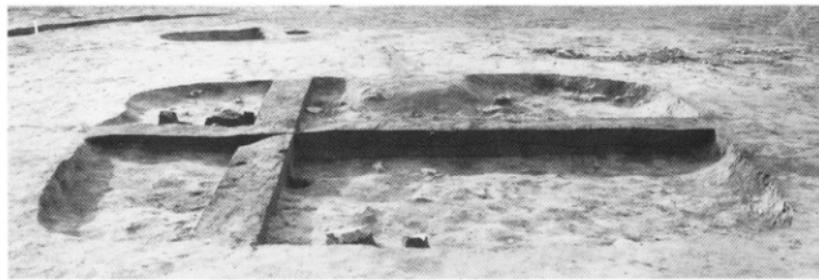
写真図版 4 RA014 竪穴住居跡②



RA 015 縦穴住居跡 全景（南東から）

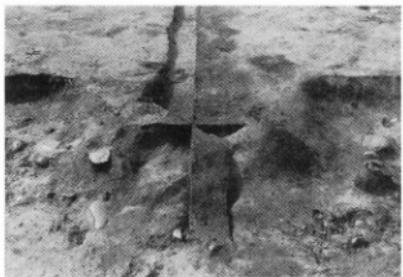


埋土（北東から）



埋土（南東から）

写真図版5 RA 015 縦穴住居跡①



かまど断面



かまど断面



煙道・煙り出し断面



かまど完璧



かまど断面



出土遺物（土師器・环）



炭化物出土状況

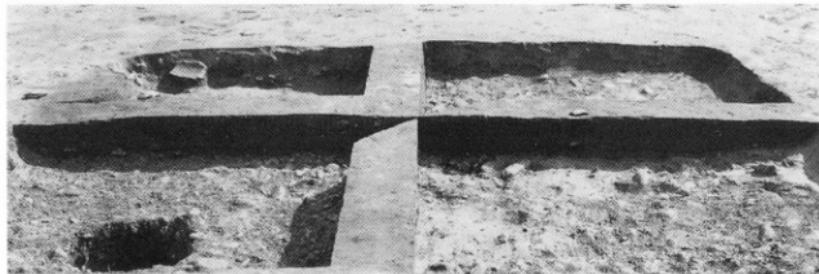


かまど精査風景

写真図版 6 RA015 積穴住居跡②



R A O 1 6 壁穴住居跡 全景（北西から）

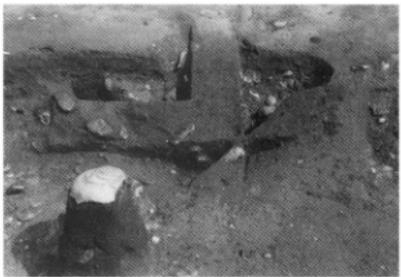


埋土（北東から）

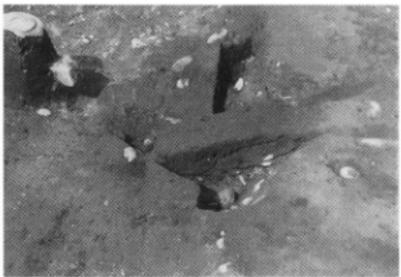


埋土（北西から）

写真図版7 R A O 1 6 壁穴住居跡①



かまど断面



かまど断面



かまど完面



出土遺物（土師器・环）



作業風景



写真図版 8 R A 016 竪穴住居跡②



RA 017 壁穴住居跡 全景（北西から）



埋土（南西から）



埋土（北西から）

写真図版9 RA 017 壁穴住居跡①



かまど断面



かまど断面



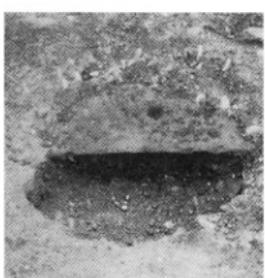
かまど完掘



かまどぞて断面



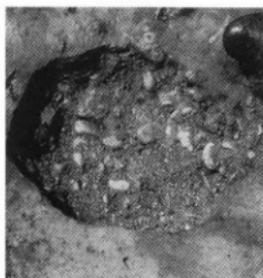
Pit 1断面



Pit 2断面



Pit 3断面



Pit 1完掘



Pit 2完掘

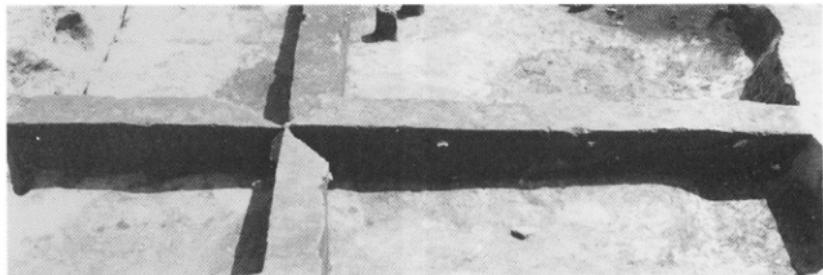


Pit 3完掘

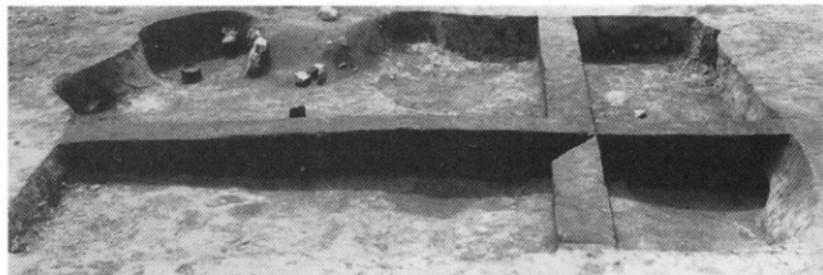
写真図版10 RA017 竪穴住居跡②



RA 018 壁穴住居跡 全景（北西から）



埋土（南西から）



埋土（北西から）

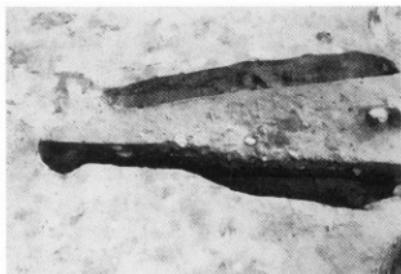
写真図版11 RA 018 壁穴住居跡①



南かまど断面



南かまど断面



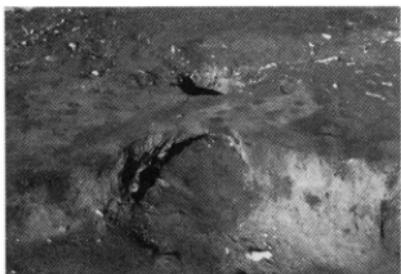
南かまど煙道・焼り出し断面



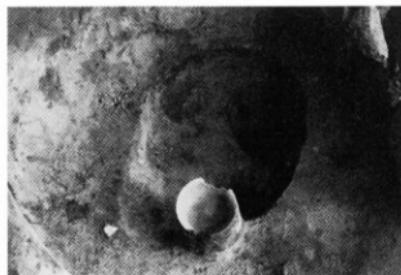
南かまど完掘



南かまどで断面



東かまど完掘



Pit 内遺物（土器器・环）

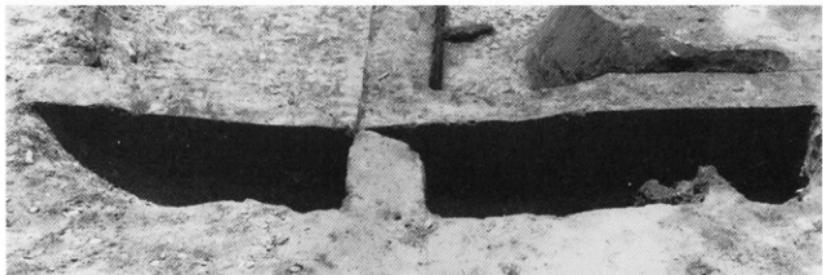


付随土坑内遺物（铁製品）

写真図版12 RA018竪穴住居跡②



RAO19号穴住居跡 全景（東から）



埋土（北から）



埋土（東から）

写真図版13 RAO19号穴住居跡①



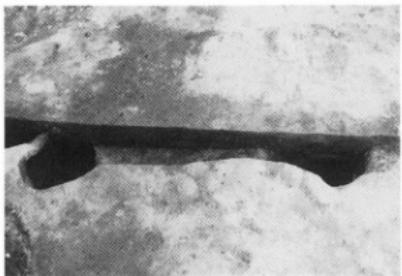
かまど掘り下げる始



かまど断面



かまど断面



煙道・煙り出し断面



かまど完掘



貯藏穴（かまど右脇）



炭化物出土状況



かまどそで断面

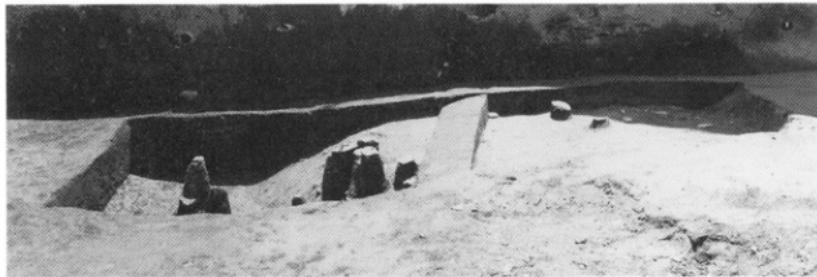
写真図版14 R A 0 1 9 竪穴住居跡②



R A 0 2 0 竪穴住居跡 全景（北から）

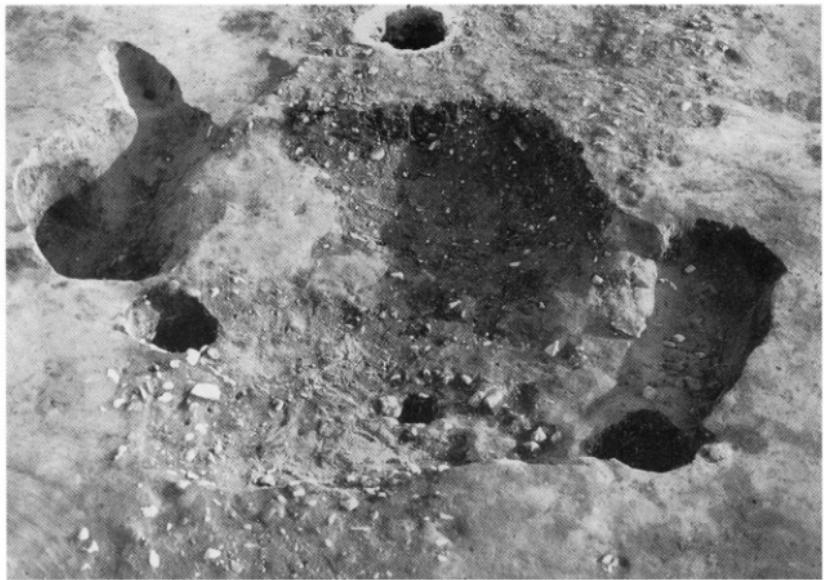


埋土（西から）



埋土（北から）

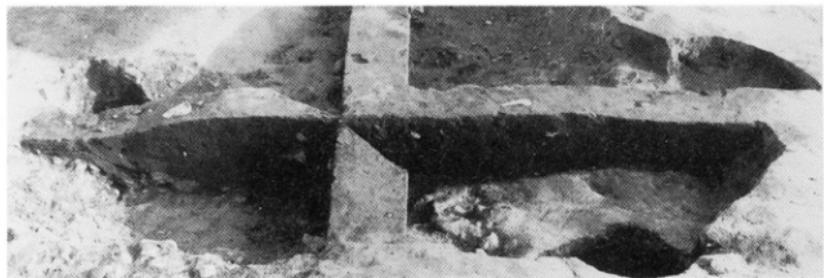
写真図版15 R A 0 2 0 竪穴住居跡



RE 003型穴状遺構 全景（北東から）

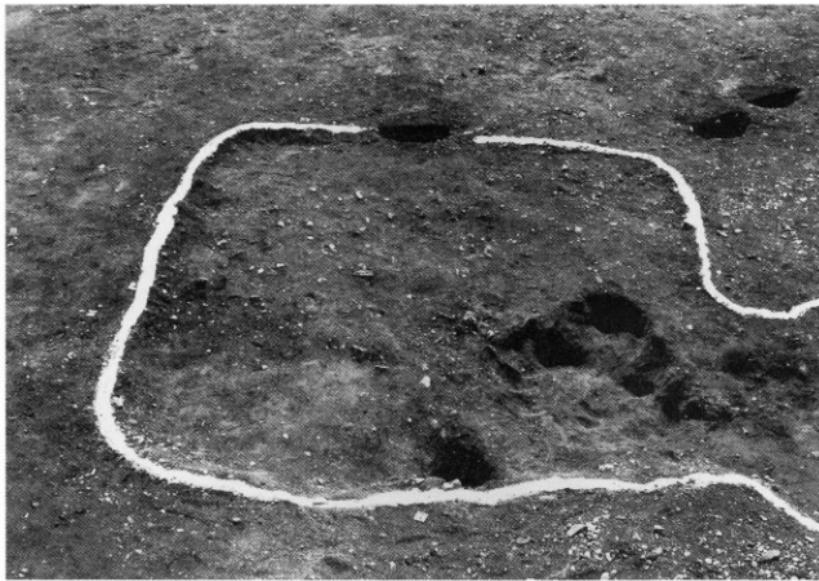


埋上（南東から）



埋上（北東から）

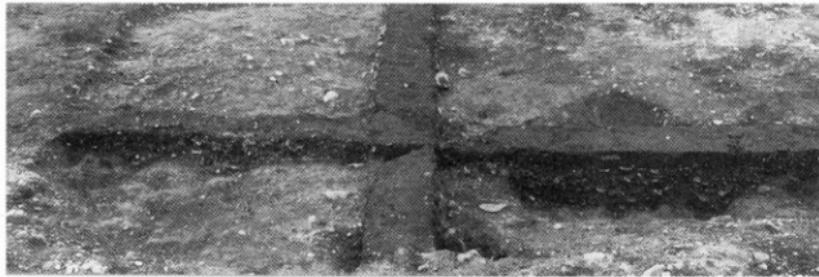
写真図版16 RE 003型穴状遺構



RE 004型竪穴状遺構 全景（北東から）

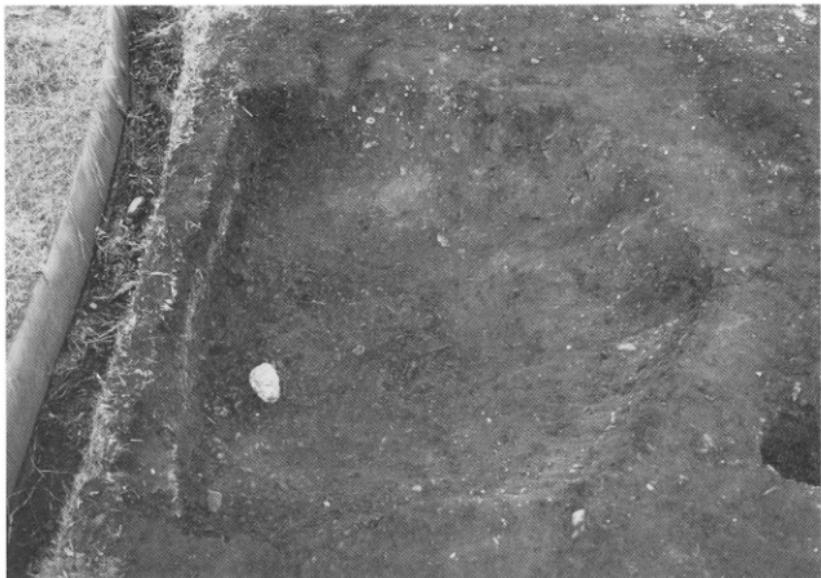


埋土（北西から）

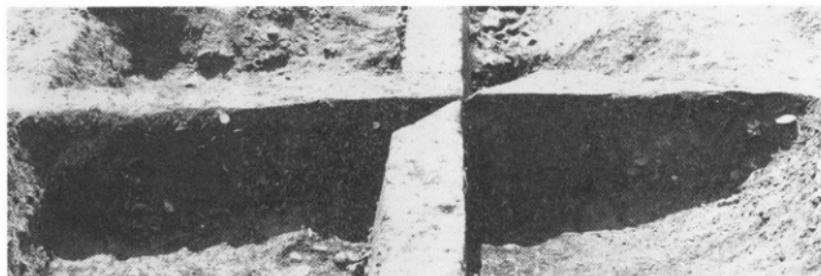


埋土（北東から）

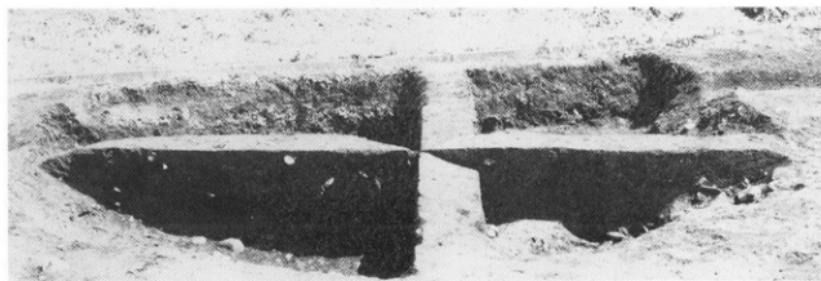
写真図版17 RE 004型竪穴状遺構



RE 005 竪穴状遺構 全景（北西から）

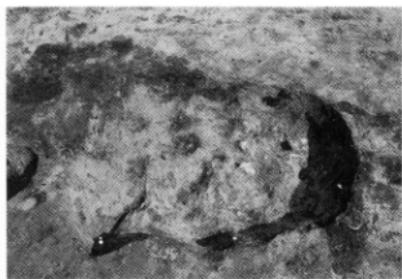


埋土（北西から）

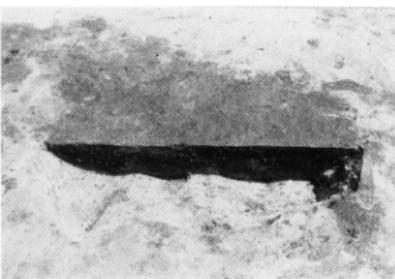


埋土（南西から）

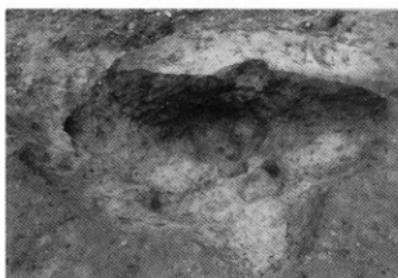
写真図版18 RE 005 竪穴状遺構



R D 0 7 4 土坑 平面



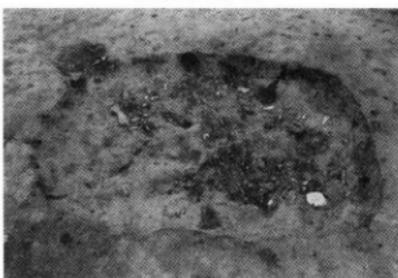
断面



R D 0 7 5 土坑 平面



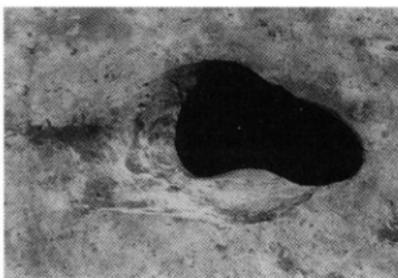
断面



R D 0 7 6 土坑 平面



断面

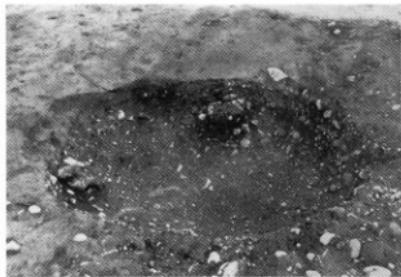


R D 0 7 7 土坑 平面

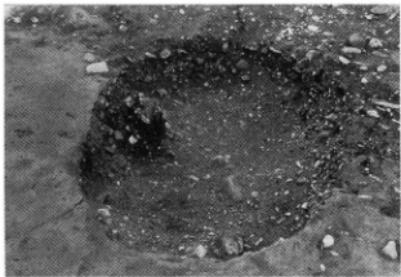


断面

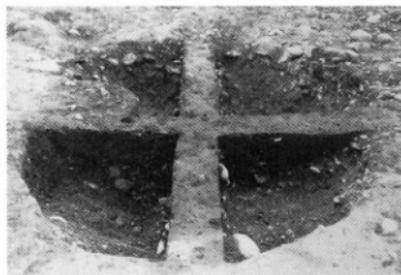
写真図版19 土坑 (R D 0 7 4 ~ 0 7 7)



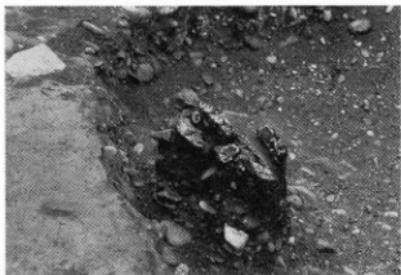
R D 0 7 8 土坑 平面（北東から）



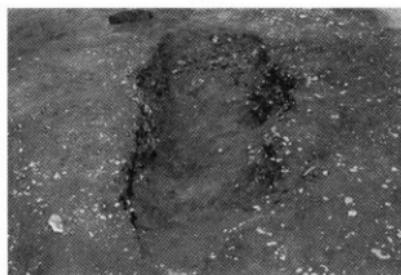
平面（南東から）



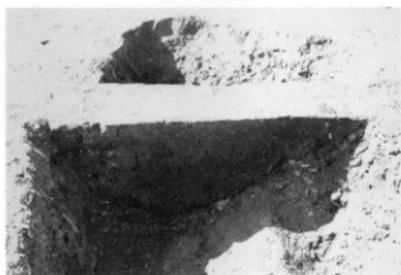
断面



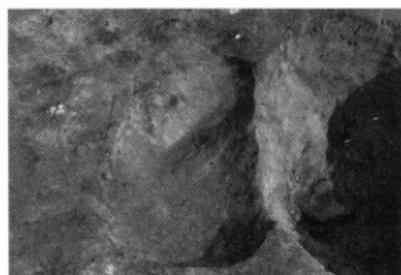
馬の頭出土状況



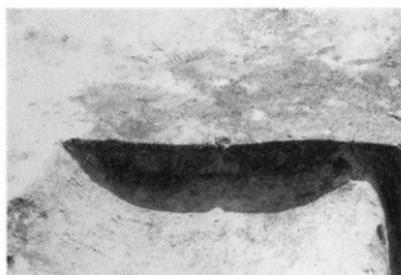
R D 0 7 9 土坑 平面



断面



R D 0 8 0 土坑 平面

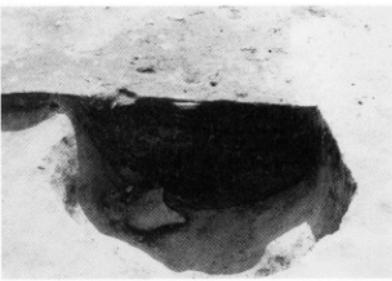


断面

写真図版20 土坑（R D 0 7 8 ~ 0 8 0 ）



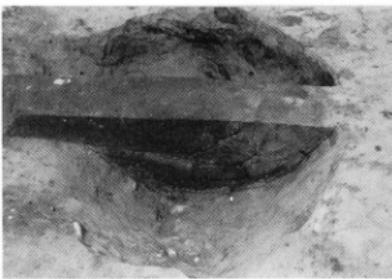
RD 081 土坑 平面



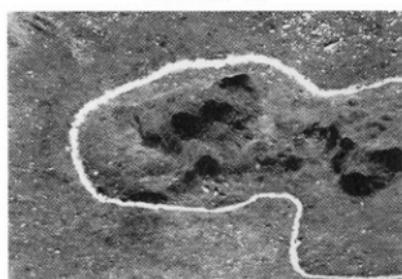
断面



RD 082 土坑 平面



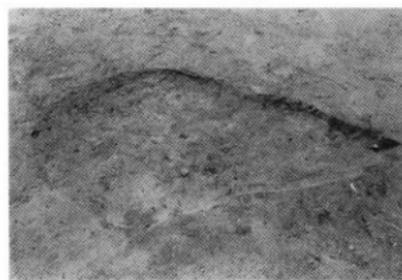
断面



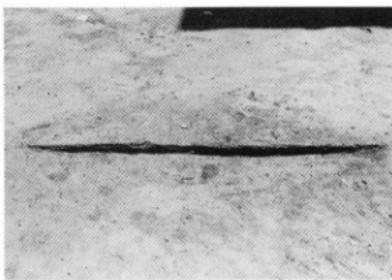
RD 083 土坑 平面



断面



RD 084 土坑 平面

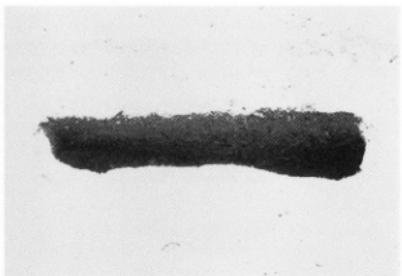


断面

写真図版21 土坑 (RD 081~084)



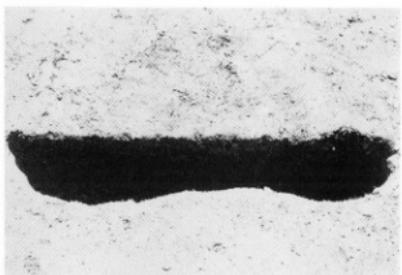
RD 085 土坑 平面



断面



RD 086 土坑 平面



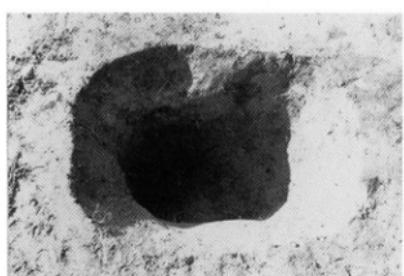
断面



RD 087 土坑 平面



断面

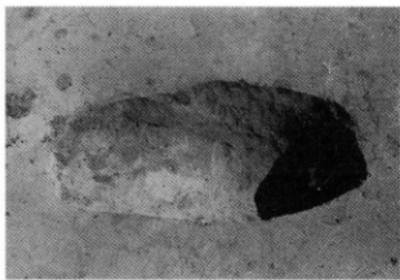


RD 088 土坑 平面

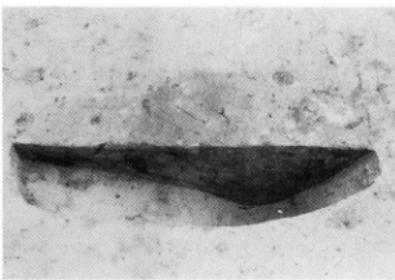


断面

写真図版22 土坑 (RD 085~088)



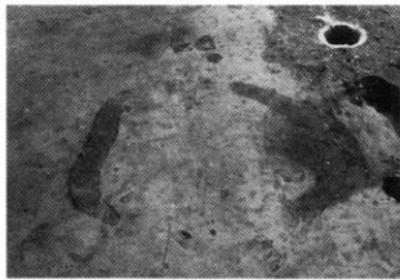
R D 0 8 9 土坑 平面



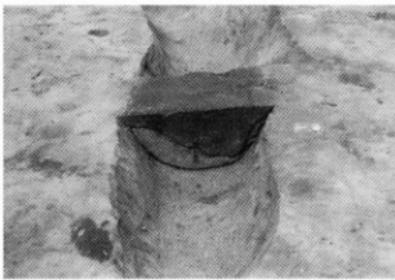
断面



R Z 0 4 7 周溝 全景

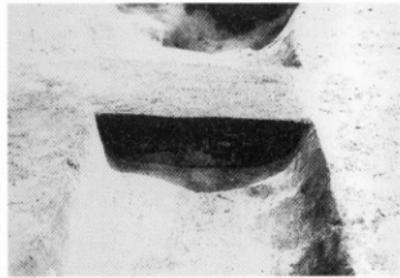
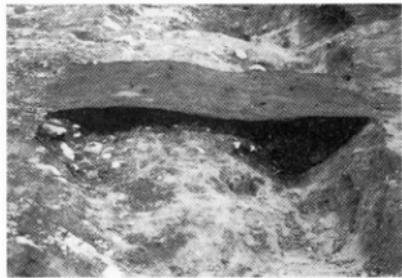
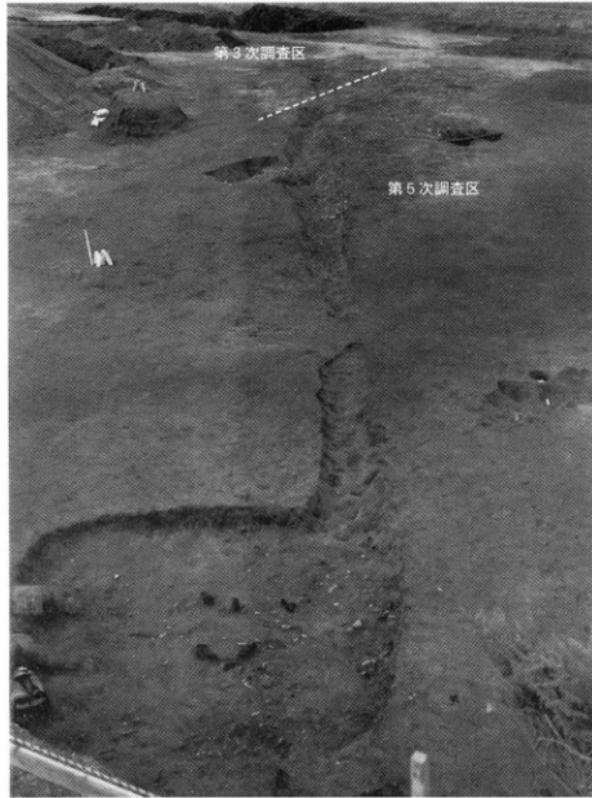


検出状況

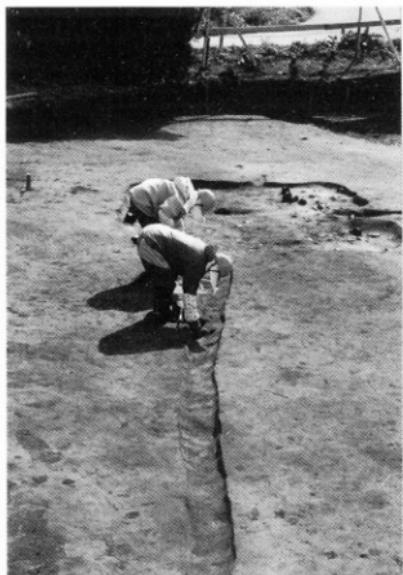


周溝断面

写真図版23 土坑（R D 0 8 9）・周溝（R Z 0 4 7）



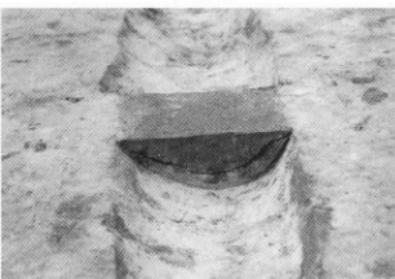
写真図版24 RG 008溝跡



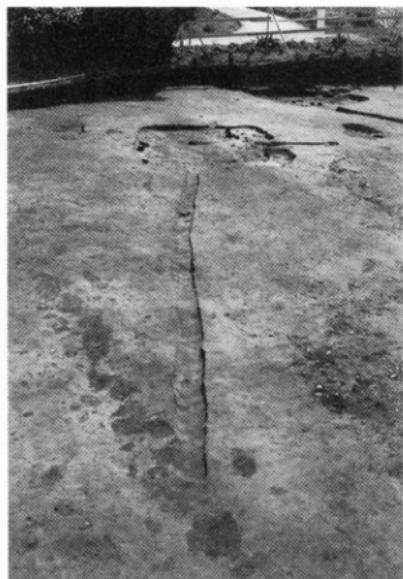
クリーニング作業



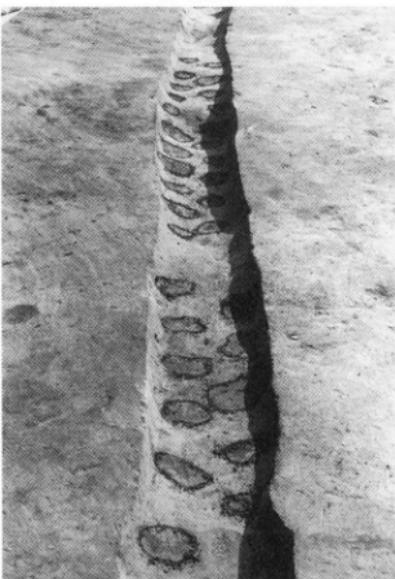
東ベルト断面



西ベルト断面

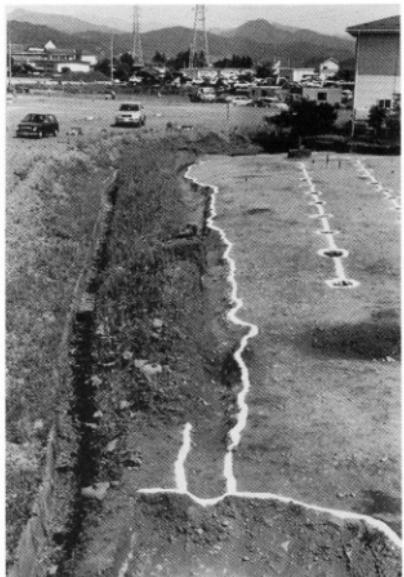


完掘全景（北東から）

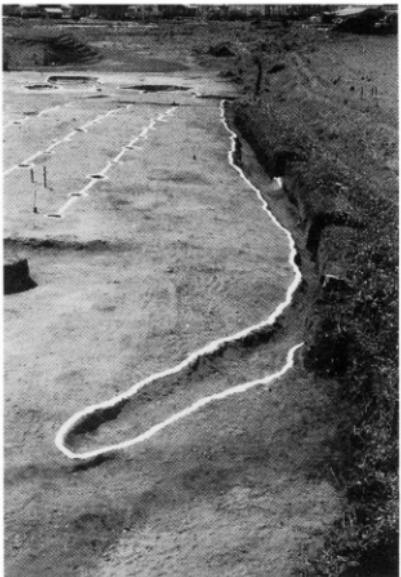


底部に残る工具痕

写真図版25 R G O 10溝跡



RG 011溝跡 完掘全景（北西から）



完掘全景（南東から）



作業風景

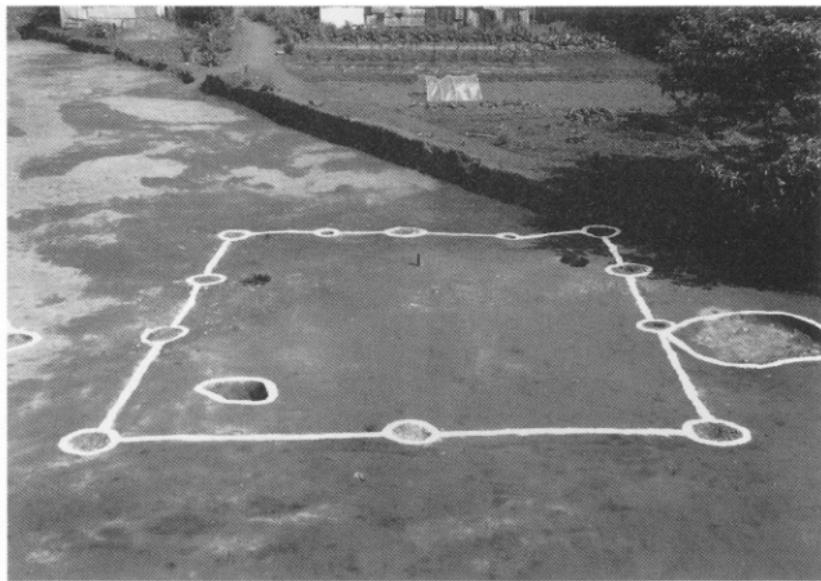


東ベルト断面

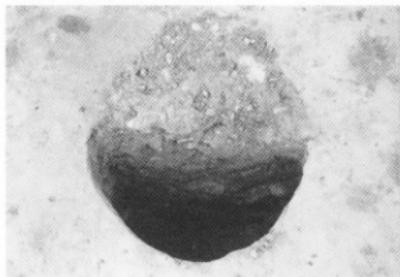


中央ベルト断面

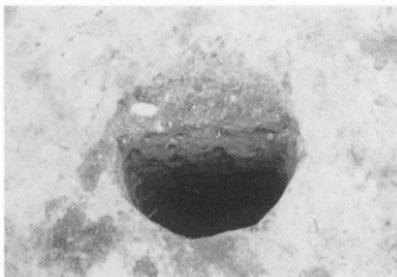
写真図版26 RG 011溝跡



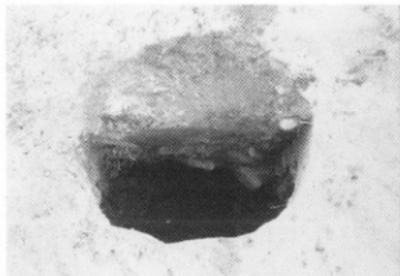
R B 0 0 1 挖立柱建物跡 全景（北西から）



P 1 断面



P 2 断面

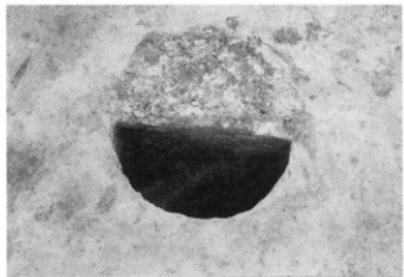


P 3 断面

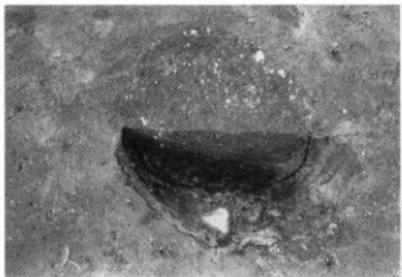


P 4 断面

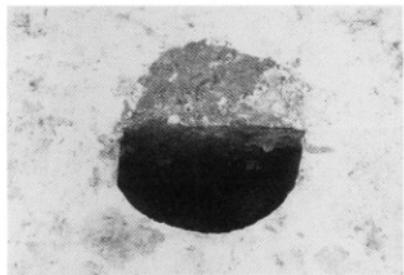
写真図版27 R B 0 0 1 挖立柱建物跡①



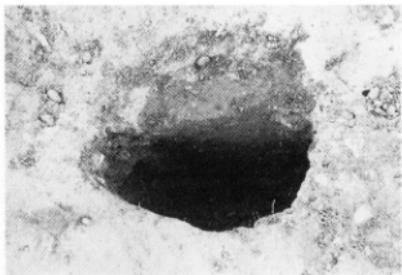
P 5 断面



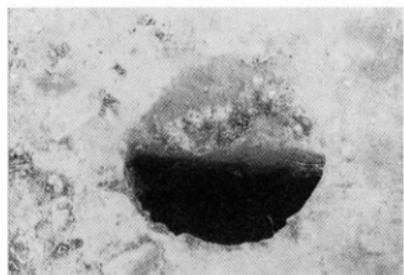
P 6 断面



P 7 断面



P 8 断面



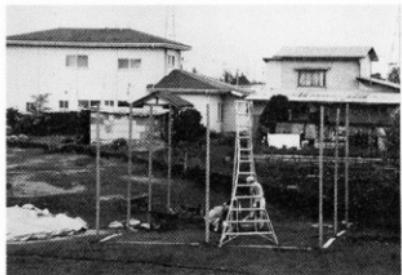
P 9 断面



P 10 断面

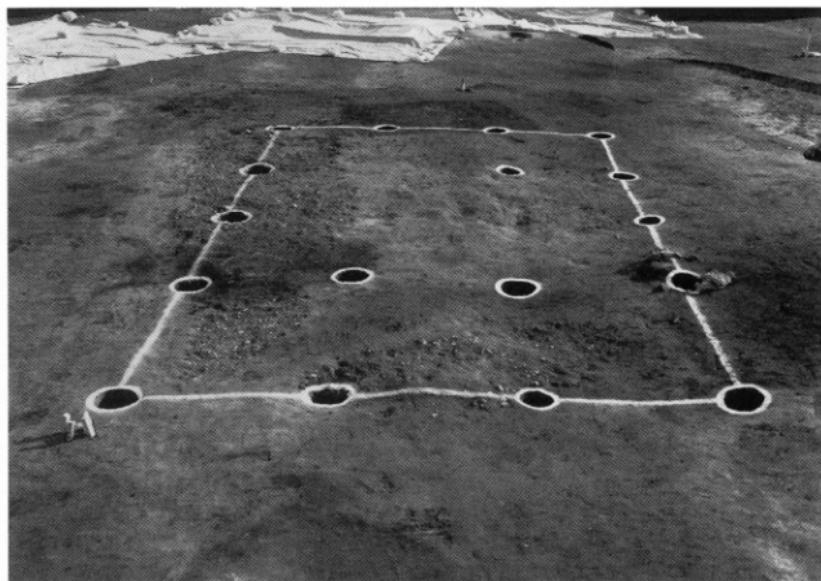


作業風景

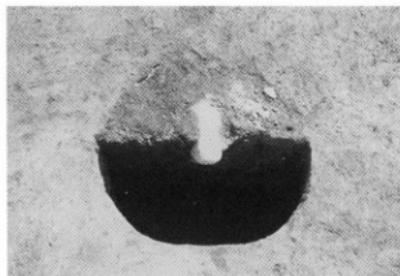


建物復元作業

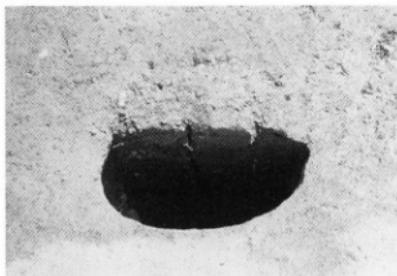
写真図版28 R B O O 1 挖立柱建物跡②



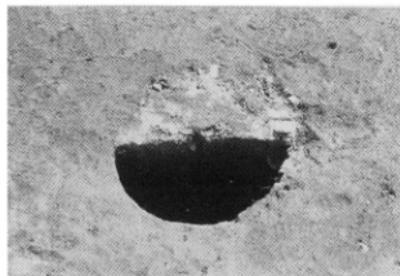
RB 002 堀立柱建物跡 全景（北東から）



P 1 断面



P 2 断面



P 3 断面

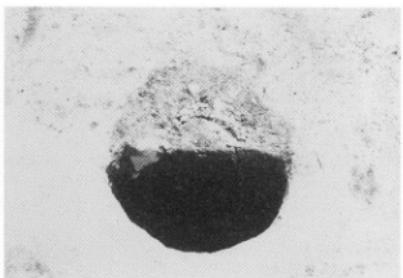


P 4 断面

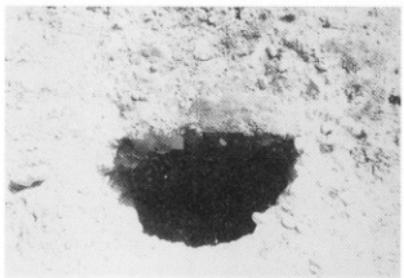
写真図版29 RB 002 堀立柱建物跡①



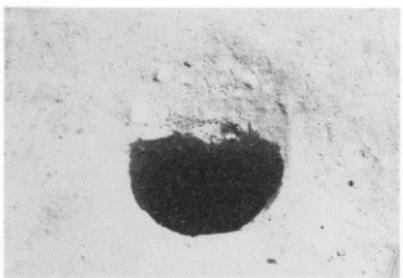
P 5 断面



P 6 断面



P 7 断面



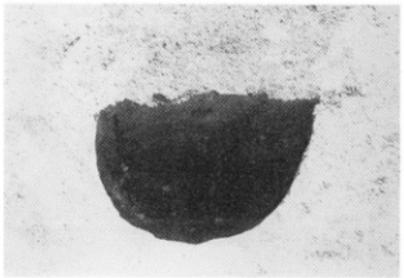
P 8 断面



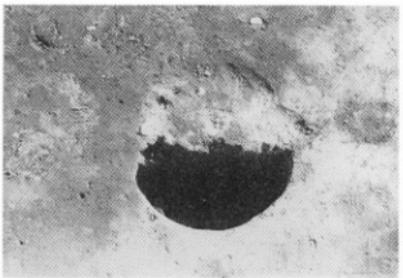
P 9 断面



P 10 断面（周りの石はRA017のかまど袖石である）

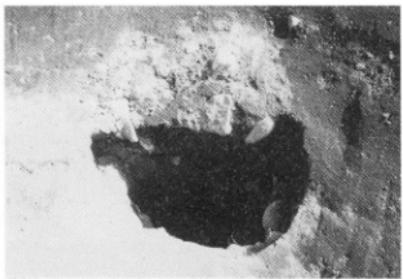


P 11 断面

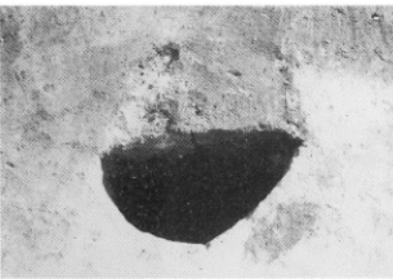


P 12 断面

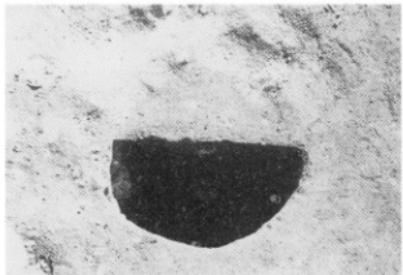
写真図版30 RB002 捨立柱建物跡②



P13断面



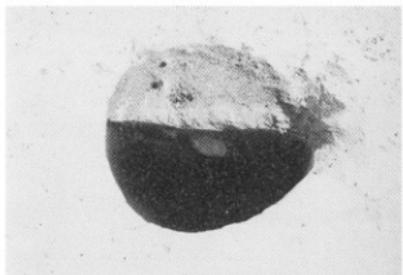
P14断面



P15断面



P16断面



P17断面



柱穴（P10）は、RA017のかまど袖石を壊して作られていた。



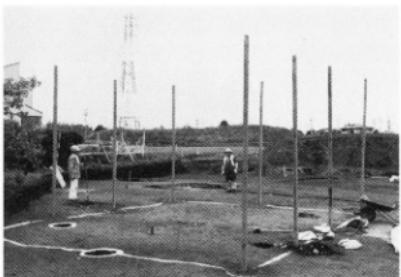
柱穴の掘り下げる作業



写真図版31 RB002 堀立柱建物跡③



復元作業開始



柱立て終了

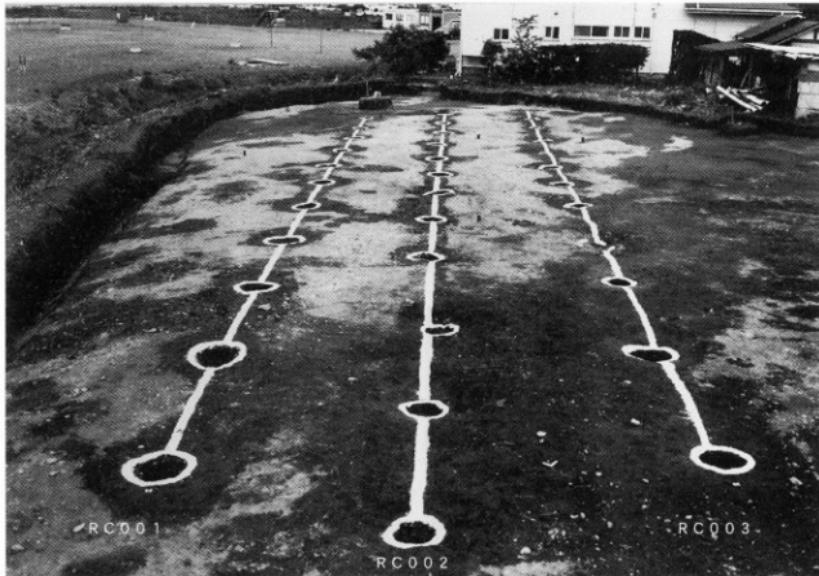


柱上げ作業

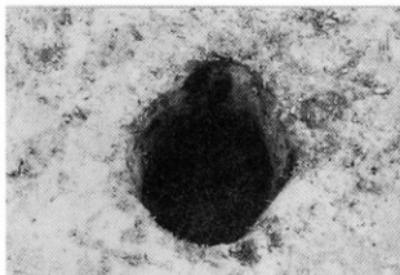


R B 0 0 1 堀立柱建物跡 復元完成（想像）

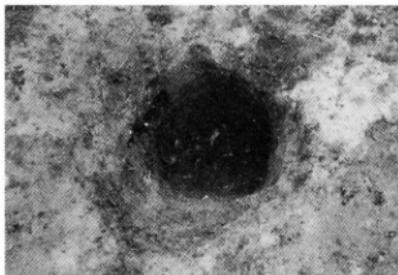
写真図版32 堀立柱建物跡の復元（R B 0 0 1）



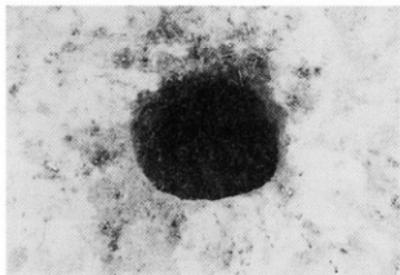
柱穴列全景（北西から）



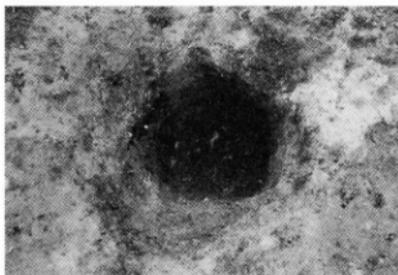
RC 001-P1 平面



P 2 平面

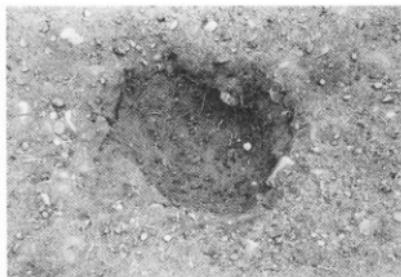


P 3 平面



P 4 平面

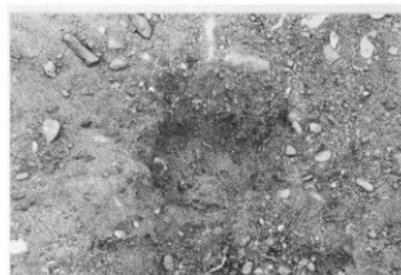
写真図版33 柱穴列（RC 001～003）①



RC 001-P 5 平面



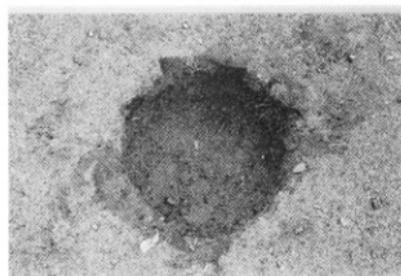
P 6 平面



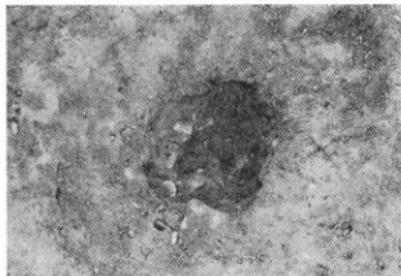
P 7 平面



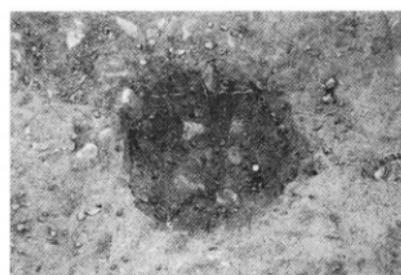
P 8 平面



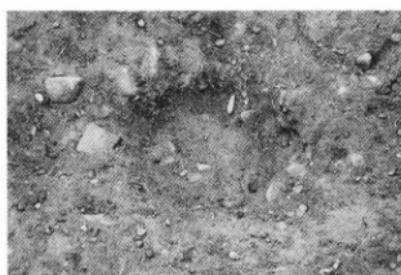
P 9 平面



RC 002-P 1 平面

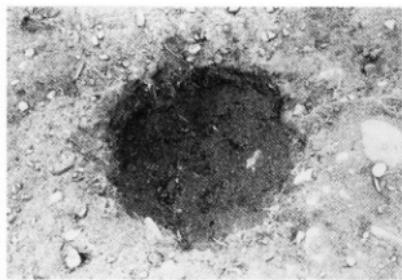


P 2 平面

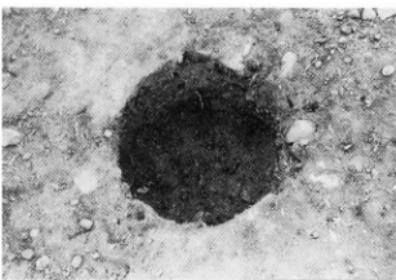


P 3 平面

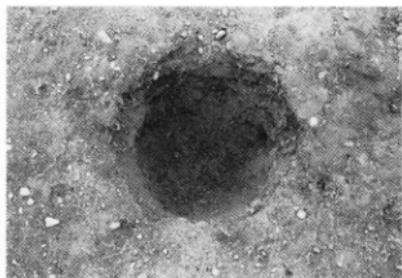
写真図版34 柱穴列 (RC 001~003) ②



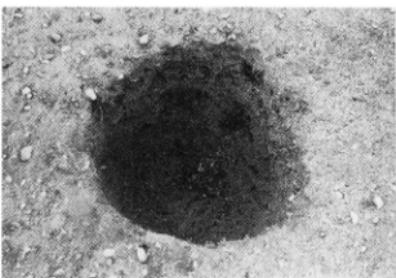
RC 002 - P 4 平面



P 5 平面



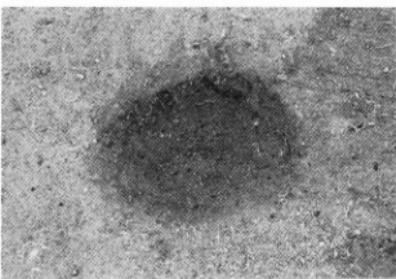
P 6 平面



P 7 平面



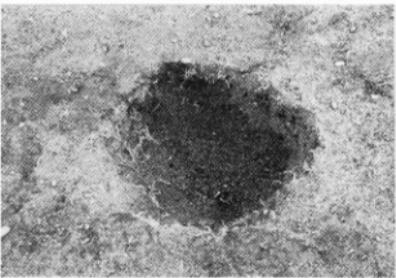
P 8 平面



P 9 平面

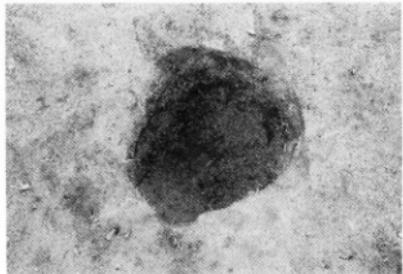


P 10 平面

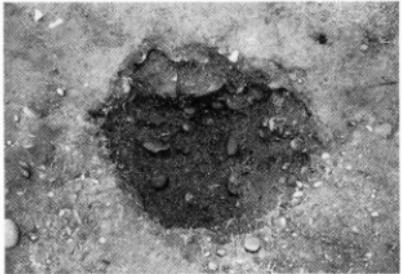


P 11 平面

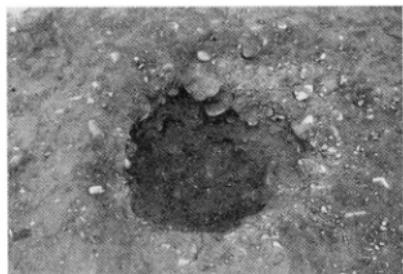
写真図版35 柱穴列 (RC 001~003) ③



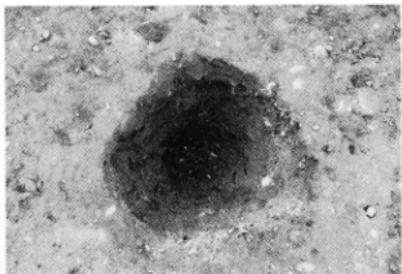
RC 002 - P12 平面



RC 003 - P1 平面



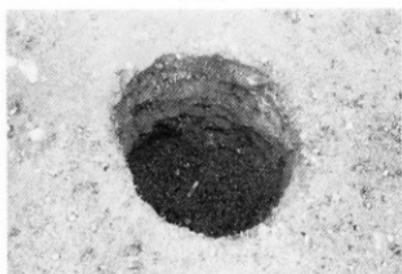
P2 平面



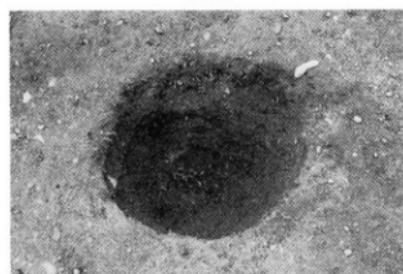
P3 平面



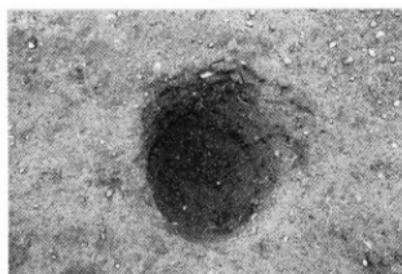
P4 平面



P5 平面

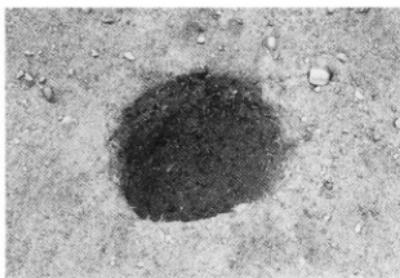


P6 平面

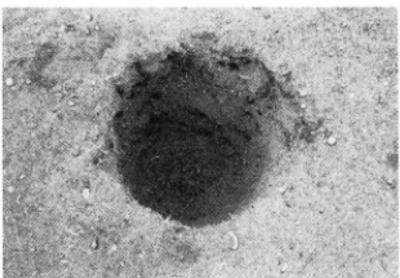


P7 平面

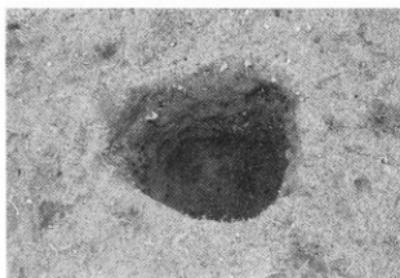
写真図版36 柱穴列 (RC 001~003) ④



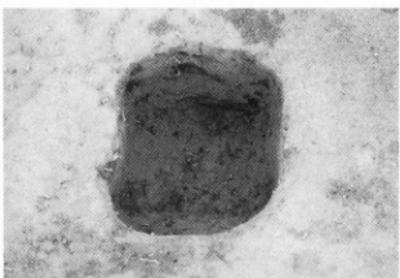
RC 003 - P 8 平面



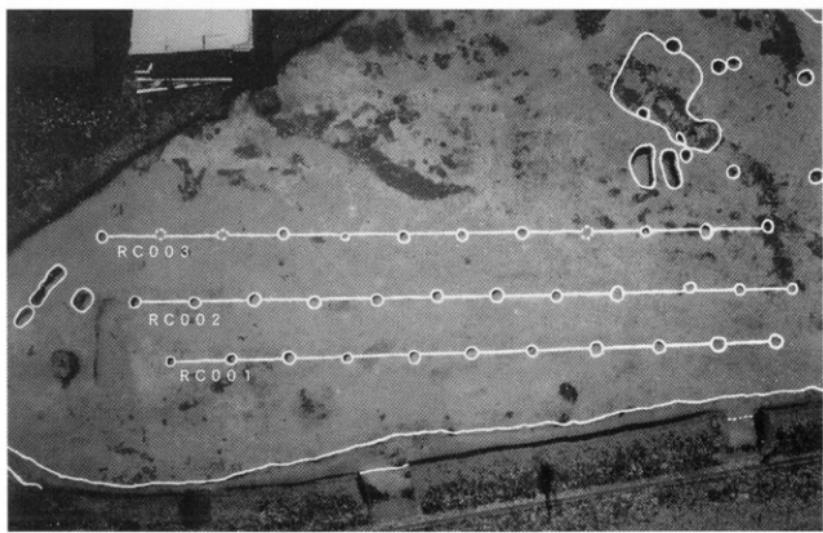
P 9 平面



P 10 平面

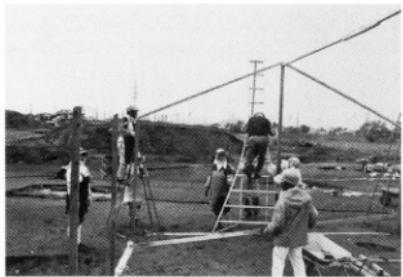


P 11 平面



柱穴列全景（北東から）

写真図版37 柱穴列 (RC 001~003) ⑤



建物復元作業



現地説明会



現地説明会

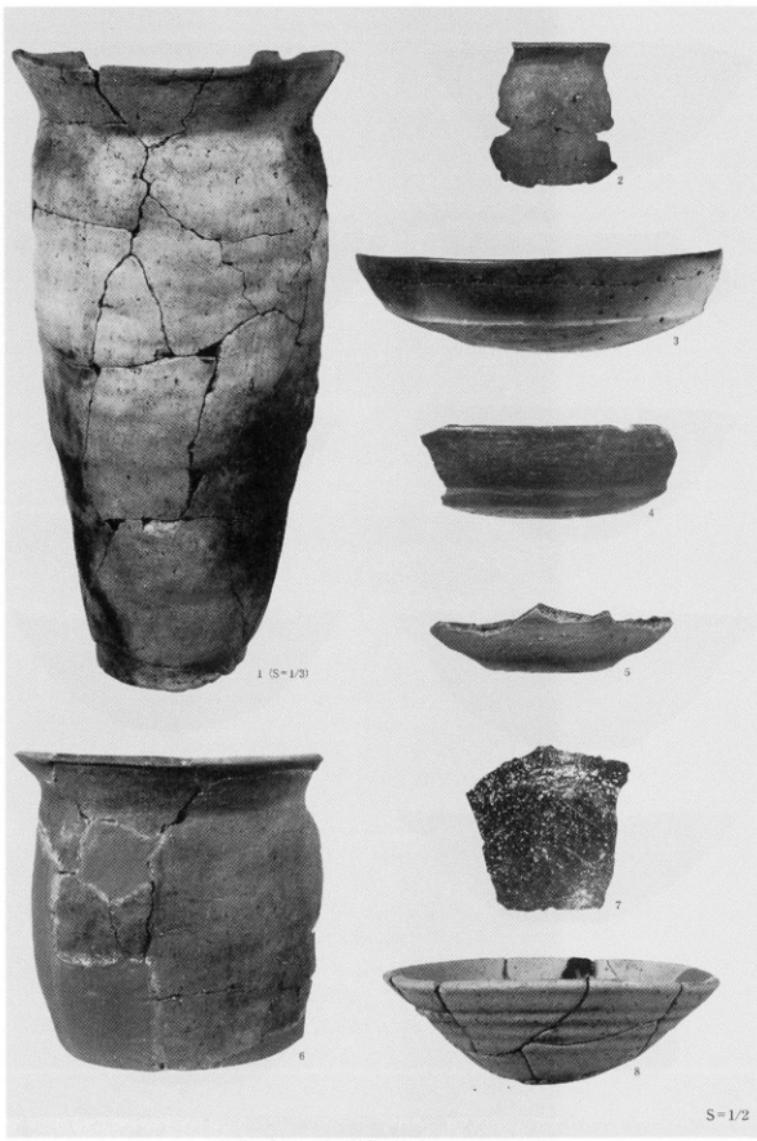


ラジコンヘリによる空撮

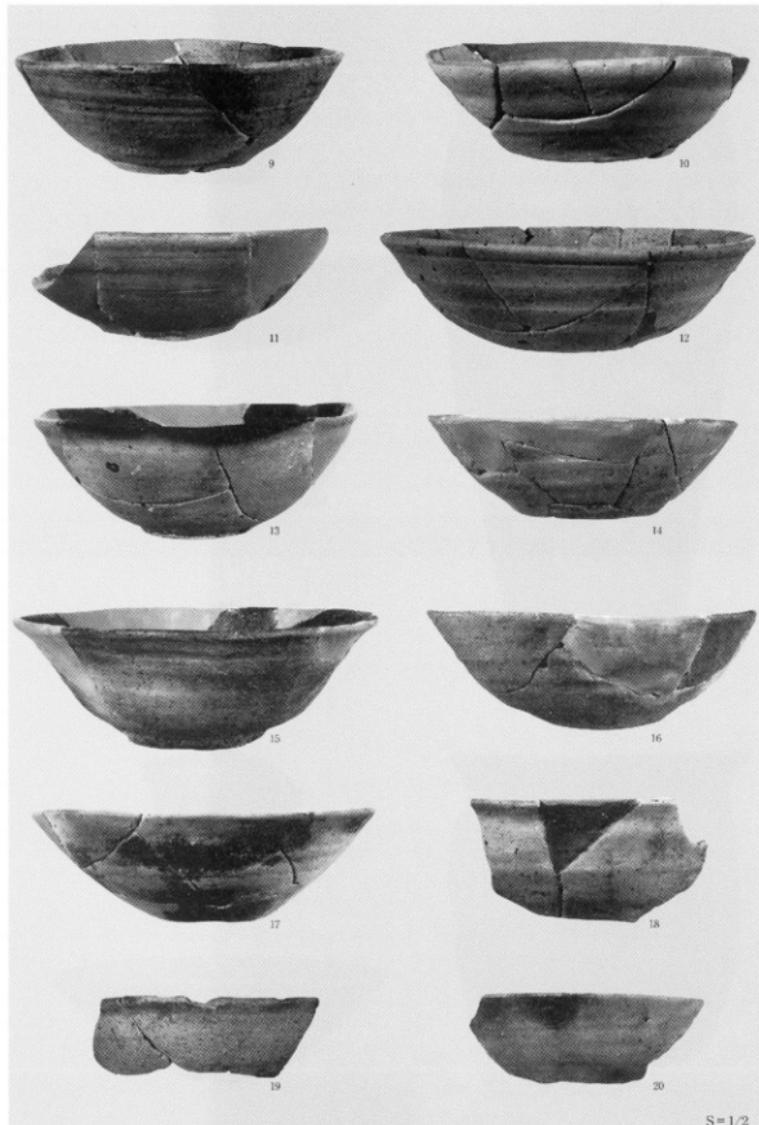


完掘全景（北西から）

写真図版38 現地説明会・空撮・完掘全景

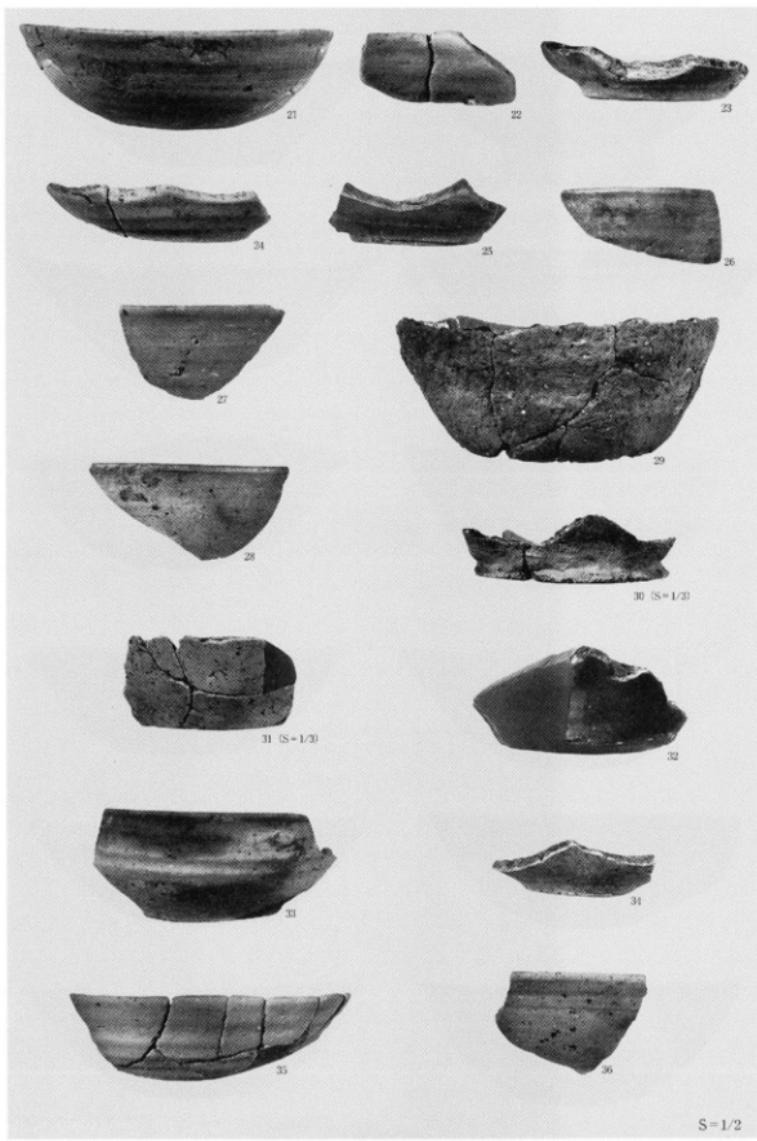


写真図版39 出土遺物 (RA 014~017)

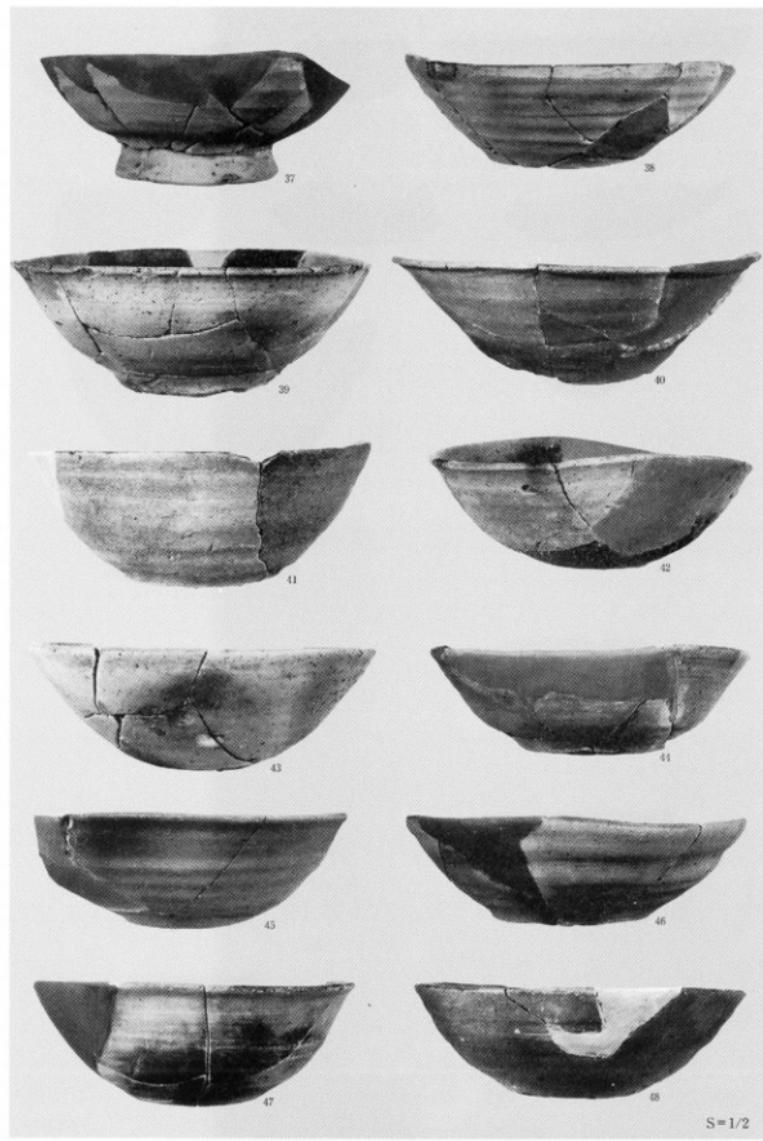


写真図版40 出土遺物 (R A 0 1 7)

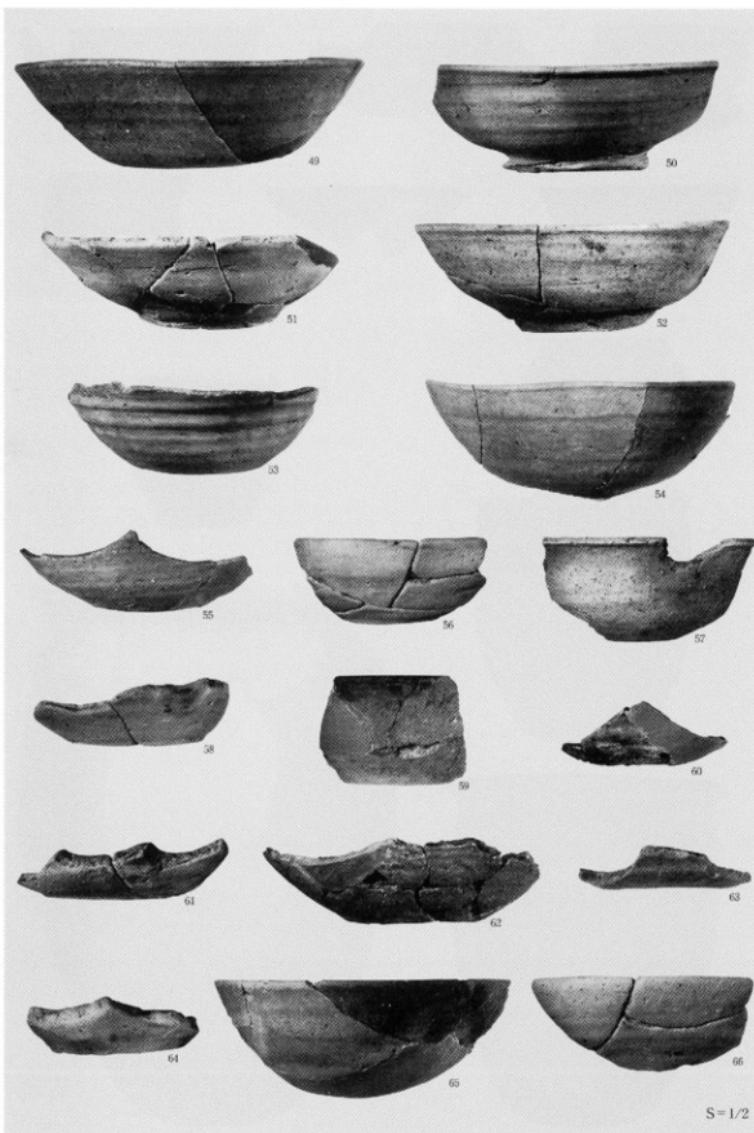
S = 1/2



写真図版41 出土遺物 (R A 0 1 7)

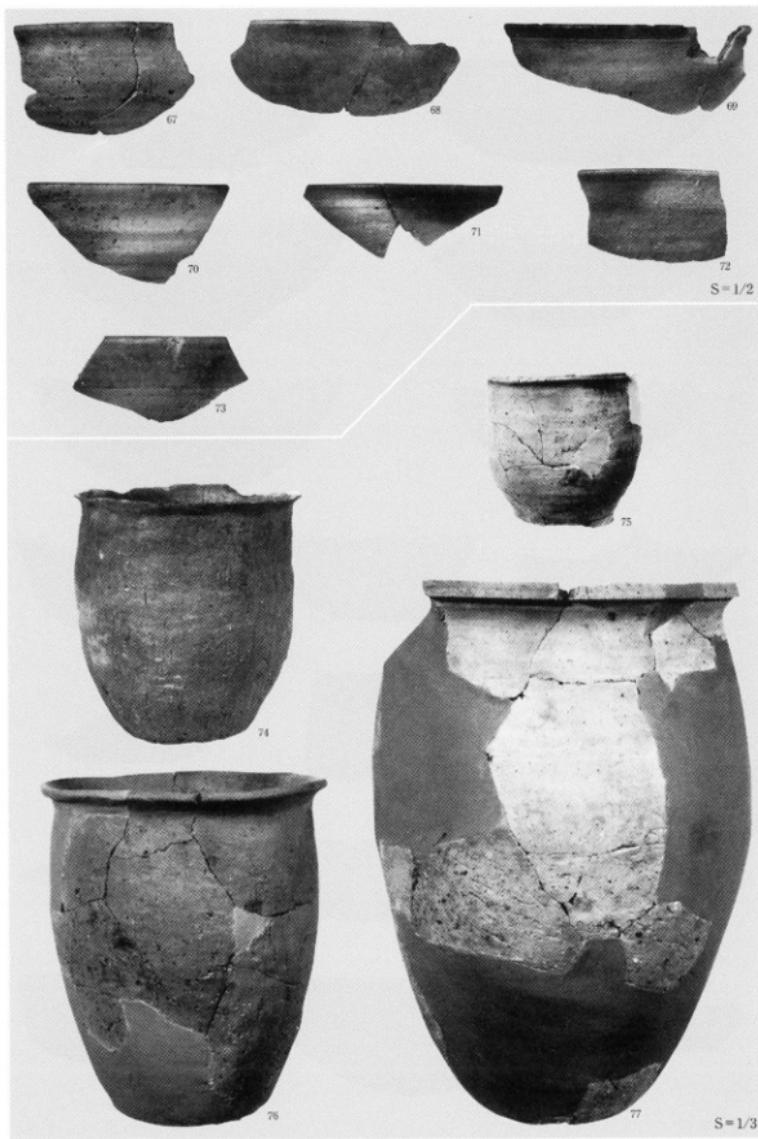


写真図版42 出土遺物 (R A 0 1 8)



写真図版43 出土遺物 (R A 0 1 8)

S = 1/2

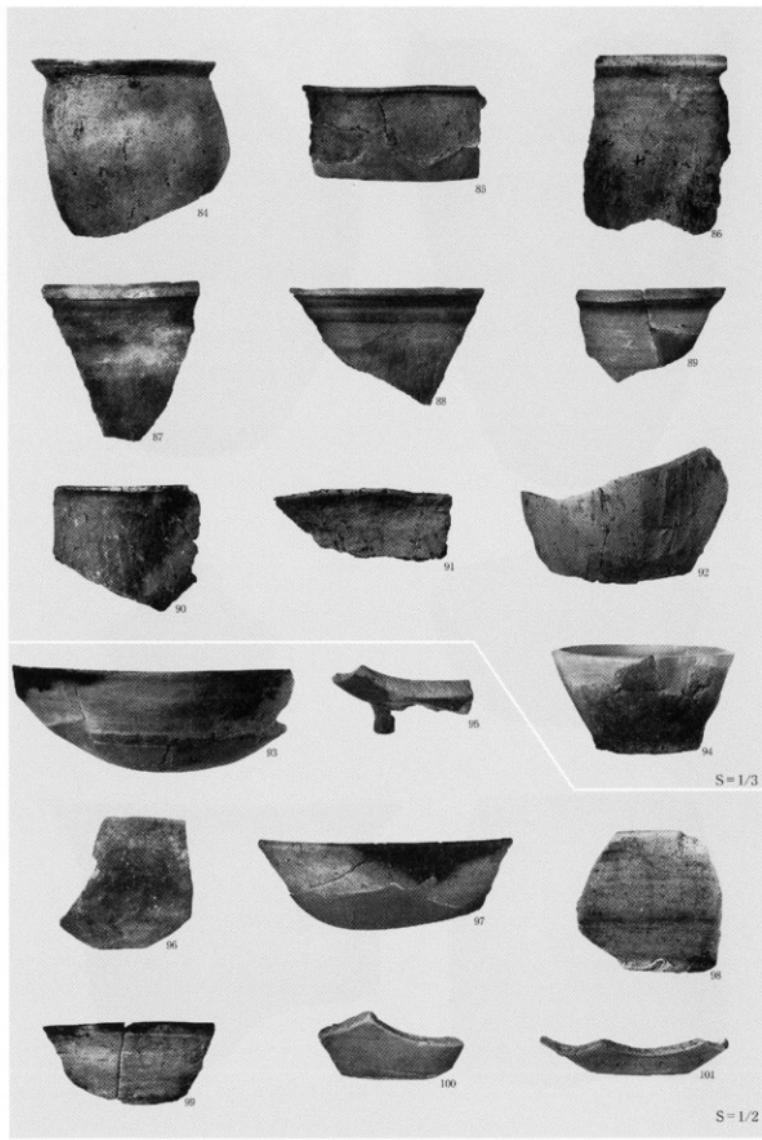


写真図版44 出土遺物 (RAO18)

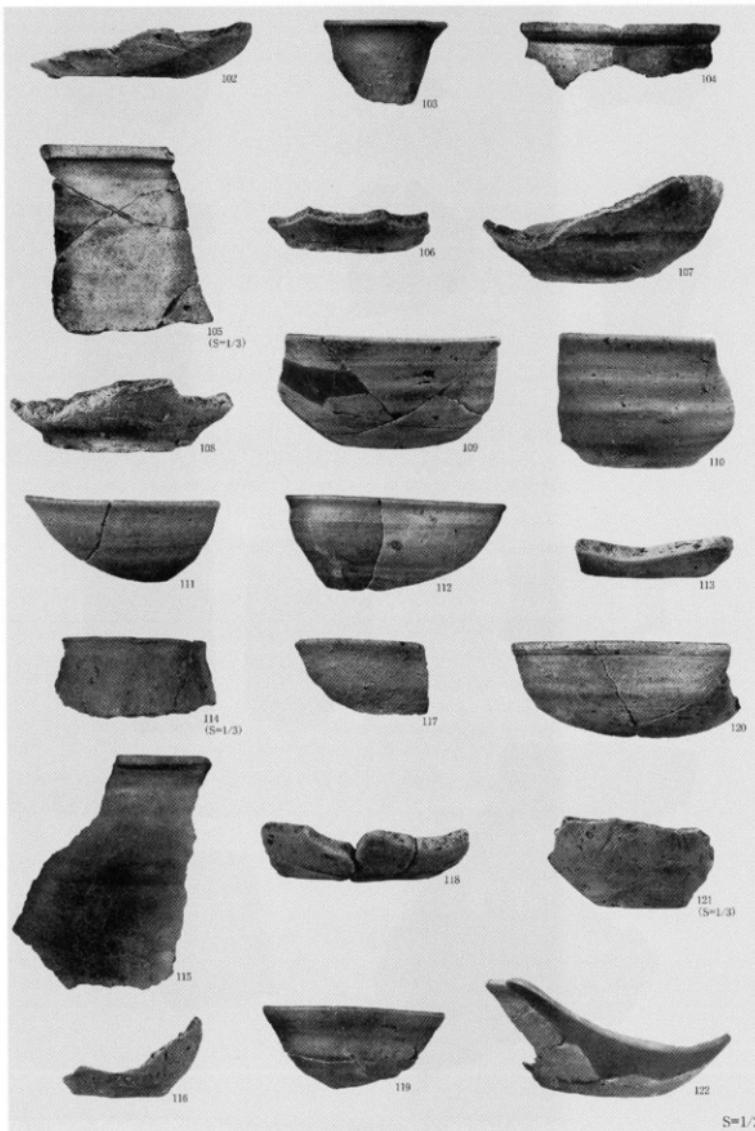


写真図版45 出土遺物 (R A 0 18)

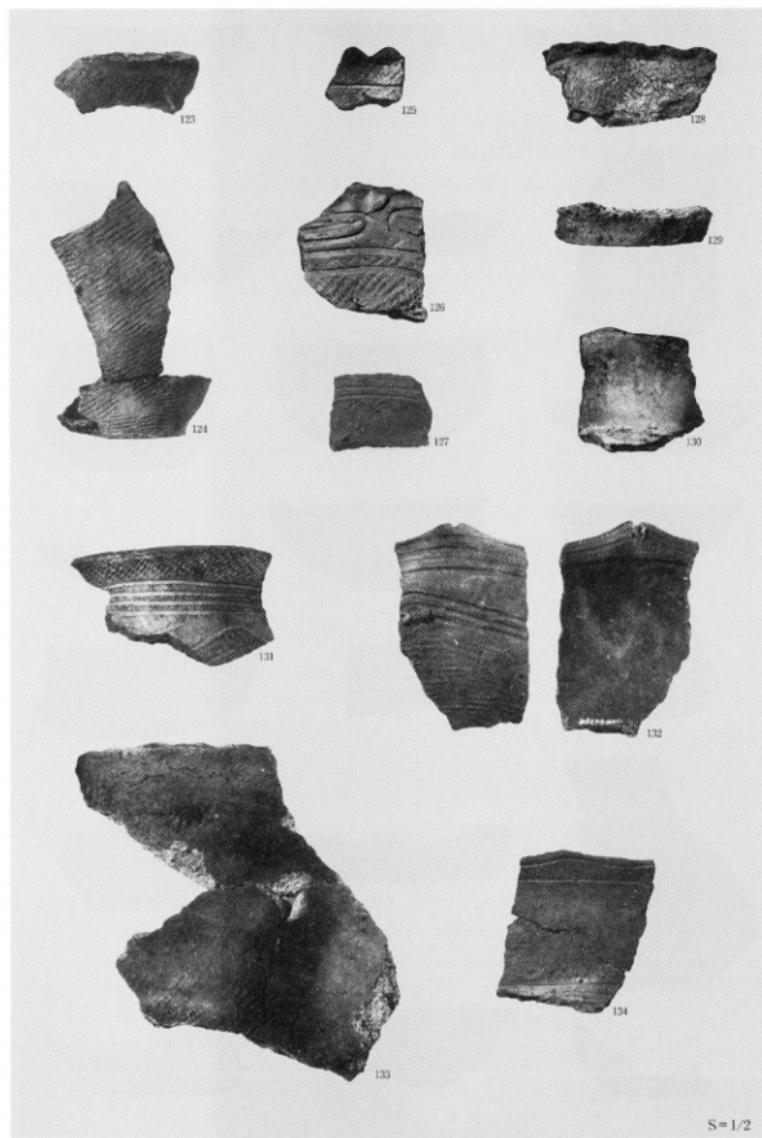
S=1/3



写真図版46 出土遺物 (R A 0 1 8 ~ 0 2 0)

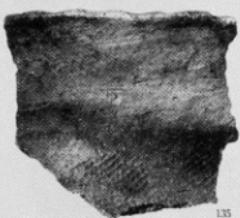


写真図版47 出土遺物 (R A 0 2 0 ~ R G 0 1 1)



写真図版48 出土遺物（弥生土器・遺構内、外）

S = 1/2



135



136

S = 1/2



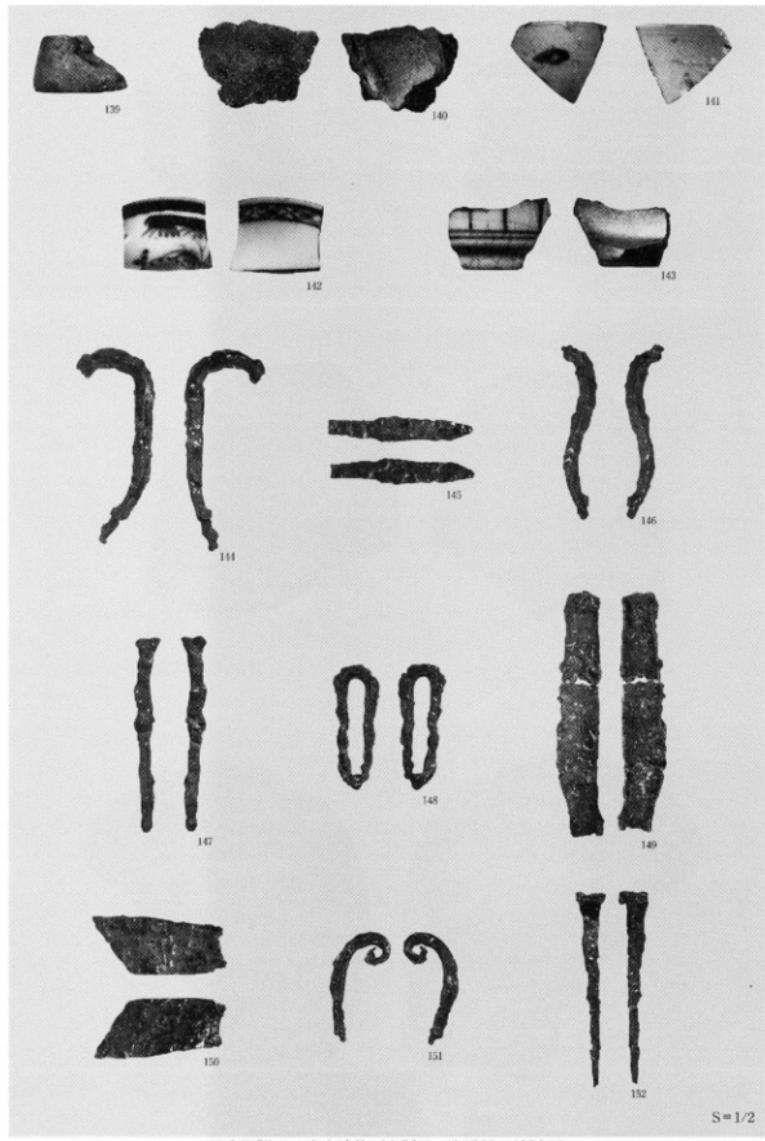
137



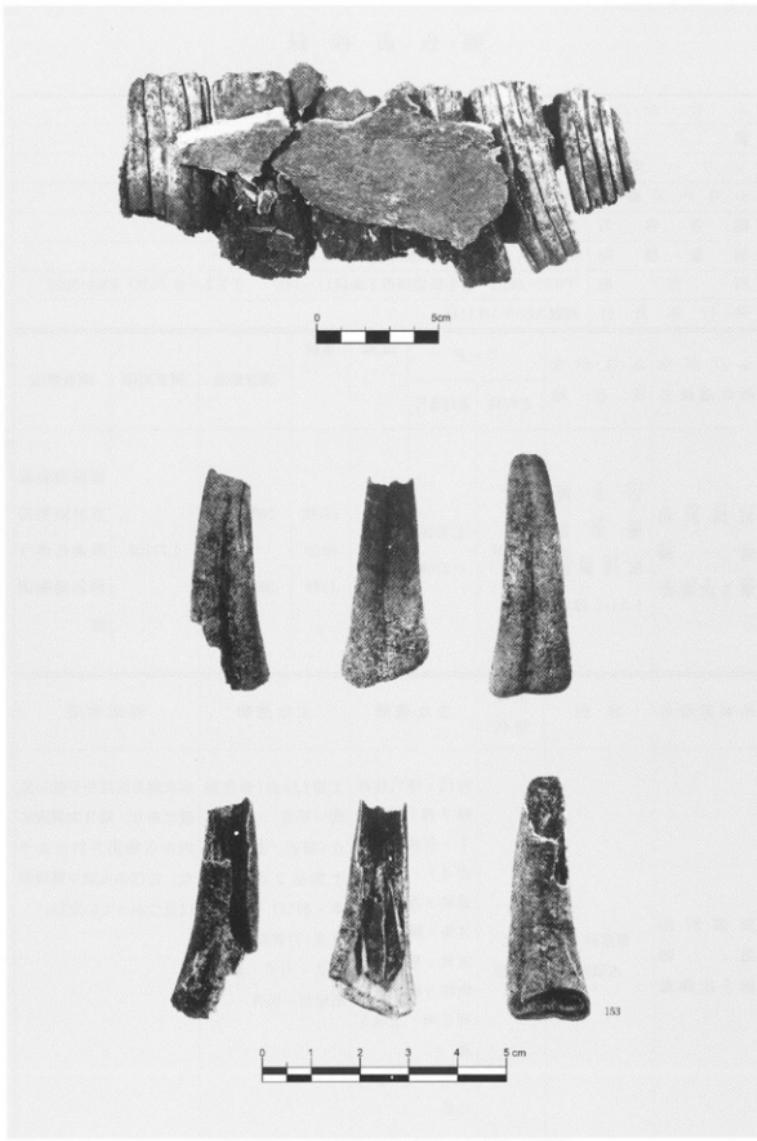
138

S = 1/3

写真図版49 出土遺物（弥生土器・石器・石製品）



写真図版50 出土遺物（土製品・陶磁器・鉄製品）



写真図版51 出土遺物（RD078 土坑内・馬骨）

報告書抄録

ふりがな	いいおかさわだいせきだいごじはぐつちょうさほうこくしょ
書名	飯岡沢田遺跡第5次発掘調査報告書
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第419集
編著者名	半澤武彦
編集機関	財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019 (638) 9001-9002
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
飯岡沢田遺跡 第5次調査	岩手県 盛岡市 飯岡新田 1-81-2 ほか	LE16 03201 -2169	39度 40分 42秒	141度 08分 13秒	20020409 ~ 20020605		1,773m ²	盛岡南新都市計画整備事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
飯岡沢田遺跡 第5次調査	集落跡・古墳群	古代・近世	古代：竪穴住居跡7棟(古墳末1・奈良2・平安4)・竪穴状造構3基・溝跡3条・周溝1基 近世：掘立柱建物跡2棟・柱穴列3列・土坑1基 時期不明：土坑15基	土器136点(弥生前期～平安)・石器2点(磨石・敲石)・土製品2点(紡錘車・羽口)・鉄製品9点(刀劍類・付隨金具・刀子・釘)・陶磁器・馬骨	本次調査区はやや低い位置にあり、第3次調査区内から検出されたような、古代の古墳や墓塚群は見つかっていない。

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第419集
飯岡沢田遺跡第5次発掘調査報告書

盛岡南新都市計画整備事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成15年3月28日

発行 平成15年3月31日

発行 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
TEL (019) 638-9001・9002
FAX (019) 638-8563

印刷 株式会社 阿部印刷
〒020-0873 岩手県盛岡市松尾町2-2
TEL (019) 624-2242
FAX (019) 624-0177

